

NOT FOR SALE

はたらく魔王さま!

著/和ヶ原聡司 イラスト/029

©2014 SATOSHI WAGAHARA

 **電撃文庫**
(毎月10日発売)



和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

11



電撃文庫
DENGAKI BUNKO

勇者、無職の 借金まみれになる!?

しかも勇者のせいで魔王さまが出社拒否!!

庶民派ファンタジー第11弾!

はたらく魔王さま! 11

魔王たちの尽力で異世界エンテ・イスラから無事帰還した恵美。しかし長期の無断欠勤により、テレアポのバイトをクビになってしまう。追い打ちをかけるように、魔王は救出に掛かった経費を払えと、請求書片手に恵美へと迫る。その額、なんと三十五万円！ 悪魔に借金などプライドが許さないのか、恵美は貯金を崩しながら新たなバイトを見つけ、返済しようとするのであった。

一方その頃、大家のミキティによって病院に隔離されていた漆原の身体には、ある異変が起きていた……。

フリーター魔王さまの庶民派ファンタジー第11弾。勇者の新たなバイトのせいで、勤勉な魔王がまさかの出社拒否に!?

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

11



わ-6-11



はたらく魔王さま! 11

和ヶ原聡司



電撃文庫



9784048665544



1920193005707

ISBN978-4-04-866554-4

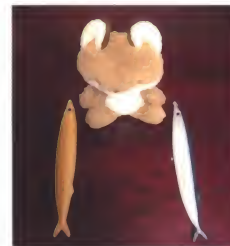
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行 ● 株式会社 KADOKAWA

定価: 本体570円

※消費税が別に加算されます



わ が はらさと し
和ヶ原聡司

「分身する和ヶ原に呆れる相棒」

和・超和「『11 巻! 11 巻!』」
相「この流れは読めていたから仕事に戻れ」
和「金色のがやるよ!」 超和「普通のがやるよ!」
相「どっちでもいいから仕事に戻れ!」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま! 1 ~ 11

イラスト: 029

あなたは紫の髪の漆原、蒼銀の髪の漆原、どちらがお好みですか? (金の斧銀の斧風)



はたらく魔王さま! 11

和ヶ原聡司

電撃文庫 2736

はたらく魔三太

和ケ原聡司

イラスト

Satoshi Wakahara

Illustration ■ Oniku

II





CONTENTS

序章

P010

魔王と勇者、盛大にすれちがう

P019

魔王と勇者、立ち位置にこだわる

P093

魔王と勇者、遅くなった約束を果たす

P213



『私とあなたの子には、

いずれこの世界を覆う『魔』を打ち払う力がある。

その力を、今ここで守らなければならない』



SUZUNO KAMAZUKI

魔王と勇者、盛大にすれちがう





魔王と勇者、立ち位置にこだわる





魔王と勇者、遅くなつた約束を果たす











序章

上野恩賜公園の『地獄の門』から、真奥、鈴乃、アシエスがエンテ・イスラに向けて旅立つた夜。

夜のしじまを切り裂き、救急車に乗せられ旅立った漆原を心配する余裕もなく、千穂は傍らに立つ人物を恐る恐る見上げた。

ビデオ映像で、一度だけ見たことがある。

志波美輝。真奥や芦屋がやたらと恐れている、ヴィラ・ローザ筆塚の大家だ。

こうして直接相対すると、確かに迫力のある人物であることは否めない。

だが天使や悪魔達に比べて何か大きく人を圧倒するような特別な力を感じさせるわけでもなく、千穂は、ちよつと派手な格好をしたどこにもいる中年の女性、というイメージしか抱くことができなかった。

むしろ今この状況に何か問題があるとすれば、初対面の志波と二人、アパートに残されてしまったという点だろうか。

先程まで千穂は、自分の元雇い主で、志波の姪である大黒天祢から『世界の真実』を聞き出

している途中だったのだ。

天祢は真奥の正体や、エンテ・イスラから来た悪魔達、さらにはセフィラや生命の樹のことを詳しく理解しているらしい。

つい先ほど、芦屋、恵美、アラス・ラムス達を助けるために異世界エンテ・イスラへと旅立った真奥と鈴乃の代わりに、千穂が聞き取り調査を開始したのだった。

ところが突然の志波の来訪。そして千穂の意を汲んで天祢の話を盗み聞きしようとしてくれた漆原の突然の昏倒という事態に話は中断。

天祢は志波が現れたことで恐慌をきたしはじめると、漆原は魔王城で白目を剥いて人事不省状態。

結局志波の指示で天祢がどこかへ連絡すると、いくらか経たぬうちに救急車がやってきて、天祢と漆原を連れていってしまったのだ。

そして深夜も二時を回らんとする頃、千穂は初対面の夫人と二人、ヴィラ・ローザ筆塚に取り残されているのである。

「天祢は」

「は、はいっ!？」

途方に暮れる千穂に、志波が顔を向けずに言う。

「前々から少々いい加減なところがありまして、何か失礼をいたしましたか?」

「そ、その……失礼なことと言うのは……？」

「セフィラの裔^{イサ}として、あなたに間違つたことを話したのではないかということだ」

「あ……」

千穂は虚をつかれる。

天祢は先程の話で、志波^{しは}を評して言っていた。

「このアパートの大家の志波美輝^{しはみき}は、セフィラから生まれた子だ」

「あ、あの、私……」

となれば、今日の前にいる夫人は、天祢以上に千穂が知りたい事実の核心そのものだ。

千穂は天祢から聞いた話の続きを聞き出すべく口を開こうとし、その瞬間、

「佐々木千穂さん」

名を縫いとめられた。

自己紹介をしたことがないはずだとか、初対面のはずだとか、そんな問題ではない。

今、千穂は言葉を呑んだ。魂が初手から屈服したのを感じた。

名を呼ばれた途端に、千穂の意気の全てが、志波に対して膝を折ってしまったのだ。

それは幼い頃、やつてはいけないことをして母に叱^{なぐ}られた、そんな心のありようを思い出さ

せた。心が命じている。目の前の存在に逆らうことは魂が許さない。

「一つだけ確認します。あなたが事実を知ったとして、あなたに変えられることなど何一つあ

りません。それを分かって、それでも全てを知ろうとなさいますのね？」

「わ……た……」

「あなたはこの世界に生まれたなら特別な力を持たない、それ故に特別な人間。どうやらそ

の身に宿したわずかな聖法^{せいぽう}気の意味もご存知ない様子。全てを知ること、あなたの心は己の

無力さに耐え切れず、壊れてしまうかもしれない。それでも、知ろうとなさいますの？」

問われていることの意味は分からない。

分かるはずもない。

なぜなら、知ろうとしなければ、きっと今志波の言う言葉の意味だって、理解できない。

「私は……」

「ええ」

「知って無力感に苛^こまれても、知って後悔するような恐怖を感じたとしても」

屈服した魂を立ち上げろ。決して引いてはいけない。

共に戦う力も、共に戦う知恵も、共に戦う命すら持ち合わせない千穂ができることなどたか

が知れている。

だがそのたかが知れていることを為すこそが、千穂が戦うべき道なのだ。

何もできないからとそこから逃げて、ただ全てを座して静観^{じやんかん}していても、彼らの傍^{そば}にはい

られないのだ。

「私は知ることから逃げたくない。知ることから逃げれば、そこで全部終わってしまう気がして」

「……」

「知って、私自身に何もできることがなくても……」そのことを知っている私』という状況が、確かに生まれます。私は……」

千穂は、夜の静寂と、魂を屈服させる圧力を、その細い体で、必死に撥ねのける。

「私のことを大切に思ってくれる力を持った誰かが、『知っている私』を糧にして、駒にして、状況を変えるために戦ってくれることを信じています」

その瞬間、千穂は、自分の心を縛ろうとする力がほんの少しだけ緩んだような気がした。

そして志波は、驚嘆の表情で千穂を見下ろす。

「……なんという……」

志波の手が、黄金の鎖のハンドバッグを強く握る。

「すいません、生意氣を言って……別に私、なんの力もないし、そこまで高尚な思いがあつて、こんなこと言っただけじゃありません。ただ……」

千穂は、ヴィラ・ローザ笹塚を見上げて言った。

「大好きな人達と、いつまでも仲良くしたい。ただそれだけのために、ここにいます」
「いいえ、その思いを抱いて、その思いのために戦える人は決して多くはない。『彼女』があ

なたに目をつけた理由が、なんとなく分かりました」

「……え？」

いつの間にか千穂の心を縛る強い力は消えていて、志波は千穂の前に手を差し出す。

「今日は、私の家にいらつしゃい。今からご自宅に帰るわけにも参りませんでしょうし、私も店子の留守に勝手に上がり込むのは気が引けますから」

「は、はい……」

確かに今、真奥達の二〇一号室には入れないし、鈴乃に二〇二号室の留守を任された天祢は救急車に乗って行ってしまった。

千穂は志波の提案に素直に従い、ヴィラ・ローザ笹塚の隣の敷地に建つ洋館へと連れられていく。

大きな庭と千穂の家の三倍はあろうかという建物は、都内にあつては豪邸の部類だろう。

まるでドラマにでも出てきそうな内装の玄関ホールから、千穂は瀟洒な応接室らしき場所に通される。

「夜も更けておりますが、私もあなたから伺いたいことがございます。少し、お付き合いくださいませね？」

志波は千穂を絹の刺繍が施されたソファに座らせる。

そして落ち着かない様子の千穂に、温かな湯気がくゆる紅茶を淹れてくれた。

緊張しきりの千穂だったが、柔らかく甘い香りの紅茶を一口含んで、ほんの少しだけ肩の力を抜くことができた。

「さて、天称から聞いたかもしれないませんが、この世界、つまり地球にもかつて生命の樹と呼ばれる存在があり、樹から生まれた世界組成の宝珠セフィラが、人類の礎を築くべく生み出されました」

「は、はい……」

千穂はそこで、鈴乃の部屋にメモ帳とペンを置いてきてしまったことに気づくが、

「よろしければ、書き留めてくださって結構ですよ」

と、志波がまたどこからともなく取り出したメモ帳と羽ペン、そしてインク壺を差し出してくる。

「あ、ありがとうございます」

使ったことのない羽ペンとインク壺などという文具に四苦八苦しながらメモを開始する千穂だったが、何かを書きはじめる前に志波が放った最初の一言の衝撃が千穂を打ちのめした。

「原則として全てのセフィラは、生まれた世界に留まらねばなりません」

その言葉の意味を理解して、千穂は思わず自分の右手を隠そうとするが、そんなことでこまかされる志波ではない。

志波は真っ直ぐ千穂の右手の、イエソドの欠片が嵌まる指輪に視線を置いて、言った。

「最近地球に『地球のものではないセフィラ』が訪れました。今は気配がありませんが、元いた場所にお帰りになったということではなさそうですね」

それは、『地球のものではないセフィラ』とは。

「セフィラは世界組成の宝珠。宝珠を失えば、その世界の人類は緩慢に減びます。今日明日のことではないにしろ、セフィラはなるべく早いうちに元の世界に戻らねばなりません」

千穂の知る限りそれは、三人の人間の姿を取っていたはずだ。

一人は、悪魔に連れられた少年、イルオーン。

一人は、真奥と共にある少女、アシエス・アール。

そして。

恵美と真奥の『子』であり、千穂にとってもかけがえのない存在である赤子。

アラス・ラムスだ。

魔王と勇者、盛大にすれちがう



銀行の預金^づが尽きた。

理由は至極単純。お金を使ったからである。

何に使ったかと言えは、まずは自分のものではない新しい携帯電話。安価な機種を選んだが、新規購入ではなく機種変更だったため、型落ちの機種でもかなりの出費となった。

次に衣類。これまで購入したことのない中年男性用の衣類をある程度まとまった数購入して、これがまた下着から靴^{くつ}まで全て揃えようとなると、手頃なものを探してもなかなか重い出費である。

さらには『借金返済』である。最初は自分のこれまでの貯えに自信があつたのだが、『返済の要求度合い』が自分の想像を超えており、これが意外に今後の計画^{たけ}を圧迫^{おさ}している。

そしてそれらを一度に行ったために、預金^{ぞく}が底をついたのだ。

「そ、その、もう少し計画的にお金を使うべきではないか？」

壮年の男性の恐る恐ると言った様子の声が彼女の耳を打つ。

「じゃあ私が、あいつにいつまでも借りを作ったままでいいと思うの？　いつまでも悪魔のような取り立てを甘んじて受けろっていうの？」

「そ、そういうことではなくてだなあ」

慎重^{じんじゆう}に言葉を選ぶ声が、たしなめるように言う。

「当座の資金が足りないなら、勤め先がなくなつた今、来月以降収入を得られる保障もないん

だ。私の貯えから出したり、分割して返すという方法もあるんじゃないか？」

「私、借金って嫌いな」

「いや、それは私もそうだが……」

「大体この借りをずっと清算しないでしたら、利子がどうなるか分かつたものじゃないわ」

「だが」

「それに、今私が考えているのは、私の責任で私が皆から借りたものの返済の話なの。これを自分だけの力でまっさらにしなないと、思い切つて次のステップに踏み出せないのよ」

高級マンションの広いリビング。その中央に、可愛らしいクロスをかけたテーブルを差し挟んで座る、厳しい顔つきの娘と困つたような顔つきの父がいた。

困つたような顔つきの父はやおら立ち上ると、洋間の奥の窓にかかったカーテンを開く。

「では、こうしてはどうだい、エミリア」

厳しい顔つきの娘をエミリアと呼んだ、困つたような顔つきの父は、本来それなりに厳ついであろう面差しに諷刺^{ふうさ}をにじませつつ、窓越しの街並みを見て言った。

「せめてあのアパート、ヴィラ・ローザ笹塚に引っ越してこないか？　『彼ら』はともかく、

ベルさんやササキさんなど、笹塚はお前にとっても良き友人が多い土地なのだろう？」

「……」

エミリアと呼ばれた娘は、父に聞こえないように小さくため息をつくとき、穴が開くほど脱^だん

でいた預金通帳から視線を離して首を横に振った。

「言ったでしょ？ 私は今すぐにはここを離れることができないの」

娘は立ち上がると、父の横に並ぶ。

「なんだかんだ言ってこの部屋にもこの街にも私なりに愛着があるし、それに今の状況じや引越しするお金も出せないもの。事情があつて家賃はあのアパートと五千円しか変わらないし、節約して過ごせば先月分までの仕事のお給料はもうすぐ入ってくるんだから、どんなに早くてもそれまでではどうしようもないの」

「……そうか」

「皆のおかげで私の『敵』は当面いなくなったし、早めに次の仕事を見つければ、どうとでもなるわ」

娘の声色からは、無理をしたり空元気を振り絞っているような様子は感じられなかった。

だが、今言ったことが理由の全てではなさそうだしということもまた、父親の勘は確かに感じ取っていた。

娘は何かもう少し別の理由で、この場所を離れたくないのではないのか。

だが、今や娘は、多くの修羅場を潜り抜けた一人前の大人である。今の自分には、その理由を突つ込んで暴くだけの勇氣も資格もない。

「私よりも、お父さんの方はどう？ 新しい生活……って言うのもおかしいけど、笹塚暮らし

はうまくいきそう？」

「そうだなあ。アシエスは夜空の星が前にも増して見えないと文句を言っているよ」

「都心だものね」

娘は苦笑するが、すぐに声色を低くして、言った。

「それで、どう？ 足跡は掴めそうなの？」

その問いに、父も重苦しい声で応える。

「いや……皆目。手がかりも何もない今の状況では……」

「そう。でも、確かなのよね？」

娘は、エミリア・ユステイーナは、父、ノルド・ユステイーナにはつきり向き直ると言った。

「お母さんが……ライラが地球にいるのは」

「……その、はずだ」

ノルドの声は、自信なく揺れる。

父の頼りない横顔を見て、エミリアは口を引き結ぶ。

「ごめんなさい。お父さんを責めてるわけじゃないの。ただ……」

「いや、仕方ないことだ」

エミリアは、勇者でなくなつてしまった遊佐恵美は、永福町の街を見下ろしながら呟く。

「ライラが一体どういうつもりで、何を目的に動いているのか、今になつてもさっぱり分から

ないのが不気味で仕方ないわ」

※

遊佐恵美を取り巻く環境は、この一ヶ月でまさしく驚天動地の勢いで変化した。

父と母の足跡を通るエンテ・イスラ帰還の旅に赴いた恵美は、予想だにしないトラブルに巻き込まれ、予定の期間内に日本に帰ることができなかった。

エンテ・イスラ全土に宣戦布告した東の大帝國エフサハーン、新生魔王軍與隆を企む魔界の主戦派であるマレブランケ一党、そしてその二勢力を利用し暗躍していた天界勢力とかつての仲間オルバ・メイヤーの陰謀に巻き込まれ、囚われの身となったためだ。

魔王サタンこと真奥貞夫は、恵美と、常に彼女と共にある、世界組成の宝珠イエソドの欠片から生まれたアラス・ラムスがなんらかのトラブルに巻き込まれていると知る。

しかし真奥が手を拱いている間に彼の腹心にして右腕たる悪魔大元帥アルシエルこと芦屋四郎と、恵美の父親であるノルド・ユステイーナまでが、天界の陰謀に巻き込まれエンテ・イスラに連れ去られてしまった。

真奥は、隣人で聖職者で新生悪魔大元帥（仮）である鎌月鈴乃と、同じくイエソドの欠片から生まれた少女アシエス・アラと共に、芦屋とアラス・ラムス、そして己の野望である世界

征服の最大の障害たる恵美を救い出すべくエンテ・イスラへと親征する。

オルバと天界の目的は、勇者エミリアが東大陸から魔王軍を駆逐する状況を、アルシエルとマレブランケ達を使って再現することだった。

しかし芦屋は天界のその目論みを見抜き、天界勢力の一人であるガブリエルが、さらにその再現劇とは別の思惑を持っていることを感じ取る。

あらゆる思惑が激突したエフサハーン皇都・蒼天蓋の戦いに於いて、場をさらったのは真奥とアシエスだった。

真奥は恵美と芦屋を戦場から救い出し、その裏で鈴乃は宗教裁判にかけられていた恵美の仲間、エメラダを解放した。

その結果、真奥と鈴乃は恵美に迫るエンテ・イスラの各勢力の手を組織的に封じる土壌を作ること成功する。

オルバに心の弱みを突かれたこと。自分が宿敵であるはずの真奥を心から信頼してしまっていることを自覚したこと。さらには二度と叶わないはずの父との再会を果たしたことにより、恵美は望むと望まざるとに問わず、勇者としての己を失った。

エンテ・イスラ全土を脅かした魔王サタンを討伐する使命を帯びた勇者エミリア・ユステイーナは、もはやどこにもいない。

だが父と再会し、真奥への憎しみが薄れたからと言って、全てが丸く収まるわけでは決して

なかった。

自分と、真奥と、多くのエンテ・イスラの民を今の状況に置いた元凶とも言える存在、恵美の母である大天使ライラの行方が杳として掴めない。目的もはっきりしない。

そしてオルバと天界が、お互いを利用しながら恵美と芦屋の東大陸解放戦争を再現して、最終的に何を為そうとしていたのかも結局分からないまま。

さらにはガブリエルやカマエル、ラグエルといった天使達の背後にいると思われる、謎の宇宙飛行士は一体何者なのか。

魔王討伐という、気持ちの推進力を失ってしまった恵美の前には、泳ぎ切るにはあまりに広く、潮目の読めない謎の海が横たわっているのだった。

※

「まー！ たーだいまー！」

眉根を寄せる恵美の背後に、明るい声がかかり、その声を聞いて恵美の表情が少し和らぐ。そんな娘の横顔を複雑そうに見ながら、ノルドも声の主を振り返った。

「お帰るなさいアラス・ラムス。あら、その風船どうしたの？」

アラス・ラムスの手には、黄色の風船が抱えられていた。持ち手のプラスチックの柄を持つ

のではなく、スイカでも抱えるように両手でしっかりと抱きしめている。

「駅前で配っていたのだ。インターネットモバイル回線の出店でな」

答えたのは、もちろんアラス・ラムスではない。

恵美のマンションまでノルドを護衛してきた鎌月鈴乃である。

「じいちゃー！ ふうせん！」

「お、おお……」

ノルドはぎこちない笑顔で、誇らしげに風船を掲げてみせるアラス・ラムスに頷いた。

アラス・ラムスは立場上恵美の『娘』ではあるが、血縁関係があるわけでもなし、アラス・ラムスの『妹』であるアシエス・アーラはノルドのことを『オトーさん』と呼んでいて、でも結局『まー』である恵美の父親である以上、アラス・ラムスの視点からノルドは祖父以外の何者でもないのである。

とっくの昔に『まー』であることを受け入れている恵美は、『じいちゃー』呼ばわりに狼狽える父を、本人以上に複雑そうな顔で見る。

「ベルもありがとう。アラス・ラムスはいいい子にしてた？」

「してた！」

「そうだな。とてもいい子だったぞ」

鈴乃が答えるよりも早く、アラス・ラムスが自己申告する。

万が一に備え、ノルドの行動には常に護衛がついていた。

ノルドはヴィラ・ローザ館の一〇一号室を今後の居宅とすることが決まっているのだが、それ以前からノルドが散歩が必要がある場合は、自由な時間が多い鈴乃が行動を共にしている。

恵美とノルドがお金に関する深刻な話し合いをするため、その間はアラス・ラムスを鈴乃が連れ出してきていたのだが、

「でもね、どーなつたべたのは、しーなの」

アラス・ラムスはい子ついでに散歩中のささやかな秘め事まで自己申告してしまった。

「あら！ お外でおやつ食べちゃったの？」

「しーなの！ ないしょ！」

「内緒、という言葉の意味からまず教えるべきだったかな」

アラス・ラムスは得意げに鈴乃を見上げ、その鈴乃は申し訳なさそうに苦笑して幼子を見下ろした。

「駅ビルのドーナツ屋の前で止まったまま梃子でも動かなくなっちゃってしまつてな。つい甘やかしてしまつた。すまない」

「うん、いいのよ。あとでお金払うわね。アラス・ラムス、ちゃんと鈴乃お姉ちゃんにお礼は言つた？」

「いった！ でもね、しーなの！」

アラス・ラムスは風船を抱えたまま、鈴乃を見上げて悪戯っぽく笑う。

鈴乃と二人だけの出来事を共有したことは分かつていても、それを誰かに秘密にするまでには至らないアラス・ラムスの幼さに、大人達はいい笑顔になつてしまう。

「アラス・ラムスの食事に差し支えないかどうか心が配だ」

「大丈夫よ。ドーナツ一個くらいじゃ、この子の食欲にはなんの影響もないわ」

「ならいいのだが」

鈴乃は額くと、顔を上げて恵美とノルドを見る。

「それで、どうなのだ。結論は出たのか？」

「いやそれが……」

「ちよつと厳しいけど、なんとかできないことはなさそうよ」

鈴乃の問いに、半ば助けを求めるような口調で応えようとしたノルドを、恵美は強い口調で遮った。

「しかしエミリア」

遮られたノルドの面持ちを見て、鈴乃はまた、先ほどとは違う思いで苦笑する。

「言つたでしょ。これは私自身の問題なの。大丈夫よ、今までのことに比べたら、仕事がないことや借金なんかトラブルの内にも入らないわ」

「だが……ベルさんもなんとか……」

きつぱりと言い切った恵美が説得するのは不可能と判断したノルドは鈴乃に助けを求めるが、鈴乃は小さく首を横に振る。

「エミリアがそうと決めたのなら、私からは何も言うことはありません」

「ありがとう、ベル」

「そんな……」

ノルドは狼狽え、恵美は心強そうに微笑む。

「さて、ノルド殿。そろそろ笹塚に戻りましょう。今日はこれからエミリアに來客がありますし、我々もこのあとの予定が詰まっています」

「あ、ああ」

「ではエミリア、アラス・ラムス、また」

「ええ、お父さんのこと、よろしくね」

「すずねーちゃん、じーちゃん、ばいばい！」

「う、うむ……」

鈴乃に促され、ノルドは仕方なくマンションを後にするが、それでも水稲町の駅までの短い距離の間に、何度もマンションを振り返る。

そんなノルドの様子を見て、鈴乃は言った。

「ノルド殿。エミリアのことが心配ですか？」

「え？ ああいや、今更私に心配されるほど……」

「私は心配です」

「エミリアも幼くな……は？」

消沈した様子のノルドは、鈴乃のあっさりした物言いに目を丸くする。

「どうせエミリアのことですから、先日の騒動で作った借りの全てを、自分の力だけで返さなければならぬとでも思っているのでしょうか？」

「ああそうだ。せめて私にも色々返させてほしいと言ったのがね……」

水稲町の駅の改札を抜け、駅のホームで電車を待つ鈴乃とノルド。

「エミリアは幼いうちの短期間に、あまりに多くのものを背負い過ぎました。その重荷が一瞬で全て消えてしまつて落ち着かないのです。彼女が冷静になるには余程強いきっかけを得るか、そうでなければ長い時間をかけて今の状況に慣れるしかないでしょう」

「……」

鈴乃の言葉に、ノルドはまた重苦しい表情で俯く。

「その重荷を背負わせたのは、他ならぬ私なのに……」

「断言できますが、エミリアはそうは思っていないです。どちらかといえば、今の彼女の苛立ち（いらだち）はほぼ全てライラに向けられているでしょう。逆にノルド殿はエミリアが重荷を背負いながら

求め続けた夢の具現そのものですから、奇跡の再会が成った今、あなたにこそ重荷を背負わせたくないと思っっているはずですよ」

「親として情けない限りだよ。ただでさえ、親らしいことをほとんどしてやれていないというのにな……」

ノルドは俯いた顔を上げられない。

明日、ノルドは三鷹にあった仮宿から、ヴィラ・ローザ笹塚(ささづか)一〇一号室に転居する。

その転居に際し恵美にヴィラ・ローザ笹塚の他の空き部屋への転居を勧めに来たのだが、きっぱりと断られてしまった。

普通に考えれば死別したと思われる親子の数年ぶりの再会なのだから、スペースに余裕のある恵美のマンション、アーバンハイツ永福町に同居すれば良さそうなのだが、現状その案は得策ではなかった。

イエソドの欠片にまつわる人物の中でもかなり謎の核心に近い存在であるノルドの身柄は、今こそ厳重に守る必要があった。

だが恵美のマンションは、事情を知っている異世界の者達が集まる笹塚からわずかながら距離がある。

今後恵美がまた外に働きに出なければならなくなったとき、ノルド一人をマンションに残すには不安があるし、まさか出勤の度に一緒に出掛けるわけにもいかない。

結局、理解者といざというときの護衛戦力の豊富なヴィラ・ローザ笹塚に住むのが一番、ということになったのだ。

もちろんスペース的には余裕があるものの、基本的にファミリー向けではない恵美のマンションで、社会人の娘と父親が同居するとなると何かと不便なことが多い、というささやかな理由もある。

だがそのために、都合六年ぶりで再会した娘に、ノルドは日常生活のサポートを何もしてやれなくなってしまったのだ。

ならばせめて今恵美が抱え込んでいる『借金』をいくらかでも肩代わりできれば、と申し出たが、結局それも断られたのが今日の始末。

結果ノルドは無力感に打ちひしがれてしまっているのだが、鈴乃(すずの)はそんなノルドを複雑な表情で見上げる。

ノルドの立場上、娘が窮地に陥っているのに何もしてやれないばかりか、差し伸べた手を拒まれれば、心配と落胆で落ち込んでしまうのも理解できる。

だが鈴乃に言わせれば、今の恵美の状況は、表面や見た目はど深刻であるとはどうしても思えないのだ。

なせ、今の恵美に対して、最も大きな債権を持っているのは他ならぬ真奥貞夫(まおくさだお)なのだ。世界征服を目指していた全盛期に匹敵する魔力を取り戻しながら、帰って早々にアルバイト

先であるマグロナルド・幡ヶ谷駅前店のシフトに復帰し、これまでと変わらない生活を送っている魔王サタンが、宿敵である勇者エミリアに売った恩を金で、しかも日本円で清算させようとしているのだから、今まで二人の様子を見てきた鈴乃にしてみれば、深刻に心配するだけ損でしかない。

「だが確かに」

鈴乃はノルドに聞こえない声で小さく呟き。

「もう少し、うまいやり方もあったのではないのか。魔王」

ノルドと恵美が再会を果たした日の翌日のことを思い出す。

恵美とノルドはエンテ・イスラから戻ってしばらくの間、ヴィラ・ローザ笹塚の大家志波美輝の厚意で一〇一号室を解放してもらい、そこで静養することになっていた。

その日、鈴乃もノルドの容体を検診するために一〇一号室にいたのだが、

「邪魔するぜ、勇者エミリア」

突如上の階からやってきた真奥貞夫は、悪魔の王に相応しい邪悪な笑みを浮かべて言った。

「ああ……マオウさん……」

ノルドは真奥の顔を認めて呟き、恵美は真奥にどう接すればよいか悩みながらも、とにかく

真奥を部屋に上げる。

「分かるなエミリア。俺が尋ねてきた理由か？ ええ？」

恵美は、普段の真奥らしくなく、妙に作ったような口調に首を傾げるが、

「……なんなの」

借りの大きさを自覚しているだけに邪険にすることもできず、とりあえず真奥に相對する。

「なあに、なるべく早いうちに、貸しを返してもらおうと思っただけ」

真奥はそう言うと、大学ノートのパージを破った紙を、恵美の前にすつと出す。

そこには手書きの文字で、びっしりと数字が並んでいた。

訝りながらもその紙を手にとってざっと目を通した恵美の顔色がさっと青ざめるのを鈴乃は見えた。

「何よ、これ」

恵美のかすかに震える声に、鈴乃も横から覗き込むと、ボールペンで「請求書」と書かれた紙面には、真奥の原付免許取得料を筆頭に、恵美がエンテ・イスラで行方不明になってから今日までの、真奥が恵美のために使ったという名目の費用が事細かに列挙されていた。

要するに、恵美のエンテ・イスラ帰還で発生した真奥の日本円での損失を補填しろ、ということらしい。

元々恵美自身、過去の遺恨は抜きに、今回の件で真奥に借りを返さなければならないことは

自覚していたが、それでも声が震えてしまった原因は、書かれた金額にあった。

「お前もこれから何かと物入りだろうし、仕事も探さなきゃならんだろうからすぐに耳を揃えてとは言わねえ。だがお前も日本暮らしのベテランだから分かっているよなあ？ この世には『利子』ってモンがあるんだ」

「それは……」

「魔王、お前これはあまりにも……」

恵美の顔色は悪いし鈴乃は顔を曇めるが、真奥はそんなことは意にも解さない。

「んー？ 何か文句があるのか？ これでも優しく計算してやってるんだぞ？ 俺はフェアな魔王だから、俺の責任に抱えるところはちゃんと除外してある。その上でこの金額だ」

真奥が提示した金額は、日本円にして、トータル五十万円。

失職してしまっただけの今の恵美が、おいそれと払える金額でないのは誰の目にも明らかだった。

費目で言えば、まずはもし今回のトラブルが起これば、真奥がシフト通りに出勤していた場合の給与の補填。

二度に渡る原付免許取得失敗の償還と、次回受験の費用。

エンテ・イスラ親征の際に購入した水や食料を含めたキャンプ道具一式の費用。

動いているのが不思議なくらいにポロポロになってしまった携帯電話の機種変更代。

そして何より一番大きく数字を加算しているのが、スクーター買い取り費用、という項目だ。

った。

顔を曇めてその費目を目を通していった鈴乃が、ふとあることに気づいた。

「魔王、なんだこの『無理ならトータル三十五万円でも』というのは」

「ああ、そうだ鈴乃。お前にも交渉しときたいんだが、お前が買ったあのジャイロ、譲ってもらえねえか」

「なんだと？」

「二台で五十万円とか言ってただろ？ 俺あのバイク気に入ったから、その半分で二十五万円で購入してもらえねえかと思ってる」

鈴乃が購入したホンダ製ジャイロルーフは、三輪、業務用に特化したパワー、ルーフなどの普通のスクーターに無い特性が満載されている都合上、新車で購入すれば一般的なスクーターの何倍もの価格になる。

鈴乃が購入したものは中古車とはいえ、それでも二台で五十万円。

その片方を、真奥は『機動デューラハン参戦』と名付けてエンテ・イスラで乗り回していたわけだが、現在二台のジャイロルーフは、真奥が無茶したせいで未だエンテ・イスラに残されたままである。

エメラダとアルバートが、後から全ての部品を回収して日本に送り届けてくれることになっているのだが……。

「トータル五十万円の計算の半分には、ジャイロの二十五万円が入ってる。でももしお前が譲ってくれねえって言うんなら、仕方ないからそここのモデルを別に欲しいなって思ってさ。ジャイロってスクーターの中じゃ極端に高いのな。贅沢言わなきゃ普通の50ccなら十万でも相当いいモデル買えるみたいだし、鈴乃がジャイロ譲ってくれない場合はトータル三十五万円計算してみた」

「……却下だ。あの二台のジャイロの持ち主は私だ。私に無断であんな使い方をしたお前に責任を持って修理させてから、業者に下取りさせる。お前の魔力があれば元の形に復元するなど容易いことだろう？」

鈴乃は呆れたように首を横に振るが、鈴乃のその回答は真奥も予想していたようだ。

「なら仕方ない、恵美に請求する額は三十五万円で確定だな」

「待て魔王。そもそもこの請求自体がおいしいと私は……」

待ってましたと言わんばかりの言い方に鈴乃はなおも言い募ろうとするが、真奥はそんな鈴乃にびしやりと掌を見せる。

「黙れ鈴乃。ジャイロを買収取らせてもらえないなら、お前にこの内容に口出される筋合いはねえ。恵美に関係ないところで俺が使った金やアシエスが食った金なんかは勘定に入れてねえんだ。納得いかねえようならキャンブ道具なんかは全部明細も保管してある。一から全部説明してやったっていいんだぜ？」

「……」

恵美は手書きの請求書を書いたまま黙り込んでしまい、そんな恵美を見た鈴乃は、慌てたように真奥の発言の矛盾点を指摘する。

「待て魔王。私のジャイロを引き取るにしろ新しいものを買うにしろ、お前のスクーターのためにエミリアが金を出す筋合はないだろう。私がお前の自転車を買ったときは訳が違う。元々お前がスクーターを持っていて今回の旅で壊れたというならともかく、これからスクーターを新調したいというのはお前の勝手な希望ではないか」

「ああ？ 何言ってるんだお前」

だが鈴乃の筋の通った抗議を、真奥は一蹴した。

「本当なら、もっと違う形で『報酬』を要求したっていいんだぜ？」

「報酬だと？」

「そうだ。別に俺は、芦屋とアラス・ラムスさえ無事なら恵美なんか見捨てても良かったんだ。親父の畑云々は根本的に俺の責任に拠るところが大きいからそれを抜きにしても、『勇者エミリア』を東大陸やエンテ・イスラから切り離してやる手助けなんかする必要はなかったんだぜ？」

「いや、しかしそれは」

「恵美とアラス・ラムスが融合してるんだからアラス・ラムスを助けるなら恵美も一緒に助け

ることは同じ勘定、って理屈は通用しねえからな。俺にとってアラス・ラムスは娘だが、恵美は徹頭徹尾、敵だからな」

「……」

真奥の屁理屈にもならない言葉に、恵美も鈴乃も声を失う。

「その敵を助けてやった報酬を、たかだか数万円のスクーターで済ませてやろうって言うんだ。俺の寛大さに感謝しこそすれ、文句をつけるなんざ有り得んわなあ？」

二重の意味で、聞いた口が塞がらなかった。

鈴乃の目から見ても、エンテ・イスラ親征前の真奥は、なんだかんだと言いつつも恵美のことも心配していた。

日本に帰ってから、ノルドが目覚めるまでは恵美をそっとしておこうという優しさすら見せたはずだ。

もちろん真奥の言う通り、今回の件で恵美と真奥が和解したわけではない。

だが何もノルドが聞いている前で言う必要もないのではないか。あまりにも配慮に欠けていると言わざるを得ない。

「しかしだな……」

「……いいわ、分かった」

納得がいかない鈴乃だったが、それまで言われるがまだだった恵美が、大きくため息をつい

て、頷いてしまう。

「これを清算すればいいのね？」

「え、エミリア？」

鈴乃は面喰らうが、恵美は真っ直ぐ真奥を見て続ける。

「これで……これで、何もかもがチャラになるなら、安いものよ」

その声色は平坦で、恵美がどういふつもりでそんなことを言い出したのか鈴乃には察することはできなかった。

だがどういふわけか真奥もまた、鈴乃と同じく面喰らったように目を見開いているではないか。今の回答は真奥の要求を全て認めるも同じ内容で、真奥にとって願ったり叶ったりの答えのはずだ。

「ほ、はお？ お、大きく出たな？ 恵美、言っとくが三十五万だぞ？ 三十五万つつたらお前三十五万円だぞ？ 日本銀行或いは独立行政法人造幣局発行の日本円でしか認められない三十五万円だぞ？」

そんなことは真奥に言われなくても分かっているが、真奥は殊更に三十五万円を強調して念を押す。

「分かっているわよ、それが何か」

そして恵美は、表面上は平静な様子でさらに頷いた。

「な、何かって、いやその、払えるのか？」

むしろ真奥の方が、ずっと平静でなくなってしまうている。

「何よ。あなたが督促に来たんでしょ。あなたに借りがあるのは自覚してるもの。払うわよ」

「お、おお……ま、マジで？」

「ただしこのところを、確定させてからもう一度来て」

「な、何？ 確定？ どこを？」

恵美は請求書の中で問題になった「報酬」の部分、即ちスクーターの項目を指差す。

「これ、適当な数字なんでしょ？ さちんとあなたが欲しいスクーターの値段を調べて、保険とか諸々必要な経費を全部確定させてからまたさちんと請求書を作り直してきて」

「お、おお……」

真奥は何度も頷くと、請求書をおずおずと仕舞い込む。

「用は済んだ？」

「あ、ああ……まあ、その」

真奥はなぜか決まり悪そうに首肯する。

「なら、悪いけど帰ってもらえる？ これから色々買い物にも行かなきゃいけないの」

「わ、分かった。邪魔したな」

どこまでも平坦な恵美の言葉に、真奥は来たときのテンションから一転、すこすこという表

現がびつたりな背を見せて一〇一号室から出ていった。

「まお……」

鈴乃はその背にさらに言い募ろうとして、

「……」

真奥がズボンの尻ポケットに丸めて詰め込み、座ったことでぐちゃぐちゃになった薄い雑誌のようなものを見て、言葉失ってしまったのだった。

「全く……回りくどいことをするから、こんなことになるのだぞ」

鈴乃は、永福町駅に滑り込んできた電車に乗ると、背の帯が濡れるのも構わずにため息と共に深々とシートに腰掛ける。

あれから一週間。

問題のスクーターに関しては、真奥が運びあぐねているのか未だ保留になっているが、恵美は既に真奥に対して、新しい携帯電話と、過去二回分の原付免許取得試験料、キャンプ道具一式にかかった費用、そして一週間のバイト代半額を弁済していた。

あとはバイト代の残りの半額とスクーターだが、ノルドが見た限りでは、恵美の貯金は現時点ではほぼゼロに近いという。

いくら真奥への弁済額が大きいとはいえ、恵美のこれまでの貯蓄がそんな簡単になくなるものかとも思ったが、恵美は真奥とは別に、エメラダにもなんらかの返済すべき借りがあって言い張っているらしい。

それは恵美がエンテ・イスラに帰った直後にエメラダから借りた旅費のことで、一度約束をした以上、これも絶対に返さなければならぬと言っていて聞かないのだ。

もちろんエメラダは真奥のような取り立てなどしない。そもそも返さなくてもいい、返すにしても期限を設ける必要もないと言っているのだが、恵美はその度に言うのだ。

「全てを清算しないと、私は前に進めない」と。

電車で揺られながら、鈴乃は頭を抱えるノルドを痛ましい思いで見つめていた。

今となつてはノルドも、真奥がエンテ・イスラを征服せんとした悪魔の王サタンであることは知っている。

だがノルドは、恵美や鈴乃が事情を知るずっと以前からイエソドの欠片を巡る事情に関わっていた都合上、一方的にサタンを敵視するようなことをしなかった。

今のノルドは単純に、娘が悪い相手から借金をしてしまっている、という事態を嘆いているのである。

しかもその原因の一端は自分であり、それでいて娘は自分の協力を拒否するものだから、親としては立つ瀬も何もあつたものではない。

「千穂殿の望む未来は、近いようでまだまだ遠いな」

魔王と勇者が仲良く暮らせる世界征服。

魔王と勇者の双方を愛してやまない女子高生の願いが達成されることは、やはりないのだから。

鈴乃の短い思案の間に、京王井の頭線は明大前駅に到着し、乗り換えのために下車する。「ノルド殿」とりあえず我々は、引越しの荷物を纏めに行きましょう」

「ああ……」

なんにせよ、遠い先のことだから分らないのなら、今は目の前の仕事を片付けること。

二人はノルドの旧居に向かうべく、京王八王子方面の電車が来るホームへと向かった。

※

その日の午後。

スリムフォンの画面に表示されている地図を頼りに歩いていく鈴木梨香は、目的の場所に達する高級マンションと呼んで差し支えない建物を見上げて目を見開く。

「ひえー、いいところ住んでるな」

梨香の住む高田馬場のワンルームアパートとは色々と格が違いそうなマンション、アーバン

ハイツ永福町の五〇五号室が今日の梨香の目的地だ。

「上の方、あれもしかしてペントハウスってやつ？　ひゃー！　なんだってこんな高そうなマンションに住むことにしたんだろ」

ひとしきり外観に驚きながら、さらにはこれまた高級マンションでしかお目にかかれないロビーの存在に目を丸くする。

「こりゃ、今日は面白い話が聞けそうだな」

梨香は、スリムフォンをショルダーバッグにしまい、手土産のシュークリームの箱を持ち直すと少し興奮した面持ちで正面エントランスへと向かう。

もちろん梨香は、恵美に会うためにアーバンハイツ永福町にやってきている。

エンテ・イスラという俄かに信じていた異世界のことや、これまでの恵美のことを恵美本人から直接教えてもらうためだ。

行方不明の恵美が、そのエンテ・イスラから帰ってきて一週間と少し。ひと段落ついたという恵美の誘いに乗ってやってきた梨香は、エントランスに人影を発見する。

マンションの住人ではないのか、インターフォン操作パネルの前に、ベレー帽を被り、体格に合わぬ大きなカバンを担いだ小柄な女性が佇んでいた。

梨香はさして気にも留めなかったのだが、その女性は自動ドアを開けて入ってきた梨香の方を突然振り向き声をかけてきた。

「あのー、つかぬことをお伺いしますがい」

「は、はい？」

話しかけられるとは思わず、梨香は小さく飛び上がる。

「このマンションの人に用があつて中に入りたいのですが、こちら側のドアが開いてくなくて困っているんですよ」

「はあ……」

妙に間延びした喋り方をする女性は、さして困っていなさそうな表情で、梨香が入ってきたのとは反対側、マンション内に入るためのガラスの自動ドアを指さす。

「自動ドアと書かれているのに自動どころか手動でも開きそうになくて……どうしたら良いものやら」

それはそうだろう。オートロックのマンションなのだから、インターフォン操作パネルで住人呼び出し、住人が中からドアを開けなければ開くはずもない。

「えっと……それなら、このパネルで部屋を呼び出せば……」

「部屋をー呼び出すー？」

梨香の至極単純な説明に、なぜか小柄な女性は今度こそ困ったように眉根を寄せて首を傾げた。

「いや、だから、このキーで部屋番号を押して、コールボタン押して中の人に開けてもらわな

いとダメなんですよ」

「へえ、そうなんですか」

小柄な女性は梨香の説明で、驚いたようにパネルと梨香の顔を交互に見る。

「何か住人から聞き出す秘密の暗号が必要なのかと思つてました」

「はあ。分かつてもらえたならいいんですけど。まあ、お先にどうぞ」

梨香は、変わった人だな、と思いつつパネルを押す順番を促すと、

「それであのく大変恐縮なんですが」

「はい？」

「数字が0から9までしかないようなのですが、それ以上の数字を入れたい場合はどうすれば良いのでしょうか」

「……へ？」

梨香は、「瞬何を問われているのか分からず間拔けな返事をしてしまふ。

「いえ、私が訪ねたい部屋は五〇五号室なのですが、『506』の数字がないようなので」

あるわけがないだろう、とか、そもそも現代に生きていて数字のキーの打ち方が分からないのかとか色々な疑問よりも先に、梨香は驚いてその女性の顔を凝視してしまう。

「な、なんでしょう？」

「五〇五号室つて言いました？」

「はい」

梨香は、おとりした女性の纏う衣類を改めて上から下まで一瞬でスキャンする。

そこで感じ取ったのは、ただただ、雰囲気が違う、ということ。

うまく言えないのだが、目の前の小柄な女性の纏う衣類と肩に担いだカバンは、高級な素材を使った、日本以外の文化圏で縫製された品物であることが察せられた。

そして今の今まで何故そのことに気がつかなかったのか自分でも分からないが、ベレー帽から溢れる髪と、梨香を見据えるその瞳は、日本人には絶対に有り得ない美しい碧緑。

それらの特徴が、記憶の中のある人物に行き当たった。

「あなたもしかして……エメラダさん？」

「は、はい！？」

小柄なベレー帽の女性は、驚いて梨香から一歩身を引く。

「ど、どちら様でしょうか？ どこかでお会いしたことがありますでしょうか？ に、日本の方ですよ」

「う、うん、あの、会ったことはないんだけど……」

梨香は梨香で一歩下がって、改めて相手をまじまじと観察する。

「恵美の昔の友達に小柄で間延びした喋り方をする、緑色の髪の毛の女の子がいるって知り合の女の子から聞いてて、その人の名前が確か、エメラダ……えっと……なんだっけ。エメラ

ダ・えとう……」

「エメラダ・エトウヴァです……驚きました。エミ、というのはエミリアの日本の名前ですね。」と言ふことは……あなたがスズキリカさんですか？」

エメラダと名乗った小柄な女性は、目を丸くしながら梨香を見上げてくる。

「うん、そうよ。恵美から何か聞いているの？」

「時々ですけどエミリアからの電話でお話だけは伺っていました」

「お互い、又聞きの知り合い同士か、面白いねなんだか」

梨香は微笑むと、インターフォン操作パネルで「505」を入力する。

「ところで、お知り合いの女の子というのは、はうもしかして……」

コールボタンを押す梨香の横顔を、エメラダはまじまじと見つめる。

「ササキチホさん……或いはカマツキスズノさん、ですか？」

「そういうことね。ま、こんなこと宣言するのも恥ずかしいんだけど」

梨香は困ったように笑う。

「色々あってね、私もつい最近、ざっとだけでも知ったんだわ。エンテ・イスラってこの話。今日は恵美……エミリアが、いろんなことを一から話したいって言うから来たんだけど、まさかエンテ・イスラからお客さんが来てるなんてね。ん？むしろエメラダさんが来るから恵美も今日に指定したのかな？」



「いいえそれは無いと思います。実は私今日来ることを……」

「いらつしやい梨香！ 今聞けるから上がって……って」

その瞬間、インターフォンから恵美の明るい声が飛び出してきたが、インターフォンに付属しているカメラから、こちらの様子を捉えたようだ。

「え、エメ？ もしかしてそこにいるの、エメなの？」

「はい、突然すいません」

梨香の隣でエメラダは、梨香の指差すカメラのレンズを見ながら微笑んで手を振る。

「え？ ど、どうして二人が……」

恵美の混乱ぶりから察するに、どうやらエメラダの来訪は想定外の事態であつたらしい。

梨香とエメラダはおどけたように顔を見合わせると、同時にカメラに向けて声を揃えた。

「そこでたまたま一緒に……」

「……」

高級マンションのインターフォンは、恵美の無言の動揺も確実に拾って、梨香とエメラダの下に届けたのだった。

「驚いたわよ。来るなんて聞いてなかったし、いきなり梨香と仲良さそうにしてるから……」

恵美はまだ驚き冷めやらぬといった様子で、梨香とエメラダの前に淹れたての紅茶を差し出す。

「会ったことはいはずよね？」

「又聞きの知り合い同士です」

エメラダは先程の梨香の言い方が気に入ったのか、微笑みながらそう言った。

「私のこと、エメラダちゃんにどんな話し方したのかすごく気になるぞ」

梨香も微笑みながら恵美を耐で突く。

「べ、別に何も変なことは言っていないわよね？」

恵美は慌てたようにエメラダに確認を求め、エメラダは、

「ええ、キップノイタケヲワツタヨウナ性格のキノオケナイ友達だと伺っています」

「光栄だけれども、エメラダちゃんその日本語の意味、よく分かってないっしょ」

「えへへ。あ〜でも私も気になります。ササキさんやベルさんは私のことなんて仰ってましたっ？」

「真奥さん達がエンテ・イスラに行く前にちよろっと聞いただけだから、本当にざっとした経

歴だけよ。私があなただけのことを聞いたのはさつきも言ったけど真奥さん……ああ、えっと、魔

王サタンさんのアパートで、千穂ちゃんから恵美の経歴をざっと聞いたときだから」

「ちゃんと日本の名前も把握しますから大丈夫ですよ。それでササキさんは私のこ

「となんて言っちゃったか？」

「エメラダちゃんとおと、アルバートさんだっけ？二人とも恵美の昔からの友達で、エメラダちゃんは恵美と同じで凄い力を持った、可愛くて強い魔法使いみたいな人ってことくらいかな」

「ササキさんはいい人ですわね」

エメラダは満足げに紅茶を一口含むが、

「あ、あと、見た目によらずよく食べる人だっけ聞いた」

「……………それに関しては一言い訳のしようもありませんわね」

真実であるが故に容赦ないその評にエメラダの動きが一瞬固まったことを、梨香も恵美も見逃さなかった。

「でもそれはうちらの食べ物美味すぎるのがいけないんです……じ」

エメラダはそう言うのと、テーブルの上に置かれた梨香の手土産の箱に、熱い視線を注ぎはじめた。

「気持ち多めに買ってきて良かったわ」

梨香はエメラダの視線に気づいて、シュークリームの箱を開ける。

「……………これはなんですか？」

パウダーシュガーがふんだんにかかった大ぶりのシュークリームを、エメラダは不思議そう

に見つめる。

「シュークリーム、知らない？」

「しゅーくり……？」

「前に来たときは、普通のケーキしか食べてなかったものね。フォークとかいる？」

「いや、シュークリームにフォークはいらんでしょ。女ならかぶりつかなきや」

「パンのようなのですか？」

「パン……じゃない、かな？まあ食べてみなよ。最近高田馬場にオープンした人気のお店で、学生でこった返しててなかなか買えないんだぜ！」

「ん」

エメラダは、新しいおもちゃを警戒する猫のように、シュークリームを半ば睨みながら視線を下げ、一つゆつくりと手に取る。

「軽い……けど、中が重い？」

「思い切り握らないでね。中身が飛び出ちゃうから」

恵美の警告に、エメラダはシュークリームから目を離さぬまま真剣な面持ちで頷く。

そして、

「えいっつ」

間延びした気合と共に、小さな口で大ぶりのシュークリームを大きく齧り、次の瞬間には

「オルバがく色々と吐きまして」

「ええっ!?」

「わっ!」

その瞬間、恵美がテーブルを蹴立てる勢いで腰を浮かし、梨香が慌ててテーブルを支える。

「現時点で分かったことを、ご報告に上がった次第です。お話ししてもよろしいですか?」

エメラダは、恵美よりも梨香の方にまず顔を向け、

「何か大事な話なら、是非そっちを先にして。私は半分野次馬みたいなもんだからさ」

梨香は小さく頷いて、エメラダに順番を譲る。

「ありがとうございます……んんっ」

エメラダはべこりと会釈をし、軽く咳払いをすると、すっと目を細め、カップに半分ほど残っている紅茶の水面を見た。

その目の表情を見て、梨香は思わず息を止める。

そこにいるのは、たった今まで梨香のお土産のシェークリームを、全身からハートマークを放射しつづいていた食いしん坊少女ではない。

梨香の知らない世界しか知らない、異世界の大法術士の顔だった。

「彼の裏切りの根は、私達の想像をはるかに超えて、根深いものでした」

エメラダは打って変わって引き締まった声でそう告げる。

当初、私もアルバートも、オルバの裏切りは、ルシフェルを匿ったことから始まったものだ
 と思っていました。

なにせルシフェルの存在は聖典にある『天使』が実在した証拠なのです。

教会の公式の記録として、天界と意志疎通を為した聖職者の記録は数多ありますが、天使の
 実在を証明したり、天界に実際に渡った人間の記録はどこにも存在しません。

魔王軍の悪魔大元帥が勝手に「堕天使」を名乗っているだけかと思いきや、人と同じ姿を持
 ち、背に聖典に描かれた図と同じ翼を持つ超常的な存在。

それほど敬虔な信徒でもない私ですら、その姿を見て驚いたほどです。

大法神教会の頂点に君臨する六人の大神官の一人であったオルバは、私などとは比べ物にな
 らないほどの衝撃を受けたことだろうと思っていました。

梨香さんはご存知ないかもしれませんが、あなたの知る真奥貞夫の同居人、漆原半蔵

は、聖典に示された最初の堕天使、原書の罪、神になり変わろうとした者、暁の子と、様々に
 呼ばれる最も有名な天使の一人なのです……え? なんですか梨香さん。そうは見えない?

ええと、日本のルシフェルの生活態度をアルシエルがいつも嘆いている? 家事も手伝わ
 ない働きもしないのに勝手に魔王のお金で買い物したりゴミを散らかしっぱなしにしたり?

……ああ、まあ、その、とにかく、漆原半蔵が「エンテ・イスラの聖典に」それなりに有名な存在であることを納得していただかないと、話が先に進まないの。今現在の生活態度のことはひとまず置いておいてください。

元が天使でその次が悪魔ですから、きつとスプーンより重いものを持ったことがなかったんです。……んっ……んっ……んっ。

ええと、その、ルシフェルの存在にオルバが驚いたと私が思った、という話でしたね。

そのルシフェルを撃破した後、オルバは表面上何食わぬ顔で私達と旅を続け、アルバートと共に北大陸でアドラメレクを。南大陸でマラコーダを倒し、東大陸でアルシエルを撤退させ、魔王城の決戦へと移るわけです。

中央大陸の魔王城での決戦に於いてオルバは、逃亡する魔王サタンとアルシエルを追うふりをして、エミリアをゲートの閉鎖に巻き込み、私達から切り離しました。

エミリアがゲートに飲み込まれて後、何も知らない私とアルバートは、オルバと話し合いました。今でも、このときの選択が悔やまれてなりません。

アルバートは今すぐエミリアを追うべきだと主張しました。

ですが私とオルバは、追うべきだけれども、まずは魔王軍の残党を完全に掃討してから準備を整えて追うことを主張しました。

エミリアの力は魔王とアルシエルの二人を同時に相手にして尚も圧倒的でした。ゲートの到

着地点がこのような異世界であるなどとは思いませんでしたし、エミリアの力を信じればこそ、私達が慌てて追っても魔王城決戦に参加した多くの騎士達の士気をくじいてしまうことにもなりかねない。

アルバートも最終的には私とオルバの説得に折れ、五大陸連合騎士団と共に、残った強力な悪魔達を掃討する作戦に移りました。

……ええ、そのときは私もアルバートも、オルバのことを心から信頼していました。

オルバと私は平時ならば俗界の官僚と教会の高位聖職者として、事実上政敵の関係にあります。ですが戦いに限らず、旅の間にオルバの知恵や力や優しさに助けられたことなど数えても数えられるものではありません。

だからこそ、全幅の信頼を置いていた彼の裏切りが発覚したときの衝撃は、筆舌に尽くしがたいものがありました。

主だった悪魔達を掃討し、魔王とアルシエルのゲートの航跡を解析するために私達はすぐさま中央大陸の連合騎士団本営から最寄りの「天の階」に取って返し、エミリアの行方を探しました。

ですが……そう、異世界などという転送先を想像すらしていなかった私達は、魔王とエミリアの航跡を捕捉するのに、長い時間を要したのです。

ゲートの航跡を探索していたのは主にオルバだったので、もしかしたら彼が、誤った情報を

私達に流していた可能性もあります。

エミリアも存知の通り、彼は私やアルバートを、エミリアの所在を見つけたと言つてサント・イグノレッドに呼び出して体よく軟禁しました。そして秘密裡に匿い治療したルシフェルを解き放ち、エミリアを暗殺するべく日本へと旅立ちました。

オルバがルシフェルを連れてエミリアを抹殺しようとした理由について、魔王がした予想をエミリアは聞かせてくれましたね。

オルバを始めとした教会や連合騎士団や諸王国の権力者たちが、民衆の新たな求心力として勇者エミリアが立つことを恐れている、と。

そのような世の中の動きは実際にありましたし、その動きがクレステシア・ベルさんを日本に送り込む遠因になったことは間違いではありません。

ですが、世間の思惑はともかく、オルバ本人がそのことを重要視していたかどうかは疑問の余地がありました。

今もたびたび教会が喧伝していることではありますが、エミリアの旅立ち当初の肩書きは『教会騎士』です。

エミリアを無理に廃さずとも、大神官であるオルバが後見となつたり列聖するなりなんなりして、エミリアの威光を教会の力で支える、という構図も取れたはずです。

エミリアはこう見えて意外と周りに流されやすいですから、人のためだと説得されたら自分

からお神輿に乗ってしまうかもしれないですけど、周りとはちかくオルバ本人がそこまでエミリアの権力への台頭を警戒していたかというと、疑問だったんですよ。

実際に先日件の件でも、オルバはエミリアを報酬で釣るのではなく、お父様の畑を人質に取るという方法を取っているわけです。

そこで、これらの疑問を丸々本人にぶつけてみたところ、面白いように色々白状してくれました。

ええ、たった一週間で別人のように老け込みましたよ。それこそあつという間に髪が白髪に……ああ、存知のようにオルバは剃髪です。

今は完全に法術を封印して常に法術士を交えた四十五人からなる精鋭が、交代しながら二十四時間態勢で監視していますが、当然刃物を近づけるわけにはいきませんので、剃髪を維持できなくなつて、今ちよつと髪が伸びてきてます。

……意外にも毎日こまめに身だしなみ整えてたんですね。さすがは腐つても大神官ですよ。んんっ!!

もちろん吐いたことをそのまま鵜呑みにする様なことはしませんが、何せその全てが、すぐさま真偽を精査できないものばかりですので、今回天界や天使達の動向と触れ合つてきたエミリアや魔王に助言をもらおうと思つて突然やつてきた次第なんです。

「エメ。口調。戻ってるわよ」

「え……あ……真面目なお話だから、真面目にならなきゃいけないと思って、気合入れたんですけど、疲れますね……はひい」

「か、変わりすぎじゃない……？」

エメラダは伸びた背筋からふつと力をぬいて、だらしなくテーブルに突っ伏してしまい、梨^①香はその豹変^②ぶりに引いてしまう。

「それで、オルバの裏切りが根深かったっていうのは、そのオルバが話したことに関係してるのね？」

「そうですね」

エメラダは、顔も上げないまま続ける。

「オルバは、魔王軍が、侵略を始めるずっと前から、天使や天界の存在に、確証を持っていたそうです。それは聖職者だからってことではなく、現実的に、天界の存在を捉えていたというか」

「現実的？」

「つまりですね。天界が、魂の行きつく先とか、死後に行く場所とか、そういった形而上^③のものではなくて、物理的に、行くことのできる、現実^④に存在する、場所だということを、分か

っていたというんです」

「……エメ」

「はい……？」

「私の分のシュークリームも食べていいからもう少し頑張っ……」

「ですが聖職者であるが故^⑤にも、逆^⑥に聖典や教義の壁に阻^⑦まれ、それまで天界のむしやむしや実在を研究したり証明する手立てがなかったというのでも、もぐ」

復活^⑧、という言葉がこれほどしつくりくる現象も他にはあるまい。

エメラダは恵美^⑨の分のシュークリームを両手に一つずつ確保し、交互に食べ進めて全てを食べ終わってから、またゆつくりと目を細くして真面目な顔になるが、

「エメラダちゃん、ほったにクリームと砂糖が」

先ほどまでエメラダの迫力に気圧されていたはずの梨香が、横からウェットティッシュでエメラダの真顔の頬を拭きはじめ、真面目さはともかく大法術士^⑩の威厳はシュークリームよりも脆く、淡くエメラダの腹に溶けてしまったのだった。

オルバは天界の実在を確信した、というところまで話しましたね。

その原因こそ、他ならぬエミリアの持つ聖剣^⑪の核、即ち「進化の天銀^⑫」でした。

梨香さん、ありがとうございます。ついでに紅茶を一口……ふう。

オルバは知つての通り大法神教会の中で外交・宣教部を統括し、若い頃から頻繁に諸外国へと宣教の旅に出ていました。

それ故に彼は、自分の信じる神が、絶対無二のものではないことをよく理解していました。

神が絶対無二であるならば、何故その神を知らぬ者が世にこれほど多くいるのか。何故その神を知らぬまま、成熟した国家を成立させた者達がいるのか。

聖典は異教の神を信じる者達に神の教えを広めることの正しさを説いていますが、ならば何故、歴史上『宣教戦争』とも言うべき、成熟した国家と大法神教会が血で血を洗う戦争を繰り返さねばならなかったのか。

オルバは宣教の過程で、多くの成熟した国家を見、万人に教え諭すべき神の教えを根本から受け入れられない者がいることを知りました。その受け入れられない者達を剣と血で教化することの正当性に、彼はずっと悩み続けていたそうです。

そして彼は、大いなる矛盾に気づいたのです。

『汝の隣人を愛せ』という子供すら知る一文と、教会の歴史は大いに矛盾していると。

神の教えを受け入れぬ者は邪悪であり、教え諭しても分からぬ者を殺しても良いと、どの神が言つたのでしょうか。

オルバ以前の歴史上の多くの大神官達が、この『神の絶対性』を恣意的に解釈し、愛すべき

隣人を神の名の下に殺戮してきました。

当時の神官達はそれを神による粛清であり、彼らの魂は聖なる信徒達の手で清められ、恨みと苦しみは神が救い給うたと述べました。

ですが、オルバは見ました。

今なお何百年も昔の大法神教会の身勝手な理屈による殺戮や収奪を忘れず、語り継ぎ、オルバの信じる神を邪神と呼んで憚らない者達を。

恨みを干戈ではなく言葉で解決し得る今の世ですら、オルバの神の教えを説く声は、彼らには響きませんでした。

そしてオルバは、矛盾に気づいたのです。

神の存在を疑った、と言つても良いでしょう。

思えば聖典に現れる神は、最初から失敗ばかりしていました。

神の青写真通りに進んだのは、世界と命の創造だけ。

その後は楽園に邪悪が入り込み、人は誘惑に負けて度々神を裏切り、世界には神の被造物同士争いが絶えず、遂には『神以外の神』すら現れました。

ですが大法神教会は、神を絶対の存在と言う。

聖典は、絶対の存在が失敗ばかりしていて、それでいて絶対のものと崇めろと言つたのです。こんな大いなる矛盾をもたす者は、果たして神なのか？

オルバには、矛盾を起こす存在について、人間以外の心当たりがありませんでした。オルバが大法神教会内で出世するようになったのは、この考えに至ってからだったことでした。

教会内の全ての動きが人の為すことであるのなら、人の為すことであると考えて行動すれば良いのです。

もちろんこの時点では聖職者としての善性まで放棄したわけではありませんが、敬虔な信徒かと言えば決してそんなことはないでしょう。

彼は大法神教会という、地面ではなく人の心に領土を持つ超巨大国家の政治や経済、法律に精通し、人心掌握術に長けた策謀家であると言えます。

そんな彼が、大神官の位に上り詰めて初めて触れた物がありました。

それこそが『進化の天銀』。

『天より天使が下された』ことになっているサンクト・イグノレッドの聖具です。

いつか世界を魔が覆うとき、進化の天銀より生まれし聖剣を振るう勇者が現れるとの言い伝えを聞き、実際に進化の天銀に触れたことで、オルバは『天界』そして『天使』が、現実に存在することの確信を得ました。

即ち、大法神教会も、聖典も、進化の天銀さえも、人間と同じ次元にある、形而下の存在が作り出したと。

そのとき、オルバは思ったそうです。

「私も、神になり得る」

恵美は、まるで目の前でオルバの乾枯れた声を聞いたかのように、蒼い顔で身を凍ませた。

「本気で、そんなことを……」

「どうやらそのようです。諸王国や他の大神官達がエミリアを警戒したのは、言葉通り、エミリアに戦後世界の利権を奪われることでした。ですが、オルバが警戒したのは……」

「私が……神になること……？ 進化の天銀……イエソドの欠片の力で？」

「恐らく」

「何を……バカなことを……」

恵美は震えを押さえようと、己の身を抱きしめ、梨香は恵美の傍に寄り添ってその背をなでさする。

「オルバは進化の天銀に初めて触れたときから、他にも類似した超常的な存在があるのではないかと考え、時間をかけて世界中を探していたそうです。進化の天銀は神学校や大神官達が長

い歴史の中で研究を重ね、まさしくこの世の物ではないと結論付けられています。ですが、オルバは「この世の物ではない物」などない、という確信を抱いていました。なぜなら、進化の天銀はこうして触り得る実体として目の前にあるではないか、と。オルバには進化の天銀に触れる機会も、研究する知識も権利も金銭的な余力も豊富にありました。彼は大神官（だいしんくわん）になってから進化の天銀についての研究を重ねます。ですが他に研究対象になり得る聖具は、彼の手の届くところには存在しなかった。オルバは焦（あせ）ったでしょう。老齢に差し掛かり、時間が彼の寿命（めいよう）の限界をちらつかせはじめた頃……それは、起こりました」

恵美ははっと顔を上げた。

「魔王軍の、侵攻……」

「それと同時に、進化の天銀を振るう、予言された勇者の存在が取り沙汰（さた）されるようになりました。オルバは狂喜したそうです。もし予言の勇者が現れたのなら、その者は進化の天銀の研究を一步先に進める存在であろうと。彼は予言を予言とは思っていませんでした。勇者の存在も形而下（かみじか）の何者かが計画したこと。そう信じて疑わなかった。そして現れました。予言の勇者、天の血を引く、勇者エミリア・ユステイナーが」

「……」

「恵美……大丈夫？」

「う、うん……ごめん、梨香（りか）、ちょっと、傍（そば）にいてほしい」

「うん、大丈夫。一緒に聞（き）いてる」

恵美は少しだけ梨香に寄りかかるようにしながら、それでもエメラダに話の先を促（うなが）した。

「エミリアを探し出すのは簡単だったそうです。なぜなら教会には『世界に闇が迫ったときに進化の天銀に働きかけるべき儀式』が伝わっていました。それもいたってシンプルなものでした。進化の天銀に、然るべき者、この場合は教会の高位聖職者が、然るべき強さの聖法（せいほう）氣（き）を注ぎ込むこと。そうすれば、天銀が勇者の居場所を教える導きの光を放つだろう、と」

恵美は、その導きの光を何度も見てきた。自分の意志で発したことすら何度もある。

導きの光は、単にイエソドの欠片（かけ）同士が引き合う光だった。

それを、教会に伝わる言い伝えは耳触りのいいサーガとして伝えた。

では誰がそれを伝えた？ 言い伝えの起源は何者だ？ そんなこと、決まっている。

「ライラ……」

母が、全て仕組んだ。

このイエソドの欠片を巡る、二つの世界を巻き込んだ大いなる茶番を。

「教会はエミリアを見つけ、総本山であるサンクト・イグノレッドに連れ帰りました。ですが、そのときのオルバはまだ、エミリアと進化の天銀の様子を観察して後の研究に生かそう、くらいにしか思っていなかったそうです。オルバの考えが決定的に変わったのは、エミリア、あなが進化の天銀に触れた、その瞬間（とき）でした」

「……どういふこと……?」

「思い出してください。予言に語られていた勇者は『聖剣の勇者』なんです」

「……え」

「それなのに、予言の勇者として連れてこられた少女は、聖剣と共に、もう一つの聖具を発現させました」

恵美はその言葉に、息を呑んだ。

エメラダの言葉から導き出される事実は、己の存在の根幹に関わる問題であることを認識したからだだった。

「破邪の……衣………っ!!」

「え、恵美!? しっかり、しっかりして」

恵美はより強く己を抱きすくめ、その勢いがあまりに激しかったため、梨香もまた恵美の体を抱きしめ、落ち着かせようとする。

「少し休もう? こないだまで何も知らなかった私が聞いたって大変だったこと分かる。一気に入るんなこと聞いたら、頭だって疲れちゃうよ。だから……」

「うん……大丈夫、大丈夫だから、……全部聞かないと、お願い、続けて」

「……はい」

エメラダは恵美の様子を心配しつつも、その気丈さに応えて語りきることを決意する。

「聖剣の勇者の実在を喜び、破邪の衣を聖剣の付属物だと勝手に誤解した他の大神官と違い、オルバは破邪の衣を驚きつつも冷静に分析していました。彼が喉から手が出る程欲しかったものが、突然目の前に降って湧いたのです。オルバにとって聖剣と破邪の衣は、等しく進化の天銀のサンプルでした。彼は導きの光が、進化の天銀と、破邪の衣が引き合っていたものだと推測したそうです」

それからオルバは、恵美の後見人として立候補し、実際に恵美が魔王軍討伐に旅立つことになった際には、官教外交部の経歴を生かし、保護者として名乗り出たのだった。

「オルバは二つの聖具を見て、天使や天界の存在に確信を得ました。そしてセント・アイル帝都解放戦が起こったあの日、オルバは出会ったのです。現実に天使が存在する、その生きる証明である悪魔大元帥ルシフェルに」

「そういう……こと……」

「オルバは本格的に形而下の神となる道を歩むべく、エミリアとの戦いで瀕死になったルシフェルを、とどめを刺すふりをして匿いました。彼の長年の論が正しかったことが図らずも魔王軍侵攻によって証明されました。ですがオルバにとつて残念だったのは、ルシフェルが進化の天銀やエミリアの聖剣について、何一つ知らなかったことです」

それは恵美も以前から気になっていたことであった。

ルシフェルは……漆原は恵美の聖剣について、本質的なことを何も知らなかった。

天使の中でもサリエルやガブリエルクラスか、はたまたそれ以上に古参の気配がある漆原が、イエソドの欠片について無知であるのは、一体何故なのだろうか。

「それでもオルバにとってルシフェルが、神への道の重要な駒であることに変わりはありません。ルシフェルを保護しつつエミリアの旅を助けながら、いよいよ魔王城に突入しようというときになって、オルバは再び、導きの光を見ました。それは……」

「聖剣と……魔王が持っていた、アラス・ラムスの核が引き合う光だった……」

「オルバは、今度は危機感を覚えたそうです。新たなサンプルがすぐ近くにあるが、魔王を倒しエミリアが万が一それを手に入れた場合、間違いく新たな力が生まれる……神や天使を称する何者かが、それを回収にくるのではないかと」

勇者が人間世界のために力を振るっているうちはいい。だが、魔が打ち払われ、勇者の力が不要になった場合、その力は再び世界を混乱させる火種にもなりかねない。

それを、聖剣や破邪の衣を地に下した者は、良しとするだろうか。この力の秘密に近づく者が増えることを、良しとするだろうか。

折角見えはじめた天への道を閉ざす可能性を少しでも潰したかったオルバにとって、魔王とアルシエルの逃亡は、まさしく幸運以外の何者でもなかった。

実際にはアラス・ラムスの核は魔王城に置き去りにされていたのだが、オルバは聖剣と引き合う何かを持つ魔王と、聖剣を持つエミリアを同時に世界の目から切り離せば、研究にさら

なる時間の余地が生まれると考えた。

オルバは魔王を追うふりをして、まだまだ閉閉時間に余裕のあったゲートを、エミリアが突入したと同時に閉鎖。

エメラダやアルバート、五大陸連合騎士団重鎮の目から隠すことに成功する。しかしこのときはまだ、オルバも異世界漂流までは思いがいたらず、その後エミリアを見つめるのに、長い時間を要することとなる。

「それから……エミリアも知ってる通りです。オルバはルシフェルと共に日本で暴れ、魔王と勇者を己の欲望のために葬ろうとしました。ただオルバが遭遇した多くの誤算の中で最も大きな影響を及ぼしたのが……魔王とエミリアが、日本で思いのほか接近していて、しかも仲良くなっていた、ということですよ」

「……今となつては、耳が痛いわね」

未だ血の気は失せたままだが、それでも恵美は少しだけ皮肉な笑みを浮かべる余裕が戻ってきたようだ。

「オルバは最後の最後でエミリアを抹殺することに失敗し、ルシフェルの身柄も手放してしまい、エンテ・イスラに帰ることもできず彼の神への道は閉ざされた……はずでした」

「……サリエル？ ガブリエル？ それとも、ラグエル？」

恵美は、エメラダに先んじて質問を投げかけ、エメラダは苦笑する。

「最初はサリエルだったそうです。日本で留置されていたところをサリエルに助けられ、以後は天界の監視の下、イエソドの欠片を集めるために彼らを補佐していたそうです。ルシフェル以外の天使に実際に会って、また少し考え方が変わった、とも言っていました」

サリエルを始めとした天使達は、魔王サタンはもちろん、勇者エミリアとも比較にならぬほどの強大な力を持っていた。

現実の存在であった天使達は肉体的な強さ、生命体としての神秘性、人間にはおよそ到達し得ない聖法氣許容量、圧倒的な知性を有しており、オルバは彼らに対して、少なからぬ畏敬の念を覚えたという。

そして、そんな偉大な生命体に認められた、という自負も手伝い、いつしか彼らの傀儡として、彼らの一員となるべく動くようになっていた。

神への道を諦めたわけでは決してなかったが、簡潔の戦い以後のオルバは、絶対的な神ではなく、サリエルやガブリエルらと同じ強大な力を手に入れ、エンテ・イスラの民の形而上の信仰の象徴である「天使」となることを望むようになっていった。

だが今、行き過ぎた計略の破綻と、真実や恵美、鈴乃らの力に敗れ、神を目指した心を打ち砕かれたオルバはもはや、野望の輝きと共に生命力すら失ってしまったかのように、魔人も同然の有様だという。

「話を聞いていると、もうそうなつて当然というか、見下げ果てた奴隷のような奴隷かと思えな

いけど……そのオルバって奴は、最終的にはどうなるの？ そっちの法律で死刑ってあんの？」
梨香の問いに、エメラダは困惑の顔で首を横に振った。

「さて……まずどの国の法に処するかというところから、そもそも通常の法に照らし合わせて彼の罪を数えられるのか……それに、腐っても『大神官』で『勇者の仲間』の一人ですから、例えば極刑に処したとしても、世間に与える影響があまりに大きすぎます」

エメラダの眉間に刻まれた皺が深くなり、その悩みの深さが見て取れた。

「当分結論は出ないと思います。正直こんなに早くオルバが色々と自白したのは、我々にとっても予想外でした。エフサハーンでの魔王の介入や、計画の失敗、天使達の敗北が余程ショックだったのだと思うのですが、そもそも天使達と共にエフサハーンでエミリアとアルシエルを戦わせることで何をしようとしていたのかは、まだはつきりしていませんし……エミリア、大丈夫ですか？」

エメラダは小さく息を吐き、恵美の顔を覗き込む。

「意外と大丈夫じゃなかったけど……でも、おかげで分かったこともあるわ。前にね、千穂ちゃんと言ったの」

「ササキさんが？」

「うん。あとは、ごく最近お父さんにも聞いたんだけどね」

恵美は、支えてくれている梨香の手を無意識に握りながら、言った。

「私は最初から……恐らく生まれたときから、進化聖剣・片翼を持っていた。きつと教会が保存していた『進化の天銀』は聖剣じゃなくて、破邪の衣の核だったんだと思う。ライラは、彼女の目的のための『鍵』をお父さんと、私に預けたと言っていた。お父さんはずっとアシエス・アーラと一緒にいたのよ。もう一振りの聖剣の化身である、アシエスと……梨香、ちよつとごめんね」

恵美はそう言うのと梨香に目くばせをして、手を離して立ち上がり、一歩後ろに下がる。

「思えば、破邪の衣だって『進化』したわ。この子と融合したあの日から」

恵美が軽く意識を集中させると、

「わー！」

梨香は恵美の体に起こった現象に、思わず声を上げてしまう。

まばゆい光の乱舞と共に、恵美の腕の中に、一人の少女が出現する。

穏やかな顔で寝息を立てている、不思議な色の髪の少女に、梨香は目を奪われた。

「アラス・ラムス、ちゃん？」

これはどの間近で見るのは初めてのことだったが、もちろん梨香の度肝を抜いたのは、何もない空間から一人一人が出現したという事実。

それと同時に、

「……と、え、恵美!? その格好……!?」

恵美の肉体に起こった変化に、本気で尻もちをついてしまった。

「勇者、エミリア……それが……」

梨香は呆然と、友の姿を見上げる。

絹糸を思わせる蒼銀の髪に魔を射抜く緋色の瞳。

カジュアルなワンピースの上から全身を覆うのは、銀とも、虹色ともつかぬ不思議な光沢を放つ全身鎧だ。

「エミリア、その左腕の盾は……」

勇者エミリアのその姿を以前から知っているエメラダは、破邪の衣の左腕に現れた装飾を見て、尋ねる。

「昔はなかった。この子と融合してから生まれた、破邪の衣の進化形態よ」

エミリアは、昼寝から目覚めつつあるアラス・ラムスと、左腕のラウンドシールドを見て、少しだけ目を伏せる。

「聖剣は聖法氣の総量で形状が変わる。破邪の衣は、イエソドの欠片との接触で天銀から衣に変わり、アラス・ラムスとの接触で盾を産んだ。それにアラス・ラムスとアシエス・アーラ……この子達は……成長する」

その瞬間、エミリアはふっと力を抜き、梨香のしている前で破邪の衣は光の粒子となって肉体の中に戻ってゆく。

髪と瞳の色も普段の遊佐恵美のそれに戻り、最初の衝撃から脱した梨香は、口を開けたまま呆然と恵美がアラス・ラムスを抱えて腰を下ろすのを目で追っていた。

「イェンドの欠片達は、きつかけはそれぞれにあるけれど、成長して、進化するんだわ。これがライラの目的だとしたら……全ての欠片が集まったとき、どうなるの？」

その答えを、エメラダも、梨香も、持っているはずはない。

「私はライラの目的は分からない。ガブリエルや天界がこの子達を集めて何をしたかったのかも知らない。でも……この子が不幸になるような結末だけは、絶対に許さない」

恵美は強い意志を込めてそう言うと、改めてエメラダを見た。

「エメ、今日は来てくれてありがとう。私の次の目的のために歩く理由がはつきりしたわ」

「どういうことですか？」

「これからライラを探し出すのは変わらない。でも、それはライラが何をしたかったのかを知るためじゃない。アラス・ラムスの将来を幸せにするためよ。聖剣だって、破邪の衣だって、私の大切な相棒。ライラの好き勝手になんかさせないわ」

「いやあ……こう目の前で現実に見ちゃうと、すっごいもんだねえ……」

梨香はようやく恵美の変身の驚きから立ち直ったようで、べたべたと床につきながらなんとか体を起こす。

「気持ち……悪くない？」

恵美は、そんな梨香に不安げに問いかける。

だが梨香は、驚愕の表情を顔に張りつけたまま、首をぶんぶんと横に振った。

「いやもったただだビックリ。そんだけ。私の友達は、本当スゲエ奴だったんだあって」

そして、座った姿勢のままよたと恵美の傍にじり寄ると、覚醒の前兆か、もごもごと恵美の腕の中で身をおよるアラス・ラムスの顔を覗き込んだ。

「やー、間近で見ると……うん、他に言いようがないからこう言うしかないんだけど、天使のように可愛いじゃないの。アシエスちゃんも結構美人さんだとは思ってたけど、ちっちゃい子ってのはプラスアルファで色々別格だね」

梨香はアラス・ラムスの寝顔をしげしげと眺め、次いで視線をちよっと上げて恵美の顔もまたまじまじと見る。

そしてエメラダは、何も言わずにそんな梨香の様子をただ見ていた。

「心なし、似てる気もするし。目とか、口元とか」

「そ、そう？ そんなはずないんだけど、でも……今は、梨香にそう言ってもらえると、ちょっとだけ嬉しいかも……」

恵美は少し照れ臭そうに頬を赤らめながらアラス・ラムスの顔に視線を落とすが、「うん、でもなんとなく、おでこか眉毛とかは真奥さんに似てる気も……あ、そーゆーのはまだ受け入れられない感じ？」

「梨香としてはあながち冗談でもない正直な感想だったのだが、顔を紅潮させていたはずの恵美は一転、瘴気のような吐息を吐いて梨香を威嚇しはじめた。

「受け入れられないっていうか、私はこの間のことは感謝してるけど、根本的にはあいつを許してはいないから……なんというか、複雑なのよ」

アラス・ラムスにとって真奥はかけがえのない父親。そのことをいつまでも否定するほど、恵美も子供ではない。

だが、いかなノルドとの再会が成ったとはいえ、恵美の人生を狂わせた大きな原因の一つが真奥であることは決して変わらないのだ。

例えその背後にライラの思惑が見え隠れしていたとしても、真奥が悪魔の王を名乗る一個人である以上、彼の過去の暴虐は、彼の責任に帰せられるべきだと言う考えは変わらない。

とはいえ、もう自分一人では真奥を殺すことなどできないと、一度自覚してしまっている。それどころか、夢の中で彼の作る温かい食卓を探して感づいてしまったことから、自覚しないままに恵美は、相当部分真奥に心を許している。

そんな相手を理由をつけて憎み続ける必要があるのかとも思うし、彼の罪を裁く存在が自分である必要もまた、ないのではないかという思いもある。

「複雑、なのよ」

恵美はもう一度、自分に言い聞かせるように言うのと、

「おはよう、アラス・ラムス、起きちゃった？」

「うんむゅ……おあよこじや……むあ」

アラス・ラムスは眠い目をこすりながら大きな欠伸をし、次いで寝ぼけ眼をきよろきよろさせ、

「！」

梨香に目を留めると、弾かれたように顔を上げ、

「きゃっ!? ど、どうしたの？」

恵美の腕からさっと逃れると、素早い動きで恵美の背後に隠れてしまった。

「あ、ありやー? 驚かせちゃったかな？」

「あ、そっか。アラス・ラムスも、梨香と初対面なんだもんね」

「うう……」

アラス・ラムスは『まま』の背後に隠れながら、恐る恐る梨香の方を覗き見る。

「こ、こんにちは」

梨香は梨香で、小さい子に慣れていないのか、多少ぎこちない笑顔で怖いものを見るような顔のアラス・ラムスに手を振ってみる。

しかしアラス・ラムスはそれに恐れを為したかのようにさっと恵美の背中で顔を隠してしま

「ほらアラス・ラムス、ご挨拶しなさいやダメでしょ？　こんにちは、は？」

「……う」

恵美の声に、恐る恐るまた顔を上げるアラス・ラムスだったが、やはり寝起きに知らない人の顔を見た衝撃が先に立つのか、まだ及び腰だった。

だが次の瞬間、

「アラス・ラムスちゃんはい人見知りする子なんですかねー？」

「ひうつ!!」

背後からかかった声を聞いて、アラス・ラムスは掛け値なしに飛び上がった。

「あ、あ、アラス・ラムス!」

「お、あ、わ？」

ほとんど脱兎の勢いで、アラス・ラムスは恵美の背中から飛び出すと、今度は梨香の背後に隠れてしまう。

「お、おやあ？」

梨香は、背後からシャツを纏んで自分の背中に隠れる小さな存在を、こそばゆいような困ったような表情で振り返った。

「……ーちゃ……るの？」

「ん？　んん？」

アラス・ラムスが何か言ったような気がして、梨香は体をよじって耳を寄せる。

そして、何を聞いたか、困ったような、苦笑した顔でエメラダを見た。

「えめねーちゃ、なんでいるの？　だつて」

「あー」

「ええー」

それを聞いた恵美が、梨香と同じような表情でエメラダを振り返り、言葉の調子が元に戻ったエメラダは、不満そうに口を尖らせた。

「そういえばアラス・ラムス、エメのことがちよつと苦手なのよね」

「そんなあ。初対面の梨香さんの後ろに隠れちゃうほどですか？」

「この間あんなに大声出して脅かすからよ」

「だつてーこんなに可愛いの見たらーそりやあ叫びたくありませんよー」

エメラダは不満そうだが、梨香は小さな手が落ち着くまで待つてから、恐る恐る目線を合わせる。

「こんにちは？」

「………ちゃ」

アラス・ラムスはアラス・ラムスで、そのとき初めて自分が知らない人にくっついてたことに気づいたようだ。

だが恵美が何も言わないので、恐る恐る小さな声で挨拶に返事をする。

「初めまして、アラス・ラムスちゃん」

「……まして」

「私ね、恵美……あー、ままの友達の、鈴木梨香です」

「すうき……？」

「アラス・ラムス、梨香お姉ちゃんに、ちゃんと挨拶しなきゃだめよ？」

「う、あい、り、りあねーちゃ、はいめまして」

アラス・ラムスは緊張しているのか、小声でいささか元気がないが、それでも精一杯梨香に對してお辞儀をしてみせる。

「はい、初めまして。恵美、なんだいこの可愛い生き物」

梨香は早くも口が勝手に微笑みの形を作るのを止められなくなってしまっている。

「こりゃあ、皆がござって大事にしたがるわけだね。お手で小っちゃいなー！」

「あう」

梨香がそつとアラス・ラムスの手をつまむと、アラス・ラムスは恵美に助けを求めるような顔になりながらも、梨香にされるがままになっている。

「恵美もさ、これまでもこれからも、なんだか色々大変そうだけどもさ」

梨香はアラス・ラムスの両手を柔らかく握ると、視線をアラス・ラムスに向けたまま、恵美

に言う。

「何か吐き出したくなったら、呼んでよ。別に何かあったときでも、なんにもないときでも。

また美味しいお店探しとくからさ」

「……梨香」

「梨香さん……」

「折角だから、そんなときはアラス・ラムスちゃんも一緒に、ね？ アラス・ラムスちゃん、何か好きな食べ物あるの？」

「こーんすーぶと、かれー」

「おお、子供らしくていいじゃない」

「あとね、ちーねーちゃのからあげ」

「ちー？ ああ、もしかして千穂ちゃんのこと？ あの子、子供好みの料理できるの？ 凄いな。しかし、唐揚げとコーンスープとカレーが美味しいとか。洋食屋には心当たりあるけど、全部が美味しいとこつてなるとなあ。っていうかこんなに小っちゃいのに、そんなに食べれんのかね？」

梨香はそれ以上、恵美に対して、特別なことは何も言わない。

だが、恵美にはそれだけで十分だった。梨香は、恵美が遊佐恵美でも、エミリア・ユステイナであっても、変わらず一緒にご飯を食べに行こうと言ってくれる。

そこで、色々な話をしようと言ってくれている。それ以上、何を望むことがあろうか。

「本当に、素敵なお友達を持ちましたね、エミリア」

エメラダが、小声でそう言い、恵美もほんの少し目を潤ませながら小さく頷く。

「あ、でもご飯もいいけど、仕事は？ どうすんの？ 当分は日本にいらるんでしょ？ お金は……まあ恵美の生活だったらクビ即貯金ゼロってことはないだろうけど、このマンションだった相当の家賃なんじゃない？」

そんな、すぐに現実的な話を振ってくる梨香が、恵美は大好きだった。

「驚くなかれ、この部屋、家賃月五万円よ」

「え」

梨香はその値段を聞いて、逆に顔を顰める。

「そ、それって、なんかおかしくない？ 最寄り駅とか立地とか部屋の広さからして、十万以上するだろうなと思ってたんだけど……」

以前鈴乃に話したとき、彼女も家賃の安さに驚いていた。だが梨香はさすがに、その値段のおかしさの具体性を理解しているようだ。

「うん、実は……有体に言って、事故物件」

「うえ!? マジで!?」

梨香は驚くが、恵美はなんでもなしのように手をばたばたと振る。

「でも、この部屋が事故物件じゃなかったらきつと私、ドコデモにも勤めてないし、そもそも日本でちゃんと生活できてたかどうか分からないのよ」

「へ？」

「この部屋には沢山思い出が詰まっているの。いつかはお父さんと一緒に暮らすことになるけど、引越しのお金のこともあるし、ここを引き払うのはもう少し先のことになると思う」

梨香は、エメラダが何かを知っているかと思いい視線を飛ばすが、エメラダも何も知らないらしく小さく首を横に振った。

「まあとにかく家賃は意外となんとかなるの。お金は今ちょっと厳しくなってるけど、でも、新しいバイトの当てもあるわ。昨日電話したら、先方も猫の手も借りたいくらいに感じられて面接の日程も決まっているの。あとは履歴書に貼る写真を新しくするくらいかしらね」

「へえ！ なあんだ、さすが勇者。しっかりやるべきことはやってるね！」

梨香は恵美が語る明るい展望に笑顔になるが、

「でも、お金厳しいって何かあったの？」

なまじ職場の同僚であっただけに、恵美の収入もなんとなくではあるが把握できる梨香は、恵美の生活態度や家賃から考えて、恵美の金銭的困窮に不信を抱いたようだ。

「ああ、実はね」

恵美が真実から請求された借金や報酬のことを包み隠さず話したところ、

「うわあ……」

「ええ」

案の定、梨香とエメラダは顔を顰めた。

「いくら魔王つつたって、この状況でそういうことするかあ？」

「なんだかうちよつと残念ですねえ。あのときの魔王はそんなことしそにありませんでしたけど」

厳しい意見を呈する二人だが、意外にも恵美の苦笑は、怒りや失望を感じさせないものだった。

「二人ともそう思うでしょ？ 私も思ったわ。全然あいつらしくないって」

「へっ」

「きつと、私があんな無茶な要求に応じるはずないと思ってたんでしょね」

恵美は立ち上がると、テレビの脇の棚から、一冊の雑誌を取り出した。

「でも、私だってブライドってものがあるから、自分が作った借りは自分の力で返さなきゃ気が済まないし、それに……」

恵美は言いながら、付箋紙が貼ってあるページを開いて梨香とエメラダに差し出す。

「あいつの話術に乗ったらまた借りを作ることになるわ。だから」

「え、恵美、ここって……」

梨香は、付箋紙の貼られたページにあるその広告を見て、目を丸くしている。

恵美はその反応を予想していて、それでも自信たっぷりに梨香の問いに頷いた。

「私がここに応募したのも、あくまで私自身の意志なの」

魔王と勇者、立ち位置が逆になる



翌日の朝早く、アパートの外の道のエンジン音に気づいた芦屋が部屋から共用階段に出ると、果たしてそこには中型のトラックが一台停まっていた。

テレビCMでもよく名を聞く引越越し業者のラベリングがされたコンテナは既に開かれていて、トラックに乗ってきた引越越し業者が早くも荷下ろしを始めている。

アパートの前庭には鈴乃とノルドの姿があつて、引越越し業者とあれこれ話をしているが、芦屋の目的は二人ではない。

二人のすぐ傍にいる、金メッキされた酒樽が二足歩行しているときかと思えぬヴィ・ローザ笹塚の大家、志波美輝だった。

「ではノルドさん……こちらが一〇一号室の新しい鍵です。何かありましたら上の階の真奥さんか芦屋さん、そうでなければ隣に住んでおります私の所へ遠慮なく……」

「我々は管理人業務を請け負った覚えはありませんよっ!!」

ノルドに無責任なことを教えている大家に向かって、芦屋は共用階段の上から勇気を振り絞って叫ぶ。

その声に気づいた鈴乃とノルド、そして志波が芦屋を見上げる。

相変わらず志波と視線を合わせただけで芦屋は背筋に悪寒が走り、膝から力が抜けそうになるが、今日という今日はしっかり話をつけないければならない。

「あら芦屋さん、ごきげんよう。今日から正式にノルドさんが一〇一号室に同居することにな

りましたので、今色々説明して差し上げていたところですよ?」

「それは結構ですが、我々はこのアパートの管理人でも組合長でもありません! トラブルが起こったからといって我々の所に持ってこられても困ります!」

及び腰になりながら、芦屋は毅然とした態度でものを言う。

そもそも二番目の入居者である鈴乃からして、志波から「何かあったら真奥と芦屋を頼れ」などと無責任なことを言われていたのだ。

真奥と芦屋が日本に来てすぐの頃、志波に色々な便宜を図ってもらったとはいえ、なんの理由もなく管理業務を押しつけられる謂れもない。

「そう仰らないで。不動産屋の方から伺いましたのよ? これまでも色々トラブルがあつた際は、真奥さんが代表して住人の意見を纏めて色々と事務手続きをなさっていたと……」

「意見を纏めるも何も、我々とクレストイア・ベルしかいなかったのです!」

芦屋は階段を下りながら抗議を続ける。

「ならよろしいじゃございませんの。皆さん知らぬ仲でもなし、それどころかエンテ・イスラという故郷を同じくするご同輩でございませう?」

「同輩などであつてたまるのですか! 我々は悪魔で、人間達とは生まれも何もかもが違うのです!」

「それでも今は同じアパートに住む隣人同士。いけずなことを仰られるものではございませ

「ことよ？」

芦屋の抗議を柳の葉のように受け流す志波は、まるで教えずにそう言うのとドメとばかりにウインク一発。

「ふぐうっ！」

それだけで芦屋の心拍が大いに乱れ、意識を持っていかれそうになる。

「だ、大丈夫なのか？」

「アルシエル達は大家殿を前にするといつもこうなのです」

明らかに尋常でない芦屋の様子に驚くノルドと、いつものことと表情一つ変えずに解説する鈴乃。

胸を押さえながら冷や汗を流す芦屋だが、それでもなんとか呼吸を整えると、額に手を当てて首を横に振る。

「あら、お強いのか？」

「な、なんの話……ですか……ま、まあその件については今はいいです。それよりも大家さん、いい加減教えていただけませんか？」

「何をですか？」

あくまで優雅な微笑みを崩さない志波に、芦屋は食ってかかる。

「一体漆原はどこに入院しているのです？」

芦屋の渾身の叫びも、やはり志波の表情を動かさしなかった。

「ですから私の知り合いの病院ですよ。治療費が気になりなうでしたら、原因は私や天祿にあるのですからご心配には及び……」

「そういうことを心配しているではありません！」

芦屋は志波の言葉を途中で遮った。

「部屋からノートパソコンがなくなっているのです！」

「ノートパソコンですか？ 空き果が入るようなことはなかったと思いますが……」

「？」

「ああ、そういう」

志波とノルドは首を傾げ、鈴乃だけが得心したように頷いた。

「空き果ならばどんなに気が楽か!!」

芦屋は血がにじむほど強く拳を握る。

「漆原は、まさか病院にパソコンを持っていたのではないでしょうね!?」

血の涙すら流しそうな芦屋の問いに、志波は優雅な仕草で、あまり優雅とは言い難い形の顎に手を当てて、何かを思い出す。

「ああ、そういえば、せめてパソコンだけは一緒にとうわ言のように仰るので、天祿が部屋

「な、なんということだ!!」

芦屋はそれこそ、世界の崩壊を目の当たりにしたような絶望的な顔色になり、膝を震わせて崩れ落ちそうになる。

「まあ待てアルシエル。日本の病院は普通は携帯電話や電波の出る機器の使用を禁止しているだろう。まさかルシフェルも、入院先でまでネットで買い物をするとはあるまい」

ここで芦屋があまりに不憫になった鈴乃が、横から精神的助け舟を出した。

「そ、そうか……さすがだぞベル。その通りだ。私としたことが取り乱すところだっ……」

「漆原さんが入院されたのは特別室ですので、携帯電話もノートパソコンも使えますし、就寝時間が過ぎてもテレビが見られるんですよ」

「なんですってええええええええええええええええええええええ!!」

「おおっ!!」

鈴乃の言葉で一瞬この世に戻ってきそうになった芦屋だが、続く志波による死の宣告で断末魔の叫びを上げ、ノルドが驚いて凍んでしまう。

「カードを! 魔王様のカードを止めねば! ベル! 携帯電話を貸せ! 後生だ! 折角あの危機を乗り越えたというのに、これでは魔王軍は復興前から瓦解してしまう!!」

「落ち着けアルシエル! 如何な同居人とはいえ、魔王名義のカードをお前が止められはしないだろう!」

「なんということだ! ま、魔王様の勤務は始まったばかりだし……い、いやそもそも、漆原が入院したという日からもう何日も経って……おおおおおおおおお!!」

「こんな方ですけども、何かと頼りになる方々ですよ?」

「は、はあ……」

悶絶する芦屋とそれをなだめる鈴乃を見て、ノルドは当然のことながら志波の発言を全く信じる事ができない。

「そ、そうだ……必要書類を持って店に行けばお帰りを待たずとも……一秒でも早く……魔王様の口座を漆原の魔手から遠ざけねば……」

その後芦屋はふらふらと幽鬼のような足取りで階段を上がって二〇一号室に戻ってしまふ。が、すぐに階段ドアを叩き壊す勢いで飛び出してくると、そのまま階段を転がるように駆け降りて、道へと飛び出してゆく。

「魔王さまああああああ!!」

叫びながら走り去る芦屋を、ノルドはもちろん引越し業者も目を丸くして見送った。

「芦屋さんも、苦勞人ですよのね」

まるで他人事の志波はため息交じりにそんな感想を漏らす、真奥達の生活を間近で見えた鈴乃にしてみれば、芦屋のあの反応も致し方ないと思えてしまうのだ。

「……それで、大家殿」

「なんですか?」

鈴乃は、芭屋の叫びが聞こえなくなつてから、志波の巨体を見上げて尋ねる。

「今度の『話し合い』の場所が」

「ええ」

「その、ルシフェルが入院している病院であることには、何か意味があるのですか?」

鈴乃の心なし鋭くなった口調にも、志波はまるで表情を変えない。

真奥達がエンテ・イスラから帰還してすぐに、志波の提案で志波や天称から色々な話を聞く会議の場が設けられることになっていた。その日取りや場所も決まっていたのだが、この『話し合い』には不審な点がいくつもあった。

一つは今鈴乃が言ったように、場所が漆原の病室であること。

そもそも漆原の入院先が秘密にされているのに、その場所で話し合いとは妙ではないか。

それに、この『話し合い』の話題を出すと、千穂がなぜか表情を曇らせるのだ。

鈴乃も最初は気のせいかと思つたが、注意深く観察しているとやはり気のせいではなく、はつきりと不安をにじませたような目をしているのが分かる。

千穂自身は何も言わないが、恐らく自分達がエンテ・イスラに行っている間に、天称と志波から先んじて何か聞いているのではないかとも思える。

だから鈴乃は、少しだけ志波に向かって踏み込んでみたが、

「大したことではございませんよ。ただ、入院されている漆原さんにご負担がないようにと思つただけのことですわ」

「あの駄天使には、少しくらい負担を強いた方が良いと思いますがね……」

やはり、志波は簡単な鎌かけで何か漏らすほど脇は甘くないようだ。鈴乃はすぐに諦めて肩を竦めると、

「おーイ! オートーさん、スズノー! ん? あれアシヤ? あんなに焦つてどこ行くノ?」

表の道から、二人に向かって声がかかる。

「む……」

「おや、アシエス」

声のする方を見ると、アラス・ラムスの『妹』であり、イエソドの欠片のもう一人の化身であり、さらにはもう一振りの『進化聖剣・片翼』の核でもあるアシエス・アールがこちらに向かって手を振りながら歩いてくる。

「荷物が出来た心配がしたから取りにきたンダ」

「ああ、すまないな。志波さんも、アシエスがお世話になります」

ノルドがアシエスの言葉に頷き、志波に頭を下げる。

「全く問題ございませんのよ。部屋は余つておりますし、アシエスには良い話し相手になつてもらっていますから」

真奥達がエンテ・イスラから日本に帰ってきて、恵美とノルドが再会したことで、アシエスの立場は宙ぶらりんになってしまっていた。

元々ノルドの娘として、日本ではツバサという名で過ごしていたアシエスだが、ノルドの本当の娘が現れた以上、恵美に遠慮せざるを得ない。

それでアシエスを放逐するのも不人情な話だが、かと言って一人暮らしさせるには彼女のがつくらざる性格上、色々な不安が伴う。

では融合状態にある真奥と共に生活させれば良いかと言うと、それは普通に問題である。

アラス・ラムスは違つて成長した女性の姿をしているアシエスが、真奥と芦屋の部屋に居座るというのは、男達の方が生活面で色々な不便を強いられる。

いずれ漆原も帰ってくることを考えると人数的な意味でも、アシエスの魔王城住まいは現実的ではない。

ならばと鈴乃がアシエスの保護者として立候補しようとしたのだが、鈴乃はノルドの身边を護衛しなければならない都合上、あまり大きな負担をかけられない。

議論は紛糾し、真奥から一定距離以上離れないという事実を忘れてアラス・ラムスの妹なのだから恵美の家に、という話まで持ち上がったのだが、そこで名乗りを上げたのが意外にも大家の志波だった。

これには全員が驚いたが、志波は、

「一時のことですし、それに、私自身が、彼女と生活してみたいのです」

と言つて、半ば強引にアシエスを自宅に連れ帰ってしまったのだ。

それが一週間前のこと。

アシエスは居候。二日目にはもう馴れ馴れしい性格を存分に発揮し、志波のことをミキテイと呼んで憚らず、結構快適に過ごしているようだった。

「お前の荷物はベルさんが丁寧に梱包してくれたが、一応確認してみてくれ」

ノルドがアシエスを連れて、一〇一号室に入つてゆく。

そもそも日本にいること自体が誰にとっても予想外であったノルドとアシエスの旧宅は、これまた意外な場所にあった。だが住んでいた場所そのものはヴィラ・ローザ笹塚と似たり寄つたりのワンルームアパートで、家具家電衣類以外の物はほとんどなく、梱包の手間もかからなかった。

真奥と融合してしまっている都合上アシエスは旧居には行けなかったため、アシエスの私物は全て鈴乃が片付けたのだが……。

「む？ どうした？」

鈴乃は、段ボール箱を抱えて出てきたアシエスが眉根を寄せているのを見て尋ねた。

「あのサ。マオウ、今日も仕事だよネ？」

アシエスは困つたように、二階を見上げる。

「ああ、そのはずだ。何か足りないものがあつたか？」

引越しの荷物で、何か詰め忘れてしまったものがあつたのだろうか。

アシエスはさして大きくもない段ボール箱をもう一度改めてから、申し訳なさそうに鈴乃に手を合わせる。

「ウン。ゴメンネー。ちゃんと言っておけばよかつた。スズノ、オトーさん、悪いんだけど、また取りに行つてもらつてイイ？」

ノルドとアシエスの旧居は、真奥と融合状態であるアシエス一人で行ける距離ではない。

「いや、こちらこそすまない。確認漏れがあつたのだな。どんなものだ？ 教えてもらえれば……」

「また間違いがあつてもいいじゃない、アシエスがご自分で行つてらしてはいかが？」

そのときアシエスと鈴乃に、志波は優しく声をかける。

「いや、大家殿。実はアシエスと魔王は……」

鈴乃は一定距離以上離れることはできない、と言おうとしたが、志波は小さく首を横に振つた。

「アラス・ラムスさんはまだ赤ん坊ですの元に戻しましたけれども、今のアシエスにはなんのヤドリギもついてはいませんか問題ないはずですよ」

「ヤドリギ？ なんのことです？」

初めて聞く単語に鈴乃は首を傾げる。

「ついていたとしても私が……あら」

志波が何かに気づいて顔を上げる。

アシエスと鈴乃もそちらを見ると、そこにはアラス・ラムスを抱いた恵美と、そしてベレー帽を被った小柄な女性が一緒にいてこちらを見ていた。

「エミリアと……エメラダ殿か!?」

鈴乃は恵美の傍らに立つ人物に驚いて、笑顔で駆け寄る。

「どうも。お久しぶりです」

エメラダはベレー帽を取り、その場にいる面々に会釈をする。

「いや驚いた。一体いつ日本に？」

「昨日からですよ。図々しくエミリアのおうちにお泊まりしています」

「そうだったのか。しかし、二人ともこんな早い時間にどうした？」

「私が夕方からちよつとこつちの方に用があつてね。それより丁度良かったわ。志波さんにお会いしたくて早く来たんです」

恵美は志波に会釈をすると、エメラダを伴って志波の前に立つ。

「おはようございます志波さん。今日はお願いがあつて来ました」

「改まって何事ですかしら？ こちらのお嬢さんも、エンテ・イスラからの御客人でいらっし

やいますのね？ 初めまして、ではなさそうですね？」

志波はドレスの乱反射を押さえながら、エメラダに視線を向ける。

志波の視線を受け止めたエメラダは、ベレー帽を胸に当てて深く頭を垂れる。

「エメラダ・エトウヴァと申します。お察しの通りエンテ・イスラより参りました。先日のこちらでの騒動の際、遠くからお姿だけ拝見いたしました」

そう言つて顔を上げたエメラダの瞳はさすがに細められ、普段の茫漠とした雰囲気も感じさせぬ力強さで志波の目をしっかりと見つめ返す。

「強い力をお持ちの方のようね。鎌月さんと同じ……いえ、それ以上の」

志波はエメラダの視線に何を感じ取ったか、ほんの少しだけ声のトーンが下がる。

「それで、お願いと仰るのは？」

「三日後に聞かれるという『話し合い』に同席させていただきたく参上いたしました」

「うむむ……」

恵美の腕の中でアラス・ラムスが身をよじり、エメラダはそれに反応してアラス・ラムスを見る。

「エミリアから聞きました。志波さんが『世界組成』について……エンテ・イスラでは聖典の伝説にしか語られないセフィラとセフィロトについてお話くださると。それに是非、同席させていたいただきたいのです」

「一応、伺つてもよろしいかしら。なんのためにですか？」

志波の口調に警戒の色が灯る。

だがエメラダは志波の問いに、迷うことなく答えた。

「共に背負うために」

意図を掴みかねている志波が先を促すと、エメラダはアラス・ラムスと恵美、そして鈴乃を順に見てから再び志波に視線を戻した。

「私がエミリアやベルさんと同じ事実を知ること、私達の世界が背負うべき定めを、最初から共に支えたいのです」

エメラダは、再びアラス・ラムスに視線を戻す。

「エンテ・イスラはかつて、世界全体で背負うべき重荷をエミリア一人の肩に背負わせ、背負わせたまま、彼女を捨てようとした。そんなことはもう決して許されぬ。今また世界の真実を知るために歩みはじめた彼女を今度こそ支えるために、私は今日ここにいます。私はこう見えても、エンテ・イスラで位人臣を極めております。もしエミリアが知る事実が世界全体で背負わなければならないものだとしたら、私はそれを知らしめることのできる地位にあります。多くの人に、その事実を考えさせ得る立場にあります。ですから……」

普段のエメラダからはまるで考えられない程の熱量を感じさせる声で言い募られた言葉、志波は一言一言、頷きながら聞いていた。

「あなたの思いは分かりました」

いつしか警戒の色は薄れ志波は満足げに頷く。

「もともと遊佐さんや鎌月さんもそちらの世界の方。あなたお一人がいらっしゃったとしても、何も問題はありませんよ。あなたが私の話を悪用するような方でないことはよく分かりました。お時間が許すなら遊佐さんと一緒ににお出でなさい」

「……感謝いたします」

エメラダはもう一度、志波に向かって深々と頭を下げた。

「なんか分からんけど、メデタシメデタシ？」

話が終わったことは分かっても、話の内容までは全く吟味していないアシエスが気の抜けた合の手を絶妙なタイミングで入れ、思わず場に笑いが起こる。

「何やら千客万来だな」

「あ、おはようお父さん」

「おはようエミリア。そちらの方は？」

ノルドはエメラダを見て恵美に尋ねる。

「あ、そっか、お父さんに紹介したことなかったっけ」

「前はお父様は気絶していらつしやいましたからね」

緊張が解けたか、口調が元に戻つたエメラダが、ノルドに向かってまた会釈をした。

ヴィラ・ローザ笹塚一〇一号室の室内を恵美は改めて見回す。

二〇一号室と基本的な構造は当然一緒なのだが、窓から見える景色が違ふと、部屋印象が随分変わるものだ。

引越しの荷物ももとは少ないせいであらうかた解き終わっているようで、既に何日もこの部屋で過ごしているかのように全ての家財道具が部屋によく馴染んでいる。

「ベル、お父さんのこと何から何までごめんね。本当は私がやらなきゃいけないことなのに」

恵美は改めて鈴乃に頭を下げ、鈴乃は大したことはないと言を横に振る。

「私は何かと自由の身だ。気にしないでくれ」

「ブラネタリウム？」

そのときノルドの声で、恵美と鈴乃は顔を上げる。

「ああ、そういえばそんなものを買っていたなあ。どこかにしまっていたのか」

「ウン、宝物にしてたから部屋の分りにくいトコに隠しちゃったんだよネ。それでオートーさんとスズノが気づかなかったんだと思う」

アシエスが申し訳なさそうに言うが、

「でもブラネタリウムって、隠しておけるようなもの？ ああいうのって結構大きいんじゃないや

いの？」

恵美が手で形を虚空に作る隣で、エメラダが首を傾げる。

「なんですかーぶらねたりうむって？」

「星を見る道具……うん、ちよつと違うか。なんて言えいいのかしら」

「星を見る……？ 望遠鏡のようなものでしょうか？」

「そうじゃないの。星を直接見るんじゃないで……こう……なんて言えいいのかしら」

恵美が「プラネタリウム」の説明に困っていると、鈴乃が横から助け舟を出した。

「天象儀と言えは分かるか？ エメラダ殿ならもしかしたら使ったことがあるかと思うが」

「ああなるほど。星の運航を示す道具ですね？」

鈴乃の言葉にエメラダは手を打つが、逆に恵美は首を傾げた。

「その言葉だと逆に難しい気がするんだけど」

突っ込みは無視し、鈴乃は解説を続ける。

「用途も意義も天象儀で間違いはないのだが、日本の日常会話で「プラネタリウム」といえば、擬似的な星空を光学的に室内の壁や屋根に投影させて、それを鑑賞して楽しむための装置のことを指す場合がほとんどだな」

「な、なんだか余計に難しいわね……」

「半球形のドームの中心に、内側に強い光源を内包した黒い球体があると想像すれば分かりや

すい。ドーム内を真つ暗にして、その黒い球体に穴をあけると光がそこから漏れてドームの天井に星に見立てた光点を投影するのだ」

「なるほど。面白いですね。でも、それって見落とすほど小さいものでしょうか？」

話を聞くと「なんだかとても大きいもののような」

「んなことないヨ！ ウスッペライんだヨ！」

「薄っぺらい？」

「ああ、そうか、いくつも種類があるものを、組み立てていたっけな」

ノルドが思い出して頷く。

「そのプラネタリウムは固い紙を定められた手順で折り曲げたり組み立てたりして作るものなんだ。なんと言ったかなあ。ペーパー……ペーパークラ……」

「ペーパークラフトのこと？」

「そう、それだ。何かの本の付録で、アシエスがどうしても欲しいというので何号が続けて買ったことがあった。最初の号にこれくらいの台座がついていて」

ノルドが十センチ四方くらいの形を手で作ってみせる。

「後の号になると色々な季節の星空を映せるクラフトが解説書と共に追加されるようなものだった」

「たまにCMで見えるようなやつね。毎号色々なパーツがついてきて、全部揃えろとスーパーク

「ができる！　みたいな」

恵美の言葉に、アシエスは大きく頷く。

「でもネ、何枚もあるから、組み立てたまま置いておくとか埃積もって汚くなっちゃうんだ。だからお気に入りは一且解体してクリアファイルに入れて押し入れのスノコの下に隠しておいたんだ。さっき箱開けてみたら台座だけ入ってて、言うの忘れてターって思ってたサ」

「押し入れのスノコの下かあ。そういえばきちんと確認し忘れていたよ。あのスノコはもととあの部屋にあったものだから……」

ノルドがうつかりしたように、額に手を当てる。

「しかもゴティネイニ、私スノコの下の新開紙のさらに下に入れちゃったんだよね！」

「丁寧にの使い方や紙製品の隠し場所として適当かどうかはともかく、それくらいアシエスにとっては大事にしていた物だということだろう。」

「アシエスは、彼から一定距離以上離れられないのだったな」

ノルドはそう言っただけで立ち上がる。

「仕方ない、取りに行くか。ベルさん、申し訳ないがお願いできるか」

※

「電車って本当に速いですねー！　うううー」

「ちよつとエメ、電車内ではしゃいだり叫び出したりしないでよ？」

「しませんよううー」

恵美の注意に口を失せつつも、ともすれば子供のようにはシートに膝を立てて窓に張りつきかねないどうずずしているエメラダが、興味深げに車窓を過ぎる景色を追っている。

「仕方がない。私も初めて電車に乗ったときには、この速さにも、それ以外のことに色々驚いたものだ」

鈴乃はそんなエメラダの様子を懐かしむように見て、

「皆、申し訳ない。アシエスのために手間を取らせて」

その鈴乃の隣でノルドが小さく会釈をする。

ノルドとアシエスの旧居までは、笹塚駅から下り電車で二十分程の調布駅で下車し、そこからバスでさらに二十分ほどの天文台前停留所まで行く必要がある。

乗り継ぎ次第では片道一時間弱の道のりだが、エンテ・イスラから帰還して以来、ノルドが外出する際には常に鈴乃が護衛につくことにしている。

具体的な危険が迫る可能性は限りなく低い、あくまで用心のためである。

そこに今日は折角エメラダが日本に出張してきているし、恵美も父の日本の足跡をもう一度見ておきたいと言うので、こうして大勢でアシエスの忘れ物を取りに行くことになったのだ。

「でもノルドさんはどうしてこれから行く場所に住むことになったんですか？」

エメラダは車窓を流れる景色を眺めながら、ノルドに問う。

「お話を伺うとノルドさんが日本に来たのはエミリアよりずっと早い頃ですよ？」

「そういえば、まだエメラダ殿はその辺りの話を聞いていないのか」

鈴乃ははっとしてエメラダに顔を向ける。

「そうですね。エミリアに聞いていいのかな？と思いつつ昨日から機会をうかがっていたのですが……良ければ教えていただいても？」

「別に聞いてくれても良かったんだけどね。でも、私は色々考えちゃう話ではあったわ。もしかしたら……私とお父さん、東京の街中で気づかずすれちがっていた可能性すらあったかもしれないの」

恵美がさらにノルドに顔を向け、ノルドは古傷の痛みをこらえるように顔を顰める。

「私としては魔王サタンや悪魔大元帥アルシエルら魔王軍のトップが笹塚に居を構えることになった経緯も気になるがね。とにかくこれはエミリアが、魔王からの借りを返すのに私に協力させてくれなかったことと、少し関係もある話なんだよ」

恵美はその言葉に口元を引き結び、ノルドは少しだけ目を細めて、語りはじめる。

私が日本に来たのは、実はそれほど昔のことではない。

エミリアや魔王達とそう何ヶ月も変わらないのではないかなと思う。

幼かったエミリアを教会の司祭様に託して後、私は王侯軍や村の者達と共に、ルシフェル軍から村を守るべく戦おうとした。

その時点で既に私は、妻からイエソドの欠片を託され、不完全ながら剣として運用する術を身に着けていた。

元が法術士でもなんでもない農夫だから大した力はないが、それでもあのときの私は、本気で身を挺して村と、畑を守るために戦う決意を固めていたんだ。

エミリアとも妻とも約束をしていたからな。必ずまた、あの家で一緒に暮らそうと。

だが結果は知つての通り、文字通りの付け焼刃の聖剣など魔王軍の悪魔には歯が立たず、私は大勢の村人と共に村を追われた。

情けないことだが、スローン村を襲ったルシフェル軍の悪魔は、実は十頭もいなかったのではないかなと思う。

それから戦災難民として、二年ほど各地を流浪した。

エメラダさんは知っているだろうが、あの当時は大陸の通信網が完全に崩壊していて、セント・アイレや教会に書状を託したところで宛先に行きつく可能性は極めて低かったと聞いた。

村を焼け出された私には手紙をしたためる金すらないことも多く、サンクト・イグノレッド

に在るであろうエミリアに無事を知らせることすらできなかった。

何ヶ月かに一度、やつとの思いで出した手紙も、途中で紛失したのか教会が敢えてエミリアに秘匿していたのか、エミリアは受け取ったことがないらしい。当然だな。受け取っていれば、私が生きていることを知らないはずがないのだから。

そうこうしているうちにセント・アイル帝都にもルシフェル軍の魔の手が迫り、私はルシフェル軍の支配下で二年。つまりセント・アイルが制圧されていた期間と同じだけ、帝都の片隅で泥水を啜るような暮らしをしていた。

状況が変わったのはルシフェル軍が打ち倒され、セント・アイルが解放されたときだ。

だが多くの庶民や戦災難民にエミリアの名が知れ渡ったのは、その後しばらくしてからだった。

セント・アイル帝都エレニエムの解放当時、大神官と精鋭の教会騎士がルシフェルを打倒したという情報だけが回り、その教会騎士の名がエミリアという女性であると庶民の間に知れ渡ったのは数ヶ月後の北大陸解放戦前後のことであつたと思う。

私はエミリアが立派に成長し、妻が言っていたような魔を打ち払う力を入れたのだと心を震わせた。

だが破竹の勢いで魔王軍を撃破してゆくエミリアを、一戦災難民である私が追うことは不可能だったんだ。

教会を通じて幾度も接触を試みようとしたんだが、人類に希望が見えていたあの当時、勇者一行への期待と憧れは、日本で言えばスポーツ選手やアイドルの人気を何百倍にもしたようなものだった。

何せ世界中の何万何億という人間達がエミリア達に言葉や祈りを捧げたがっていたんだ。

そんな中、家族や縁者を騙る者など腐るほどいただろうし、実際私も騙りのような扱いを受けた。エミリアの故郷のスローン村の名を出しても、なんの効果もなかった。

もし本物の縁者と認められたとしても、世界中を行脚して回っているエミリアに手紙が届くかどうかは怪しいものだったからね。

私がそうやってセント・アイルで惑っているうちに、南の大陸のマラコダが倒されたという報せが世界を駆け巡った。世の中が一気に動いたのはその頃だったかな。

それまで制限されていた人間の移動や通商の規制が、一気に緩められ、魔王軍への反転攻勢のために世界の経済を立て直すという動きが各地で起こり、時間同じくして戦災難民への補償が各国で活発化した。

私はそのとき考えたんだ。

エミリアを追うことができないのなら、必ずエミリアが現れる場所で待てばいい。

幸いにして戦災保償給付を受けられた私は、許可を得てスローン村に帰ることができた。村は荒れ果てていたが、それでも家屋の土台は概ね残り、いくつかの畑も土地を整備すれば

復活できるのではないかと思える程度には残っていた。

そのとき村に帰った者か？ 残念だが、私一人だった。

村の生き残りは決して多くなかったし、長い難民生活の中で新しい土地で新しい生き方を見つけた者。故郷に帰ることを拒否した者。ルシフェル軍の統治の中で命を落としたりした者、様々だったよ。

帰る意志がある者も、まずは近くのカシアス城塞市で生活を再建することを考える者がほとんどだった。

今思えばカシアス城塞市に多く人が流れていたのもオルバという大神官の策略だったのだろ
うが、とにかく私はその時点で、エミリアが魔王軍を駆逐することを半ば確信していた。

それならば村で待っていればいつか必ずエミリアは帰ってくるだろうと、そう思っていた。
だが、それから何日もしない内に村に現れたのは、予想だにしない人物だった。

ある意味エミリアが帰ってくるよりも、衝撃だった。

幼いエミリアを私に託し、ある日忽然といなくなった妻……ライラが、現れたんだ。

電車が調布駅地下ホームに到着し、四人は電車を降りる。

長いエスカレーターを上がって地上に出ると、すぐ右手に大きなバスロータリーがあった。

「私が来たばかりの頃は、調布駅の駅舎は地上にあったんだがな。短い間に、随分様変わりしたものだなあ」

ノルドはバスロータリーを見回してそう言う、

「あの乗り場だ」

先に立つて京王バスの乗り場に並ぶ。

「武91」と表示された路線図の途中には、確かに「天文台前」停留所の文字がある。

「調布駅から天文台前へ向かうときにはここから乗ればいいが、逆に天文台前から調布駅に行きたいときは、一つ前の調布銀座停留所から降りて歩いた方が早いこともあるんだ。向こうの十字路が、よく渋滞しているから」

異世界の勇者の父が調布を案内しているのもおかしい話だが、案内されている方にも一人もこの世界の人間がいないのだから皮肉なものだ。

「日本に来て、最初のうちは新宿に住んでいたんだ」

「それほど近い場所には……」

ノルドの身の上を既に聞いている鈴乃も、この事実にはやはり唖然たるをえない。

恵美とノルドは、電車でたった二十分弱の距離のところお互いが暮らしているとも知らず、一年近い日々を東京で孤独に生きていたのだ。

「新宿でしばらく過ごすうちにアシエスが突然顕現した。アラス・ラムスのような赤ん坊の時

期はなく、最初からあの姿で生まれてきた。彼女がどうしても星の見える場所に住みたいと言うので、日本に来てから何かと世話を焼いてくれた男が教えてくれたのが、これから行く天文台のある街だった。

佐藤、という苗字は、その男から借りて必要に応じて名乗っていたものだという。ならばそれ以前は、一体どのようにして日本で過ごしていたのかという疑問が当然湧いてくる。

恵美も、真奥も芦屋も慣れぬ異世界で必死に働いたが、言葉の壁を越えられたのは魔力や聖法氣の力によるところがかなり大きい。

ただの農夫であるノルドがその壁を如何に越えて、どのように糊口をしのぐ糧を得ていたのか。

「何、簡単なことさ」

ノルドはやってきたバスに乗り込み、慣れた手つきで整理券を手にとると、最後部の座席に向かい言った。

「日本語の手ほどきを受けたんだよ。妻からね」

荒廃した村や畑をどうにか復興させようと、荒れた畑の中で草を刈り取っていた私の前に降

り立ったのは、まぎれもなくライラだった。

自分の目を疑る暇すらなく、彼女は言ったよ。

「こんな事態を招くつもりはなかった」とな。

私はその言葉の意味を図りかねていた。

だが私が何かを尋ねる前に、ライラは言った。

「万が一のためにあなたの聖剣を成長させねばならない。私達の思い出の地へ急がなきゃ」

この聖剣とは今のアシエスのことだ。

だがこのときは単なる不思議な力を持った剣でしかなく、夕陽の中で私はライラに請われるままに剣を顕現させて、一体どういうことかと問いただした。

今この瞬間も、エミリアは魔王軍と戦っている。私のこの力をエミリアの役に立てられないのか。或いは天使である妻がエミリアに手を貸すことはできないのか、と。

ライラの答えは、またも要領を得なかった。

「どうしてこんなことになったのか分からない。サタンは心の痛みを知っている優しい子だったのに」

それこそ私には訳が分からなかった。

サタンとは、まさに今エンテ・イスラを侵略せんとしている魔王の名だ。だがライラの口調は、まるで以前からサタンを知っているかのような言い方だった。

「あなたにずっと苦勞をかけてごめんなさい。今話せることは何もかも話すわ。だから今は、私達の思い出の場所に」

私は何も分からないまま、ライラに手を引かれ、スローン村から東の山に飛んだ。

村から半日は離れた場所にある、今は狩猟区になっている山だが、私とライラが共に暮らしていた頃は手つかずの森が広がる普通の山だった。

その五合目くらいの南斜面にテラスのように張り出した土地があったんだ。

若い頃の私とライラのお気に入りの山で、そこに別荘として小屋を建て、農閑期などはよくライラと小旅行をしたものだ。

有体に言え、二人の秘密の別荘。その思い出の地に、ライラは私を誘った。

……エミリア、何故この山の話をする、そんなに機嫌が悪そうな顔をするんだ？

私達はそこを、星空のテラスと呼んでいた。

……エメラダさん、何故そんな黄色い声？ 何かおかしいことを言っただろうか？

テラスに着くと、ライラは私からイエソドの欠片を分離した。

そして、掌に収まりそうな小さなその欠片を、朝陽が一番に当たるテラスの隅の地面に植えたのだ。

その行為にどんな意味があるのかは、今でも分からないんだ。

説明はされたが、理解しきれない、と言った方がいいな。

それからライラは、私に色々な話をしてくれた。

私と、生まれたばかりのエミリアに託されたイエソドの欠片の意味。

聖典に語られているセフィラやセフィロトの樹や天使達の真実。

今エンテ・イスラ全土を脅かす魔王軍の首領、魔王サタンの正体。

天界の禁忌である「大魔王サタンの災厄」の伝説。

一度では、とても理解できない話ばかりだった。

何よりライラは、とても焦っていた。

私はライラを信じていたが、俄かには飲み込みがたいその話を理解するよりも先に、ライラ

は私に言葉を教えたかった。

そう、日本語だった。

その通りだエメラダさん。その時点でライラは、既にこちらの世界のことを知っていたことになるんだよ。

ライラは私とエミリアを……というより、イエソドの欠片を天界の手の及ばないところに退避させることを、かなり早い段階で計画していたのだと思う。

その下地も長い時間をかけて整えていたようだ。

私としては、どこにも知れぬ世界で繰り返られていた問題よりも、そのときまさにエンテ・イスラの地で戦っているエミリアの行く末が気になって仕方なかったが、いざとなれば、

エミリアは私が身を挺しても守る、という妻の言葉を信じて、私は妻の手解きに従った。
うん？ 何故そうも簡単にライラを信じられるのかだって？

さてなあ、こればかりは一言では言い表せないが……私は、出会いの事情もあって、最初からライラが天使だと知っていた。

出会ってからエミリアが生まれて、ライラが私の下を去るまで色々なことがあった。

例えばライラは天使だから強大な力を持っていたが、どんな場合でも、その力を振るうことはなかったように思う。

ある年、夏の気温が例年よりもずっと低く、凶作は避けられないことがあった。

私は尋ねた。ライラの方で村の麦を救えないかと。

するとライラは言ったよ。

『無理矢理自然の姿を歪めても、いつか揺り戻しがやってくる。あなたは私を、本物の天使にしたいの？』と。

そのときに限ったことではなかったが、ライラは己が天使であることを嫌悪しているのではないかと思うことが多々あった。

それ以来私は、ライラの秘められた力をかすかでも当てにしているのではないと、固く自らの心に戒めた。

ライラは、私が旅の行商から贖った古着に満面の笑顔で腕を通した。周りの農家のおかみさ

ん達の色に染まることを何よりも好んだ。

美しい手を、冬の寒さでひび割れさせ、農作業で痛めつけ、隠えた臭いのする肥しに突っ込むことを躊躇わなかった。

楽しいことばかりではなかった。仲たがいするような喧嘩も、一度や二度ではない。

だが、私は一度たりとも彼女の心を疑ったことはない。疑う必要もない。

理屈ではないんだ。妻を信じる、ということ……。

エミリアが生まれた日のことを話そうか。

ライラのお産は、それはもうあの細い体のどこにこんな大音量の絶叫を上げる機能が備わっていたんだと思うほどに難産だった。

私の気遣いなど麦粒ほどの意味もなきない。

こんなことを明かすと後で怒られるだろうし、ライラ本人は「そんなことは言っていない」とムキになって否定していたが、私も村の産婆もライラがお産の痛みに苦しんでいる最中、そう言ったのを確かに聞いたよ。

「たった今、呑気な顔してふわふわ飛んでいる世界中の海鳥が死ぬほど憎い!!」

訳が分からないだろう？

私は生まれてから一度も海を見たことがなかったし、そう言われてもだからどうしたとしか言いたくないのだが、その瞬間不覚にも私は笑い出してしまって、そのままライラに部屋

から蹴り出された。

それからしばらくして産声を聞いて駆け戻ったときには、ライラはもうエミリアを抱いてわんわんと泣いていた。

生まれたばかりのエミリアと張り合わんばかりの泣き方で、私はどう声をかけていいのか迷った。

だがライラは、涙でぐしゃぐしゃの顔を私に向けて言っただ。

『ありがとう。私はこの世界の人間になっていたいんだ』

その言葉の意味をなんとなくでも理解したのは、それから十五年後の星空のテラスのことだった。

十五年ぶりの再会でライラは言った。

私も天界の住人も、聖典が語る天使なんかじゃない。

分かりにくくなるから便宜上天使と呼ぶが、天使達はエンテ・イスラに本来生まれるべき神を横から奪い取るうとした泥棒の一族なのだライラは言った。

自分達の繁栄のためにエンテ・イスラの人々から未来と神様を奪おうとした、咎人の集団なのだ。

ライラは自分が天使であることも、自分の同族達がそのような所業に及んでいることも思ひべきことだと感じていた。

大地に根ざし、己に許された時を精一杯過ごし生きる喜びを得てこそその命ではないかと。

だが天界が今のまま存続すれば、いずれ遠くない未来にエンテ・イスラの人類にとって良くないことが確実に起こる。

私は、なんとしてもそれを止めなければならない、と。

だがライラのその思いを邪魔する者達が、かつて私とエミリアからライラを引き離した。エミリアが生まれて一年目の秋だった。

その夜、ライラは初めて私と出会ったときと同じ姿……天使の姿をしていた。

あれだけ忌避していたその姿に何故戻るのがか問いたです間もなく、ライラは私とエミリアに、一つずつ紫色の水晶の欠片を手渡した。

もちろん、イエソドの欠片だ。

『私を、この世界の人間として迎えてくれたあなた達に、持っていてほしい』

ライラはそう言った。

私はどういふことかと尋ねたが、ライラは首を振るだけだった。

『私とあなたの子には、いずれこの世界を覆う「魔」を打ち払う力がある。その力を、今ここに守らなければならない』

今思えばこのときライラの言った「魔」とは、魔王軍のことではなく、もっと大きな邪悪を示していたのかもしれない。

「私はまだ、捕まるわけにはいかない。あなたと、エミリアの未来を守るためにも。だから、今は行かせてください」

私は、ライラの誠意と愛を疑ったことなど一度もない。もちろん離れたくはなかった。だがライラがそうすべきと判断する何かが起こったのなら、その判断に従って欲しかった。

「必ず帰ってきてくれ。私は、いつまでも待っている」

そう、私はライラに告げた。

ライラは私に深く頭を垂れると、紫色の水晶を私達の体に融合させた。

まるで掌に落ちた雪が溶けてなくなるように、なんの感触もなくただ手の上で欠片が解けて消えた。

「欠片に、あなた達を守ってくれるようお願いしたわ。勝手を言っでごめんなさい。でも、必ず戻ってきます」

ライラはそう言うのと、私から離れていってしまった。

彼女が空に飛び立つのを私はただ見送った。

ライラの光が東の空に消えたとき、ライラと似たような光の筋が、西から東へライラを追うように通り過ぎていったよ。

そのとき、不思議なことが起こった。

光がライラを追って東の空に飛び去ったとき、私の手に、あの聖剣^{せいけん}がなんの前触れもなく出現したのだ。

頼りない姿をしていたが、それがライラの託した水晶の力によるものだとすぐに分かった。

剣はまるで、空の光の帯を警戒するように小さく震えていた。

空の光が消えるまで見送ってから家の中に戻ると、エミリアの小さな手の中に、まるで折り紙を捧げるための十字架のようなものが浮かびあがった。

恐らくそれがエミリアが振るった、進化聖剣・片翼^{ひよく}の原初の姿だったのだろう。

しばらくして、剣も十字架も光の粒となって体の中へと消えていった。

私には大変な使命を負ったという意識はなかった。

ただ、エミリアを守らねば。ライラが何かの戦いを終えて帰ってきたときに、またこれまで通りの暮らしができるようこの家を守らねば。そう固く心に誓った。

結局それ以後、魔王軍が侵攻してくるまでライラが戻ってくることはなかったが、エミリアが母親を恋しがって泣くようなことは一度もなかった。

恐らく欠片の力が、エミリアの心を包んでいたからだとは私は思っている。

「お、天文台前だな」

ノルドはバスの次の停留所表示が出たのを見て、慣れた手つきで停車ボタンを押す。
そしてふと、並んで座る鈴乃達を見て尋ねた。

「うん、どうした？」

「い、いえ」

鈴乃は唇を固く引き結んで明後日の方向を見ているし、

「……もお……」

恵美はしかめつ面のまま頬を赤らめて下を向いているし、

「とても重要なお話だったということはよく分かるんですが」

エメラダはなぜかにやけた顔で、頬に両手を当てながら身をよじっている。

「なんというか、その」

間もなく天文台前停留所にバスが停車した。

ノルドは首を傾げつつもシートから立ち上がり、手慣れた様子で料金箱に整理券と小銭を投入する。

鈴乃とエメラダはその後にゆっくりと続きながら、いわく言い難い顔で顔を見合わせ、恵美は二人から顔を逸らしてまた何かをこらえている。

「すっごく、ごちそうさまうな感じでした」

「うん？」



エメラダの言う意図が伝わらなかったのか、ノルドは釈然としない顔のままバスを降る。後に続く三人は、確かに自分達を取り巻く状況を理解する上でなくてはならない話だという認識はあったものの、そこに絶妙に混じるノルドとライラの情熱的な青春時代の話を聞かされて、何が重要なのか見失いそうになっていた。

「ふう……バスの中の暖房がキツかったな、うん」

バスが立ち去ると、鈴乃が詰めていた息を吐き出すように大きく深呼吸し、掌で顔を扇ぐ。「それで……どういう事情で、ライラさんと再会した？ 星空のテラスからこの三鷹に来ることになったんですか？」

「あの場所がそんな名前だったなんて……なんだからあ」

エメラダが、なかなか声に出して呼ぶの憚られる単語をさりと口に出し、それを聞いた恵美がまた顔を赤らめて下を向いてしまう中で、ノルドは大きく頷く。

「歩きながら話そうか。ベルさんとエミリアには何度も来てもらっていたが……こちらだ」ノルドはエメラダを促しながら、話を再開する。

十五年ぶりに再会したライラは、私と私の欠片を、一刻も早くどこかに隠したがっていた。そしてその場所を、エンテ・イスラではなくこの地球に求めた。

言葉について、ライラの手ほどきを受けた、とはいえ、別に教科書を使って一から単語を学んだわけではないよ。

ライラから概念送受で、大元の知識を授けられて、あとは実践訓練を数日しただけだ。

おかげで今でも日本語だけで話すときには言葉遣いが正確でないことがあるが、全く意思疎通が図れない、ということはない。

ライラは急ぐ理由に、エミリアの勇者としての活躍と、魔王軍の侵攻が大きく関わっていると告げた。

エミリアの持つ聖剣も、纏う破邪の衣も、私の聖剣と同じエソドの欠片の核から生まれている。

その反応を天界に察知される可能性がある、というのだ。

これまでにもライラは、世界中のあらゆる人物に欠片を託していて、その場所が察知されることになる度、自分の持つ欠片で追手を誘導していたらしい。

それをそれこそ私が生まれるずっと前、何百年も前から続けていると言っているのだから恐れ入った。

だが今回ばかりはエミリアの持つ力が強すぎて、カバーしきれないと言っていた。

だから私がエミリアの聖剣が追手にかぎつけられたときの保険として、私を異世界に逃がしたい。そんなことを言っていたように思う。

もちろん私は尋ねたよ。エミリアにその追手の魔手が伸びたらどうなる、とね。すると、ライラは言った。

命に代えても娘を守ると。
私に言わせればライラもエミリアもかけがえない存在だ。命など張られてたまるものかとも思ったが、人知の及ばぬ力を持つライラがその覚悟を抱いているのであれば、私に言えることは何もない。

それに、私はライラを信じていた。だから彼女の意志を尊重し、従った。
もちろん色々大変だったよ。

覚えるべきことは言葉だけではない。何よりも、金のことを一番に叩き込まれたな。

だが実際にATMというものを見るまで、世界中どこにいても人間を介さずに自分の金を引き出せるというシステムは理解ができなかった。

この紙幣という存在もな。金でも銀でもない手形のようなものに、金貨を上回る価値があると理解するのも苦労した。

この国で身分を証明してくれるパスポートという手帳や、銀行の預金口座と通帳などもその場で手渡された。

そのとき初めて不安になったな。一体私は何をやらされているんだろうと。
未知の世界のことをあまりに急激に詰め込もうとするので、途中で十五年ぶりの喧嘩もした。

結局途中で喧嘩そのものが懐かしくなってしまうって喧嘩にもならなくなったが……どうしたエミリア、その顔は。

ああ、うん、続きか。

それだ。幾日か経ち、ライラは埋めた欠片を掘り起こし再び私に融合させた。

その日は、ライラが言うにはアルシエルがエミリアに負けて東大陸から撤退した日だったそう。

『もう少し時間をかけて、こっちで生まれさせてあげたかったけど』

ライラはそう言うのと、私の手を握って言った。

『ずっと勝手ばかりでごめんさい。でも、お願いだから私を信じてください』
私は言った。信じなかったことなどない。

ライラは十五年前と全く変わらぬ美しい笑顔を見せると、空を振り仰いだ。

私も釣られて空を見上げると、そこには驚くことに天使がいた。

巨大な鎌を持った小柄な男の天使だった。

もしかしたらその天使が、十五年前にライラを追って東の空に消えた光の正体だったのかも
しれない。

白い翼と髪の色がライラと同じなだけで、ひどく冷たい目をしていた。

だがその天使と対峙した直後から、私の意識は急激に閉ざされた。

そして気づくと、新宿……正確には少し代々木寄りだが、とにかくもう、日本のアパートの中に倒れていた。

私は混乱した。ライラから教えられてこいたが、部屋から外に出た途端かいだことのない臭いと聞いたことのない音、見たことのない光に襲われて私は固まった。

この国に来てからやるべきこともライラから教えられてはいたが、実際に外に出られるようになるまで三日を要した。

恐ろしかったのだ、未知の世界。未知の人類が。

備蓄されていた食糧が尽きて、致し方なく外に出て、コンビニで初めての買い物をした。

百円で買えるパンが、私がエンテ・イスラで食べていた燕麦パンとは似ても似つかないほど美味だったあの瞬間は、今でも鮮明に思い出せる。

とんでもない所に来たと思ったよ。

それから私は一週間かけてアパートの周囲の地理を把握し、生活するための経済活動覚え、そしてライラから指示されていたことを実行した。

散歩だ。

アパートから歩いていける距離に代々木公園があって、そこを一日一回必ず散歩して、空を見上げ、木の香りをかぎ、土の上に寝転んでくると。

それが、欠片を育てることに繋がると、ライラは言った。

欠片を育てる、という言葉の意味を理解したのは、散歩を初めて二ヶ月ほどした朝、突然聖剣が顕現し、人の形を取ったときのことだった。

そう、アシエスが生まれたんだよ。

私は焦った。生まれたときから十代の少女と変わらぬ姿のアシエスは、最初からある程度日本語を理解していた。

私がライラに繋がるものだということも理解していて、意志疎通には困らなかった。

ただ、なんと言うか、問題が起きた。

アシエスは、とにかくよく食べたんだ。

あらかじめライラが用意してくれていた金が、アシエスが生まれると同時にそれまでの倍以上のペースで減りはじめた。

残高にはかなり余裕があったが、とはいえいつまでアシエスと過ごさねばならないか分からない以上、無闇やたらと浪費するわけにもいかない。預金が尽きてからでは遅いのだ。

だから私は仕事を探すことにした。

セント・アイル帝都での被災難民生活のおかげで、どんな仕事でもできる自信はあった。

そんな折に日雇いの派遣の仕事を始め知り合ったのが、佐藤という男だった。

佐藤のおかげで私が持っているパスポートに押されたスタンプが、就労ビザというものであることも知った。

やろうと思えば私は、日本でかなり自由に仕事をすることができたのだと分かった。

佐藤は普通の日本人だったが、とにかく経歴が特殊で、なんでも知っている男だった。

日本について彼から学んだことはとても多い。

ん？ ああ、私が彼の名を借りていた理由か。

ごく単純にアシエスと親子として一緒に暮らしていて傍から怪しまれたためだよ。

もちろん仕事を探したりする上で名前を偽ることはしていない。銀行口座の名前も本名のままだったしな。

ただ渾名としてそう呼んでくれと周りに言うようにはしていた。あまりにささやかな抵抗だが、ライラが私をこの国に飛ばしたことを考えると、ユステイナーの名を極力表に出さない方がよいと思ったんだ。

あとは佐藤の複雑な経歴が、戦災難民時代の自分と重なったのも大きかったなあ。

とにかくその佐藤としばらく現場で一緒に働いて、そのうちに佐藤に相談した。

近くで、星が見られる街はないかと。

そこで佐藤が勧めてくれたのが、この三鷹の国立天文台がある街だった。

日本の天文観測の中心とも言える場所で、何ヶ月に一度か天文観測に関する様々なイベントが開かれ、申し込みは誰でも自由に参加できた。

さらに、佐藤はこの街で仕事を紹介してくれた。

かつて彼自身がそこで働いていて、安い家賃で住み込みで働くことができて、しかも夜空を見上げながら仕事ができるという。

アシエスに話すと、是非そこに引越したいと言った。

ライラの用意してくれた部屋を出るのに抵抗はあったが、彼女なら例え場所を移動しても、アシエスの気配を頼りに探し当ててくれるだろうと思った。

そうして移り住んだのが、ここだ。

エメラダは、何台ものバイクが並ぶ小さな建物の前で、掲げられた看板を見上げる。

「『詠光新聞販売所』と書いてある。情報媒体である、新聞を集配する場所だ」

鈴乃が横から、漢字の文字を解説した。

「少し待っていてくれ。所長に部屋を開けてもらってくる」

ノルドはそう言うと、気安い様子で新聞販売所の引き戸を開けて中に入っていく。

「このために原付の運転免許が必要だったのよね……」

恵美は、ノルドとアシエスと真央が出会ったのが運転免許試験場に行く道中のバスの中だと聞いて、一体どういう理由でノルドが免許など取ろうとしていたのかずっと疑問だったのだが、販売所の前にずらりと並ぶ新聞配達用のバイク、ホンダ・ラディッシュを見て改めて納得する。

自転車も少数置いてあるが、ラディッシュを運転できればスムーズな仕事ができるだろう。「星空を見ながら仕事」という点に於いても、確かに新聞配達には朝陽が昇る前の暗いうちから街を縦横無尽に駆け回り、各戸に新聞を投函している。

恵美自身は体験したことはないが、新聞販売所の中には住み込みで勤める場所もあり、朝夕のごく限られた時間で仕事をして、昼は学校に通う新聞奨学生なる身分もあると聞いた。

新聞配達の仕事は決して楽な部類の仕事ではないが、農作業で鍛えた体に、戦災難民の境遇を生き抜く精神力を持ったノルドにとっては、それこそ朝飯前の仕事だっただろう。

インターネットやテレビに押されているとはいえ、まだまだ情報媒体としての活力は健在のひろし。漆原が来るまで図書館に行かねば情報を取得できなかった真央や芦屋よりも、ノルドの方がずっと新鮮な情報に触れてきていたのではないだろうか。

やがてノルドが初老の男性と共に出てきて、販売所の裏手に行くのが見えた。この販売所の所長で、恵美も一度だけ挨拶をしたことがある。販売所の裏手には、ヴィン・ローザ笹塚と似たような趣のアパートがひしめいており、その中の一棟がこの販売所の寮として使われていた。

「ところでエミリアー」
込み入った住宅街の様子を興味深げに眺めながら、ふとエメラダが気づいて恵美に尋ねる。

「ん？ なあに、エメ」
「先ほどのノルドさんのお話を伺っても、エミリアが魔王からの借りを返すのにノルドさんの協力を得ようとしなかった理由が分からないんです」

「ああ、そのこと」
恵美は苦笑して、新聞集配所の看板を見上げる。

「単純に私の貯蓄に結構余裕があったのと、あとはまあ……意地っ張りって思われちゃうかもしれないけど、お母さんのせいね」

「お母さん……ライラのですか？」
「そ」

恵美は嘆息して首を振る。

「お母さんが悪人だとは思わないけど、それでも今の私やお父さん、それに魔王の状況だって、少なからずお母さんが関わっている。お父さんが持っているお金のいくらかは、お母さんが用立てたお金でしょ？ そんなお母さんのお金を当てにしたくはなかったの。それに面倒な事情は抜きにしても、私が勝手に作った借金を清算するのに親のお金を当てるのは何か違うな」

「はあー」
それだけ聞けば筋は通っていいのだが、それでも喫緊の事態に対しては確かに意地を張りす

きているとも言える。

「エメラダ殿。仕方のないことだ。エミリアはこのようなことに関して非常に頑固だ。良く言えれば潔癖なのだろうが」

「ですわ……そういうところは全然変わりませんわ」

「お褒めにあずかり光栄よ」

鈴乃とエメラダの苦笑交じりの諦めに、惠美はむしろ得意げな様子で口を尖らせてみせた。それから十分ほどして、ノルドがクリアファイルを手に戻ってくる。

ノルドは所長に一札すると、惠美達のところに戻ってきた。

「相当溜め込んでいたようだよ」

読買新聞のロゴが入ったクリアファイルには、随分沢山のペーパークラフト台紙が挟まっている。

「アシエスは、何故そんなに星空を見たがったのですか？」

「うん……これは私の推測なのだが」

ノルドは手のクリアファイルを見ながら、鈴乃の問いに応える。

「そもそもアシエスが生まれる前から、ライラはイエソドの欠片について話すとき、やたらと空にこだわっていた。代々木公園の散歩の話もそうだし、星空のテラスで欠片を埋めたのは、太陽の光が朝一番に差す場所だからという話だったと思う。空、特に夜の星空は、彼女らにと

って、なんらかの重要な意味があるんだろう。確かこれは……」

と、ノルドはクリアファイルの中から、一番薄い紙を取り出す。

それはペーパークラフトではなく、一枚の台紙に大きな丸い透明のセロファンが張ってあるものだった。

「天文台で月の観測イベントがあったときにももらったものだ。後ろから光で照らすと、壁に月の地図が浮かび上がるもので、アシエスは特にこれに気に入っていたようだ。アシエスのコレクションの中にはなぜか、月にまつわるものが多いんだ」

「月……ですか」

聖典に伝わる、世界組成の宝珠であるイエソドが司る惑星は、月だ。

それが関係あるのかどうかは分からないが、鈴乃は思案顔でペーパークラフトの束を見る。

「でもアシエスちゃんのコレクションが見つかって良かったですね」

「それはそうかもしれないが、随分あっさり用が終わってしまったなあ」

ノルドはエメラダの言葉に頷く。

「もう少し色々話したいが、まだエミリアにも話していないことがいくつかあるし、できれば関係する皆が集まっている場所でちゃんと順序立てて話したいところだ」

「そうね。ちよつと嫌だけど、魔王達と照らし合わせなきゃいけない話もあるし……。今はアシエスにそれを届けてあげればいいんじゃない？ 私も今から笹塚に戻ると、夕方の用事に丁

度いい時間になるし」

恵美は言いながら、バス停に戻ろうと踵を返すが、

「そういえば、エミリア。一体夕方からの用とはなんなのだ？」

鈴乃の問いに、ふと足を止める。

「うん、実はね」

恵美は少し困ったように微笑みながら、鈴乃を振り返った。

「アルバイトの面接なの」

※

マグロナルド・幡ヶ谷駅前店のスタッフルームで、顔を合わせるなり千穂は頬を膨らませながら真奥に詰め寄ってきた。

「真奥さん！ 鈴乃さんから聞きましたよ！」

「え？ な、何が？」

出会った頭の女子高生の剣幕に、全盛期の魔力を取り戻した悪魔の王サタンは、完全に壁際まで追い詰められてしまう。

「そりゃあ、真奥さんと遊佐さんが敵同士だってことは私も分かっています！ でも、だからっ

てデリカシーなさすぎです！」

「あ、ちーちゃん、いや、それはね……」

「真奥さんも大変だったのは分かりますし、お金の問題が大切なのも分かります！ でもやっぱり、遊佐さんのお父さんの前でそういうこと言うのは良くないと思います！」

千穂はどうやらかなり真剣に怒っているようだ。

そういうこと、というのは、要するにまだ回復しきらないノルドの前で、恵美相手に借金返済の督促をしたことを言っているのだから。

真奥は心の中で、余計なことを千穂に漏らした鈴乃に恨み言を言いながら、必死で千穂をなだめようとする。

「いや、ちーちゃん、これには深い事情が……」

「せめてマグロナルドとか、真奥さんの部屋とか、鈴乃さんの部屋とか、遊佐さんのお父さんがないところとか、やりようあったんじゃないですか？」

「頼むちーちゃん、言い訳させて！ ちゃんと理由があったんだってば！」

真奥はそれこそ胸倉を掴んだまま背負い投げしてきそうな千穂の肩を押さえて引き離す。

「鈴乃から何聞いたか知らないけど、俺なりに考えがあってのことなんだよ」

「なんですか！ 後からそのお金の話のせいで、遊佐さんとお父さん……ノルドさんがすごく気まずくなったらしいじゃないですか！」

それはそうだろう、千穂や鈴乃に言われるまでもなく、真奥だってそうなることくらいは分かっていた。

なにせノルドにしてみれば娘が人類の敵から借りを作ったことになっているわけだ。

ノルドはさすがに恵美よりもずっと前からイエソドの欠片と関わりがあったせいか、真奥達悪魔を一方的に悪と断じることにはしなかったが、それでも恵美が良くない立場にあることは分かっているだろう。

しかも、恵美は真奥からの請求を全て自分の金で賄っている気配がある。

ノルドの身の回りのものも大小さまざまに新調しているようだ。

恵美は元々真奥よりもずっと高い時給で働いていたとはいえ、真奥の請求に対してこんな短期間で対応していたら、すぐに貯蓄が底をついてしまうのではないだろうか。

「もった、反撃があるもんだと思ってたんだよ」

「反撃？」

真奥の心なし疲れたような顔に、千穂は眉根を寄せながらも首を傾げる。

「だってさ、三十五万円だぜ？ 三十五万円とか、正社員で働いてたってボンと出せる額じゃないだろ？ ましてや今あいつ、失職中なんだしさ」

「それはそうですよ！ だからこそ、ノルドさんの前でする話じゃ……」

「でさ、金で返せないなら、体で払ってもらおうかって話に持っていくと……ちーちゃん、ちーちゃん？」

「ちーちゃん？」

真奥は話しながら、目の前の千穂の顔がどんどん紅潮して眉が怒りで吊り上がっていくのを見て取り、自分の言葉遊びが間違っていたことに気づく。

「か、か、か、か、体で、体で、体で……！ 真奥さん！ なんてことを言うんですか！ そ、そ、そんなイヤらしいこと言うなんて、見損ないました!!」

そして予想通りの叫びを上げる千穂。真奥は慌てふためいて、

「ちーちゃんちーちゃんちーちゃん！ 落ち着いてくれ！ 言い方が悪かった！ そういう意味じゃなくて！ こういうことだったってこういうこと!!」

真奥は大慌てでロッカーから薄い雑誌のようなものを一冊取り出した。

「だってほら、相手があの恵美だぞ？ 魔王の俺から借りを作ったことだって腹立たしいだろうに、その上無茶苦茶な請求されたら今までのあいつなら怒り出しそうなものじゃなか。そして、代わりにこれで手を打とうって、話を持ってくつもりだったんだよ!!」

怒りと羞恥に顔を真っ赤にしていた千穂だったが、その真奥の手にある雑誌の表紙と飛び出した付箋紙を見て、真奥の言わんとすることがなんとなく分かりはじめる。

「真奥さん、まさか……」

「こう、さ。『こんな額払えるわけないでしょ！ 借りを作ってたって言っても限度があるわ!』みたいなノリでさ。で、そう言われたら……っていうか、絶対そんな感じで反撃してくると思

つてたから、じゃあ違う形で借りを返してもらおうか、お前今仕事ないんだろってな感じで……
ね？」

真奥は、気まずそうにしながら千穂に雑誌を手渡し、千穂は千穂でどんな顔をしているのか
分からないと言った表情で、その雑誌を受け取った。

雑誌の表紙には「無料求人情報誌 C I T Y W O R K I N G ! 新宿・京王・小田急沿
線版」の文字と「飲食店特集！」の看板を手に持ったマスコットキャラクターのプタの姿。

発刊されたばかりの最新号には付箋紙が貼られており、そのページを開いてみれば、そこには
予想通りの「マダロナルド^{マダナド} 谷駅前店、業態拡大につき新規クルー大募集！ 経験・未経験
問わず」の文字。

千穂は暗然として、そのページと真奥の顔を何度も交互に見てしまう。

「ま、真奥さん……」

「払えないなら金じゃなくて仕事で返せて……言おうとして……その、アテが外れた」

真奥はそこまで言うのと、落胆したように肩を落とした。

「……」

千穂はそんな真奥を呆れたように見ながら、雑誌を返す。そして、

「真奥さん」

「ん」

「素直じゃない!!」

千穂の声は、身も蓋もなく真奥の心の奥底に突き刺さる。

「だ、だってさあ……」

「だってじゃありません！ なんですとかそれ！ 最初からちゃんとそう言っておけばいいの
に、どうしてそういう回りくどいことするんですか！」

「いや、でも俺にもあいつにも立場ってもんが……」

「立場でご飯食べられますか！ 仕事がありますか!？」

「うう、それを言われると……でもさあ、相手が恵美だし……」

「そういうときにきちんと真面目に優しく接しないから、聞いてもらえない話も聞いてもらえな
くなっちゃうんですよ！」

そうこうしているうちに、いつの間にか真奥はパイプ椅子に座らされており、千穂が上から
滾々と説教するという図式ができてしまっている。

「大体なんですか！ 小学生の男の子じゃあるまいし、女の子に優しくしたいのに、格好つか
ないからって意地悪するようなことして、魔王として情けなくないんですか！」

「や、待ってちーちゃん。それは前提が。そもそも店が人手不足なことは本当だし、あいつ悪
魔以外には人当たりもいいみたいだし、電話の仕事してたんならデリバリー受付業務なんかも
パツとできると思っただけで、あいつに優しくしたかったわけじゃ……」

マグロナルドの人手不足を理由に逃げようとする真奥を、千穂は一喝する。

「同じことです！ それならそれで、どうして初めからそう言わないんですか！！ お店が人手不足で遊佐さんのスキルが活かそうだから店に来てはいつて、どうしてストリートに言わないんですか！！」

「や、どうしてって言われても……」

真奥は真奥なりに、考えがあつてしたことなのだが、千穂にはまるでその意見を聞き入れてもらえないようだ。

「大体理由なんかなんだったっていいんですよ！ 遊佐さんを直接気遣うのが決まり悪いなら、アラス・ラムスちゃんやが心配でとかなんとかそれらしいこと言つて、お仕事紹介すればいいのに、どうしてわざわざ自分を悪く見せようとするんですか？」

「いやだからそれは俺は魔王であいつは勇者……」

「今までお互い魔王とか勇者とか意地張つて、何か良いことありましたかっ!!」

今日一番の雷が、悪魔の王を打ち貫いた。

真奥はパイプ椅子の上で思い切り身を竦ませ、恐る恐る上目遣いで見上げると、千穂は全盛期の恵美もかくやというほどの怒気を孕んだ目で真奥を見下ろしていた。

「もうそういうことにこだわってる時期じゃありません！ エンテ・イスラで、真奥さんと遊佐さんとアシエスちゃんと芦屋さんは、天使の人達相手に一緒に戦つたんですよ？ そこで

も魔王だとか勇者だとか、そういうこと考えながら戦つたんですか!!」

「い、いや、それは確かに俺達は別に何も……鈴乃はなんか色々ところちや言つてたみたいだけ……」

エンテ・イスラ東大陸、エフサハーン皇都蒼天蓋での戦いの顛末は、既に真奥と芦屋と恵美と鈴乃のそれぞれの口から千穂に伝わっている。

千穂は、恵美がエンテ・イスラに捉えられた事情を聞きオルバや天界に憤慨したり、真奥がアルバートと出会った偶然に驚いたり、芦屋が恵美に届けさせた書状の内容に笑ったり、鈴乃がエメラダを助けたくだりに驚嘆したり、恵美が父親と再会できたことに改めて涙を浮かべて喜んだりと悲喜こもごもの表情を見せた。

全ての戦いの顛末を聞いた千穂は、こう思ったものだ。

「折角、遊佐さんと真奥さんがもう少し仲良くなったのかと思つたのに……」

「ちーちゃん……？」

「真奥さん」

「は、はい？」

「これで本当に真奥さんにお金を返した遊佐さんが、気持ちの切り替えて本気で真奥さんと対決しようなんて考えはじめたらどうするんですか？」

「え? いやー、アラス・ラムスがいるうちは、それはないと思うんだけど……」

その懸念は真奥も持たなかったわけではない。

今回の事態が収拾され、恵美が真奥からの借りを清算した場合、残る事実は大だ一つ、真奥が世界征服を今も諦めておらず、そのせいで過去に恵美とノルドが辛い思いをしたということだけである。

父との再会が成ったとはいえ、恵美が失ったものの大きさを考えれば、逆に恵美から真奥に対して相応の償いを要求されたとしても不思議はない。

「い、命を取られない代わりに……まさか逆に、今こそ金か? 慰謝料的なアレか!?」

「もう!!」

真奥のどこまでも守銭奴的な考え方に千穂は愛想をつかしたようにそっぽを向いてしまう。

「と、とにかくすまんちーちゃん! ちよつとこう、俺が考え足らずで……」

「私に謝っても仕方ないじゃないですか」

「ぐ」

言葉に詰まる真奥に、千穂はため息をつく。

「時々分からなくなるんですけど」

「お、おう?」

「遊佐さんは、昔から真奥さんのこと敵だ仇だいつか倒すって言ってましたけど」

「そ、そうだな。うん」

「真奥さんは、どうなんですか」

「へ?」

「真奥さんは本当のところ、遊佐さんのこと、どう思ってるんですか?」

「どうって……えっと」

何故だろう。状況も相手も違うが、つい先日にも似たような状況に置かれていたような気がして、真奥は目を白黒させる。

「やっぱり、遊佐さんは敵だから、最終的には殺したいんですか?」

「い、いや、そこまではさすがに……」

千穂の口から飛び出す過激な表現に真奥は目を斜くが、自分の回答が全く答えになっていないことにもすぐに気づいた。

「違いますよね? 遊佐さんも、新生魔王軍の大元帥なんでもんね」

「あ、ああ……」

やむを得ないこととはいえ、どうも最近千穂といい鈴乃といい、大元帥の称号で何かと真奥を追い詰めたがるが、まさしく身から出たなんとやらなので、真奥には反論のしようもない。

「それなら意地悪するんじゃないくて、王様らしく格好いいところを見せてくださいよ。遊佐さんに、今までと違う新しい世界を見せてあげてください。でないと……」

悲しげに言う千穂の言葉に真奥は一言も言い返せないまま、
「アラス・ラムスちゃん、可哀想です……」
店に出てゆく千穂の背中を見送るしかなかったのだ。

「まーくん」

「はいっ！ ちよつと失言があつてちーちゃんを怒らせました!!」

フロアに出た瞬間、マグロナルド・谷駅前店店長にして、異世界エンテ・イスラ征服を画策した魔王サタンをして頭が上がりたと言わしめる存在、木崎真弓が、先ほどの千穂など遠かに凌駕する気迫で立って、真奥は何か言われる前から自分の非を認める。

「そうか」

「は、はい」

「まーくん。今更君に言うことでもないが、今この店には、アルバイトクルーとして応募してくる者を選り好みしてられる余裕はない。分かるね？」

「分かり、ます」

真奥は冷や汗を流しながら、なんとか返事をする。

「なんとしても人手を集め、デリバリー業務本格運用の前にモノになるよう教育せねばならん。」

そんな中でベテランの君達が店内の空気を悪くしては、新人教育に悪影響だ。そうだね」

「そう……です、はい」

噛んで含めるようにゆっくりと語る木崎の一言一言が、まるで強大な魔力を持っているかのように真奥の心臓を縮ませる。

秋が深まって、マグロナルド・谷駅前店のシフトに、純びの気配が見えはじめている。

ある程度の専門性が求められるマッグカフェのために、フロアに常駐する人員が多くなってしまうことに加え、まさかのデリバリー実験店舗に抜擢されてしまい、これまでの人数では店が回らない公算が高くなっている。

さらに秋という季節は、大学生アルバイトの動向が不安定になる時期でもある。

これまで安定的な戦力だった大学三年生に就職活動の波が押し寄せ、一人、また一人とそれこそ潮が引くようにシフトに常駐できる人間が少なくなっていく。

大学特有の長期にわたる夏休みも終わり、後期の授業が始まって大学一年生や二年生の出入りもやや激しさを増す。

最も安定している主婦アルバイトなどは、安定してシフトに入れる代わりに時間の融通が利かないことも多く、千穂ら高校生は定期試験の気配を感じはじめる頃だ。

そうなるも真奥のようなフリーターがシフトの主戦力となってくるのだが、学生アルバイトと比べてフリーターはとにかく絶対数が少ない。

学生のシフト層が維持されている間に新人を獲得し、教育するだけの時間的人員余裕を作らねば、新業態どころか旧来のシステムすら回らなくなってしまう恐れがあるのだ。

普段の木崎なら、絶妙な差配と驚異的な人脈の太さと自分自身の体力でシフトが薄くなる時期を難なく乗り切るのだが、今回ばかりは木崎の力でもどうにもならない上からの唐突な決定というものが重くのしかかっているのだった。

「当然のことだが今この店は、若い女性の応募も分け隔てなく受け入れている。新人も大勢入ってくるだろう。もし、それで女性がいっぱいのトラブルで少しでもちーちゃんと喧嘩して店内の空気を悪くするようなことをしてみろ」

次の瞬間、真奥は日本に来て二度目となる、死の気配を感じた。

「地獄を見せるぞ」

「……………っ!!!」

真奥はもはや言葉もなく、直立不動で敬礼するしかなかった。

「まったく」

木崎は真奥の恭順の意を確認すると、気持ちを切り替えるように、店内の時計を仰ぎ見た。

「で、その新人についてだが」

「は、はい」

「今日だけで面接が三件入ってる。予定では全員君がシフトにいる時間に来ることになってい

る。まーくんの今日のポジションはずっと上のカフェだから顔を合わせることはないかもしれないが、一応分かっておいてくれ。午前中に一人。夕方に二人だ」

「心得ましたっ！」

こここのところの真奥の持ち場は、常に二階のマグロナルドカフェであった。

社内資格であるマグロナルド・バリスタを持っていることも大きいですが、同じく資格を有している千穂は、どちらかといえば下階の通常メニューカウンターにいることが多い。

理由はいくつかあり、純粋な技量の差として余程混雑する時間帯でなければ真奥一人でもカフェカウンターを回せるということが一点。

千穂が高校生であるが故に、千穂を当てにしたカフェカウンターシフトを夜十時以降の営業終了時間まで維持できないことが一点。

あとは単純に、より多くのお客の目につく一階カウンターには、やはり男性より女性クルーがいた方がよいということが一点である。

真奥はアルバイト面接以外の、細かい連絡をいくつか受ける。

「あれ？ チーズケーキ、入ってきてないんですか」

「ニュース見ていないのかい？ 君がこの前、珍しく大きくシフトを空けただろう。あの頃に、原材料のチーズを作る海外工場で雑居混入があったとかで、しばらく入ってこないんだそうだ」

「あー……そうだったんですか。丁度その頃テレビ見る余裕なくて……。参ったな、チーズケ

「キないのか」

「人気商品だから痛いとこだが、こればかりは我々の力ではどうにもならん。頑張つて他のもので巻き返しを図るんだ。秋フェアの栗や芋やカボチャのケーキも売り上げを伸ばさねばならない。逆に他のものを売り込む良い機会だと思つてくれ」

一週間、という時間の空白は思つたよりも大きい。

たつた一週間シフトに入つていなかっただけで、特定のバーガーに使用するソースの種類が変わつていたり、知らない名前がシフト表に入つていたりする。

この数日でようやく勘を取り戻したとはいへ、こうしてみるとやはり、デリバリー研修に入らなかったことが真奥の心に不安の影を落とす。

もちろん全員が全員研修を受けたわけではなく、ぶつつけ本番で望むのが真奥、たけというわけでもない。

本格運用の直前にはまた十分な研修が設けられるのだが、それでも事前準備が一つでも多いに越したことはないのだ。

「ジャイロルーフで悪路を走る方法とか、階段上る方法とか、火炎瓶投げる方法なら、身に染みて分かつてんだけどな」

二階のカフェカウンターに立ちながら、真奥はこの先のことを考えて憂鬱になつてきていた。まだ早い時間帯のためカフェカウンターに来る客はまばらで、いちいち余計なことを考えて

しまう。

「この先のこと、なあ……」

真奥はやることがないので冷蔵庫の中の食材の賞味期限をチェックしたり、什器の表面の曇りを磨いたりするが、何せ管理の行き届いている木崎の店である。

それらの作業はものの三十分もせずに終わつてしまい、またばんやりと、お客を待つ仕事に戻らざるを得ない。

「いつか、気が向いたらでいい。エミリアに、今の話を」

ふと、エフサハーンのキャンプでの、鈴乃の言葉が頭をよぎる。

「今までお互い魔王とか勇者とか意地張つて、何か良いことありましたかっ!!」

千穂に言われるまでもなく、確かに無かった。それは間違いない。

意地を張らなければ良いことがあったかといえはそれはまた別の話になるが、千穂の言うことは至極最もだ。

「迷惑かけて、ごめんなさい」

蒼天蓋で、朝陽の中で恵美が言った言葉が脳裏をよぎる。

あの言葉が、素直な心から出たものだとは分らないほど、真奥も愚かではない。

恵美は、心の底から真奥に対して、あの一ヶ月のことを謝罪したのだ。

それまでのことを全て抜きにして。

「……フェアじゃない、か」

真奥は魔王軍がエンテ・イスラに攻め入った真事情を、鈴乃に尋ねられる以前から、恵美は絶対に話さないと心に決めていた。

そう決心したのは、思えばあの瞬間だった。

恵美と再会して間もなく、まだ千穂も真奥達の真実を知らなかったあの頃。

ヴィラ・ローザ笹塚の階段から転落した恵美は、涙を流しながら真奥に向かって宣言した。

「私の穏やかな生活の全てを奪ったあなたを決して許さない！」

それは人間の社会を理解しはじめていた真奥にとって、受け入れるべき事実で、甘んじて受けるべき糾弾だった。

そして、その自覚があつて尚、自分の中では、エンテ・イスラ侵攻は間違っていないかつたという自負も同時に生まれたのだ。

相手の悲劇と、己の悲劇を天秤にかけ、己を優先したのは鈴乃にも告げた通り。

だから、その毅然たる事実がある以上。

「……いいじゃねえか。今までのままで」

恵美は、勇者エミリア・ユステイナは、どこまで行っても悪魔の敵。

真奥は、魔王サタンは、どこまで行っても恵美達エンテ・イスラ人の敵。

日本での生活は、いわば本来の試合会場を離れた場外戦だ。そして本来なら場外乱闘になる

はずが、色々な事情が絡んで場外慣れ合いになった。

それはそれで奇妙な心地良さがあつたことは認めるが、何か大きなきっかけがあれば崩れてしまう脆い環境であつたことは、誰もが心のどこかで覚悟していたことだった。

今回のことが、その大きなきっかけになったとしても、なんら不思議ではない。

「これは『新生魔王軍』元帥としての上申でもある」

「真奥さん、自分で、遊佐さんを、指名したじゃないですか」

「あああもう」

「お前に新しい世界を見せてやる」

「俺は何をどうしたいんだ。どうすりゃいいんだ」

「何騒いでるんですか、真奥さん」

「うわっ!!」

過去からの声が頭の中を反響して混乱していた真奥は、千穂の、まだちよつと機嫌の悪そうな声がすぐ傍から聞こえて思わず飛び上がった。

「ち、ちーちゃん!? ど、ど、どうした?」

「いえ、真奥さんの方こそどうしたんですか? 何か唸ってませんでした?」

「あ、いや……」

懐悩が声に出ていたのだろうか。

急に我に返って周囲を見回すが、カフェの客は特にこちらに注意を払っている様子はないので、大声は出していなかったようだ。

「な、なんでもない。それよりどうした？」

「いえ……ちよっと、交代にきました。真奥さんにお客様です」

千穂は真奥の返答を信じていないような素振りをみせたが、とりあえずそれを脇に置いて目で、階段の方を示した。

「客……？」

真奥も千穂の視線を追って顔を上げ、そこに意外な顔を発見する。

「お勤めの最中に申し訳ございません、魔王様」

外も大分涼しくなってきたというのに、珠の汗をかいて息を切らしそこに立っているのは、茶封筒を手にした芦屋四郎だった。

「まさかお前がバイトに応募してきたのかと思ってビビっちゃったよ」

真奥はロッカールームで、自分の荷物を探りながら言う。

「まことに申し訳ございません。事は一刻を争いますものでいても立ってももらえず。木崎店長にも後でお詫びを……」

「まあ、そこは俺から謝っておくから気にすんな。あ、あつた。ほら」

真奥は鞆の中から、真新しい二つ折りの携帯電話を取り出して芦屋に手渡す。

この銀色でシャープなフォルムの携帯電話は、エンテ・イスラ親征で見えるも無残な姿になった旧式のテューカー携帯を忠実の金で機種変更した、現代のシステムやサービスにマッチした真奥の新しい持ち物だった。

そのときのことから忠実と、さらに先ほどの千穂の言葉を連鎖的に思い出してしまい、ついつい縮つぎが暗くなる。

芦屋がその表情をどう取ったかは分からないが、とにかく心底申し訳なさそうに頭を垂れてそれを受け取った。

芦屋が持参した茶封筒に入っていたのは、真奥名義のクレジットカードの約款だった。

芦屋は、どこか分からない場所に隔離されてしまった漆原がノートパソコンとモバイル回線を持ち歩いているという危機的状況を説明し、真奥にクレジットカードの停止手続きを取るように頼みに来たのだった。

「さすがに今から悠長に俺がカード会社に電話して手続きしてたら怒られっからさ。携帯持って帰ってネットから使用状況確認して、ヤバそうだったらそのときは手続きに踏み切る。本当は良くないんだけど、確か携帯のネットからも一時停止できるはずだから、ヤバそうな気配がしたらお前がやっといてくれ」

「恐れ入ります。拝借いたします」

「使い方がわかるか？」

真奥は最新の電子機器にとんと縁のない芦屋が、web上でクレジットカードの手続きをすることができるとか、若干不安になる。

「マニュアルを読みながら、なんとか頑張ってみます。いざとなればベルか、連絡がつけば鈴木さんに教えを請うという方法も」

「鈴乃はさすがに無理だろ。鈴木梨香は……俺のキャリアア、ドコモじゃなくてaeだけ大丈夫なのか。ってかあいつも多分今仕事中心だと思っぞ」

「基本は自助努力しますが、電子機器に疎い私が適当な操作をするよりはずっとマシかと思ひますので」

「ま、漆原がそこまでバカじゃないことを祈ろう」

「私はそのあたり、全く信用しておりません」

芦屋は漆原への信頼を一刀のもとに切って捨て、真奥はその言い方について笑ってしまった。「まあだからつつても、こんなことであわわわとして魔力使うわけにもいかんしなあ」

「仰る通りです。魔力が戻った今だから分かることですが、この国で生きるのに魔力があっても生かしどころがありません」

真奥は芦屋の言葉に全面的に同意する。

日本にやってきた当初。ほぼ無一文の状態から今の生活を始めたときには、魔力があれば火を起こすのにガス代もかからず、水を得るにも水道代もかからず、家電を動かすにも電気代もかからないのにと何度芦屋と二人で嘆いたか分からない。

だが今となつては、実際に魔力を保持したまま日本にいても、使いどころがない。

水は蛇口をひねれば出てくるし、火は指一つでつまみを調節すれば調理に丁度良い炎を起こすことも、暖を取るのも思いのまま。便利な通信機器や家電は、プラグを差すだけで過不足なく動いてくれる。

衣食住が足りている今、わざわざ貴重な生命エネルギーでもある魔力を使ってまで為したいことなど、何もないのだ。

エンテ・イスラから帰ってきてすぐ、意気揚々とアルバイトに行こうとする真奥を芦屋は今まで通りに送り出した。

真奥の出動姿を見て、鈴乃は苦笑しながら言ったものだ。

「そうなるような気がしていた」

鈴乃も、千穂も、恵美も、真奥の正体を知る誰も、真奥と芦屋が魔力を使って日本や地球の安全を脅かすなどとは考えていなかった。

もちろん本人達もそんなつもりはない。

決して、志波や天祢を恐れてのことではなく、真奥はもちろん、芦屋の中でもまた、「世界

「征服」の有りようがかつてとは大きく様変わりしているからだ。

結果的に折角全盛期の魔力を取り戻しながら、現在真奥と芦屋の魔力は固体として凝縮され、ラップの上から新聞紙で包まれ、魔王城の冷暗所、つまり押し入れの中に保管されている。

当初はフアーファレルロの魔力をそうしたように冷蔵庫にしまうことを検討していたのだが、さすがに総量がケタ違いであったこと、魔王城の冷蔵庫の中身は千穂やアラス・ラムスの口に入る可能性もあるため、その案は却下された。

真奥と芦屋の膨大な魔力を具現化した塊は非常に大きなものであったため、押し入れの二段目を完全に埋めてしまい、結果として漆原のブライベースペースが本人の知らぬところで消滅したのだが、それはまた別の話である。

芦屋は携帯電話を自分のズボンのポケットに入れると、改めて姿勢を正し一礼した。
「では、これにて失礼いたします。存分に、お勤めに動んでくださいませ」

「おう」

芦屋はスタッフルームから出ていこうとして、何かを思い出してさつと振り向いた。

「あ、それから魔王様」

「ん？」

靴をロッカーにしまいながら振り返り真奥に、芦屋はいつもと変わらぬ様子で言った。

「何があったかは存じませんが、佐々木さんに早いうちにご機嫌を直していただいてください

ね」

「んあっ!？」

真奥は思わず、ロッカーの中で靴を取り落してしまふ。

「な、なんで……」

「一目瞭然です。今や佐々木さんは日本に於ける我らの生命線とも言えるべき方で、佐々木さんのご機嫌は大体のところ魔王様の肩にかかっているのです。そろそろご自覚くださいますよう。では」

「……」

真奥が返事をできないでいるうちに、芦屋は目礼して去っていつてしまった。

「あっ……お忙し……」

ドアの向こうで、芦屋が木崎が誰かに詫びている声がかすかに聞こえた。

真奥が取り落した靴をようやく拾ったのは、その声が消えてしばらくしてからだった。

「あ……」

そして真奥は頭を抱えると、その場にうずくまってしまふ。

「あー……ダメだ。ダメだ俺。しつかりしろ」

真奥は拳で自分の頭を叩きながら、乱れる息を整える。

「何やってんだ、俺は」

「何やってんだ、君は」

「え」

腹心の配下の言葉に、己の未熟さというか、甘さというか、怠慢を反省していた真奥は、スタツフルームに入ってきた木崎に不審な目で見られてしまう。

「家の問題が、そんなに深刻だったのか」

「あ、いえ、そういうわけでは……」

ある意味とても深刻ではあったが。

「なら、そろそろ持ち場に戻れ。上も混みはじめたぞ。ちーちゃんをそのまま置いておくからしばらく二人で当たれ。いいな」

「え」

木崎はそこまで言うのと、真奥の返事も聞かずに扉を閉めた。

真奥は一瞬ぼかんとしていたが、

「……ふんっ!!」

すぐに自分の平手で自分の顔を両側から叩いて、気合を入れ直す。

「まずは、目の前の仕事からだ!」

真奥が二階に駆け上がると、カウンター前には数人の行列ができていた。

「すまん、待たせた」

「はい!」

なんとか注文を捌いていた千穂だったが、それでも作業が追いつかないところを、真奥が入ることで行列がスムーズに動きはじめる。

「佐々木さん、ヘーゼルナッツシロップが切れそうだ。今のうちに裏から取ってきてもらえるか」

「分かりました!」

行列の最後の注文を受けつけてから、真奥は千穂に指示を出し、一度に三つのオーダーを処理する。

その間千穂が下階の倉庫に走り、カフェメニユー用のシロップのストックを持ってくる。お昼時を少し回って、本格的に店内が混雑しはじめるが、真奥と千穂は勤務初めの大胆きなどなかったことのような連携を見せ、二人でカフェの客を完璧に捌いてゆく。

カフェメニユーが混雑するのはランチャタイムとディナータイムの中間かと思われがちだが、下階の通常メニユーカウンターの混雑を避けようとする客や、女性を中心にランチを軽食で済ませようとする人に需要があるため、ケーキやスコーンなどの軽いスイーツはもちろんホットドッグやサンドウィッチなども飛ぶように売れてゆく。

幡ヶ谷駅前店は、以前から平日はもろんのこと、今日のように土日や祝日であっても稼働しているオフィスのサラリーマンや家族連れでこった返す。

カフェが稼働しはじめてからはむしろ土日こそ集客力が強くなり、今日も人の波が落ち着いたのは、それこそおやつ時の午後三時くらいになってからだ。

ようやく一息ついた真奥と千穂は、思わずカウンターの中で顔を見合わせる。

「えらい混みようだったな」

「そうですね。でも真奥さんいなかった先週も、これくらい混んだと思います。先週は木崎さんと二人でお昼やっただけですけど、大変でした」

「木崎さんが入って大変だったんじゃない、とんでもないなそりや」

混雑時に動き回る木崎は、真奥をして八面六臂の阿修羅がこの世に現れたと思うほどあらゆる方面の作業をこなし、店の全てを監視カメラよりも高精度に視界に収めている。

「このままデリバリーに突入したら、とんでもないことになるな」

「はい……真奥さん」

千穂の見上げてくる視線から逃げるように、真奥は顔を逸らしてパイザーの向きをわざとらしく直す。

「だから……あー、その、なんだ。もう間に合わねえかもしれんけど……次会ったとき、きちんと話してみるわ。恵美に」

「！」

「ただまあ、期待はしないでくれよ。そもそもあいつの元の時給が千七百円なんだから、もっ

と時給のいい職場見つけるって言うかもしれないねえし、まあその、俺があんなこと言ったってのもあるからおととい来やがれてなことになるかもしれない……」

「はい！」

ピークをこなした疲れを浮かべた表情から一転、千穂の顔がぱつと輝く。

「その、この先、俺達と恵美がどういう関係になってくかは、正直、分かんけど」

「はい！」

「今は、目の前のことに集中する。どうも最近俺、先のこと考える力が弱ってるみたいで」

「だって、色んなことありましたもん」

「ああ……で、まあ、遠い先のこと考えても何も分からんから、とりあえず大変そうな明日のことから考えようと思って」

「……」

真奥のその言葉に、千穂は何を思ったか、眉を上げて目を見張る。

「ど、どうした？」

「あ、いえ、なんでもないです……えへへ」

「で、でもあれだぞ、本当に期待すんなよ？　そもそもあの恵美が俺の誘いに乗るとは到底思えないんだからな！」

「それはまあ、そうかもしれないですね。でも」

千穂は嬉しそうに微笑むと、口の中で言葉を小さく転がした。

「未来は、今日と明日の積み重ねの先にあるものですから」

「ん？」

「いえ、なんでもないです」

これを言ったらまた真奥に余計なことを考えさせることになるし、場合によっては気分を害してしまうかもしれない。

だから、千穂はもう、このことを口に出すつもりはない。

それでも千穂は信じているのだ。真奥と恵美が歩み寄る毎日が続くことで、魔王と勇者が殺し合わずに済む世界が来ると。

「でも、遊佐さんがお店に来てくれたらいいなあ。楽しくなりそう」

「いやあ……まあ、騒がしくはなるだろうなあ」

千穂の無邪気な思いを無下にできない真奥は適当な返事でお茶を濁すが、

「あ、でももしそうになったら、新人研修、絶対真奥さんがやることになりますよね？」

この問いには思わず飛び上がった。

「ええ!? なんだだよ。俺以外にも出来る奴いっぱいいるぞ!」

新人研修となると、当たった新人にはぼつきつきりでないかなければならない。

千穂を含め、これまで多くの新人アルバイトの指導をしてきた真奥だが、恵美に対して何か

を教えるなどと、考えただけで多種多様なストレスを背負い込む未来しか見えなかった。

「真奥さんは逃げられないんじゃないですか? だって時間帯責任者だし、一番シフトに入ってるし、そもそも元から知り合いだって木崎さんも知ってるじゃないですか。お客さんとして何度も来てるの、覚えてる人もいますよ? どうしたって真奥さんが当たるしかないじゃないですか」

千穂の冷静かつ的確な分析に、真奥は冷や汗を流しながら首を横に振りはじめた。

「いやいやいや、やっぱやめとくか。研修のことまで考えなかった。あいつと二人で新人研修とか、それだけで精神がごりごり削れる。やっぱ却下だ。来ないでいい。あいつには他のもつとワリのいい仕事が似合ってる。うん」

「もう! 真奥さん!」

「なあ、万が一だぞ。万が一本当に恵美がうちの店に来るなんてことになったら、頼むからちーちゃん、研修担当代わってくれよ。あいつだって俺から何か教わるより、ちーちゃんから教わる方が絶対ストレスないし効率いいと思うぜ」

「私が新人研修やらせてもらえるわけじゃないじゃないですか。大丈夫ですよ。いざというときにはちちゃんと仲裁に入りますから」

「喧嘩前提かよ!」

「とにかく、約束ですよ真奥さん! 入ってくれるかしてくれないかはともかく、ちゃんと理由を

説明して、遊佐さんにお仕事紹介してあげてくださいね！」

「あー、妙な仏心出すんじゃないかな。まだ鈴乃とかノルドに頼んだ方がいいかも」

「もうー！」

悪魔にそんな心を出されたら温和なことに定評のある仏も一度で怒り出すかもしれないが、そんなことを話していると、唐突に階下から木崎が上ってきた。

「まーくん、いいか」

「あ、はい」

真奥は頷いてカウンターから出る。

「ちーちゃんの機嫌は持ち直したようだな。ん？」

「そ、その話はもういいですから」

千穂の顔が先ほどとは打って変わって明るくなっているのを見て、木崎は真奥にわざとらしい皮肉な笑みを浮かべてみせる。

「まあいい。朝話した午後の面接がこれから一人入るからしばらく抜ける。ちーちゃんを下に戻すぞ。それと今日は少しディナータイムのシフトが薄いから、面接が終わったら私が上に入る。君は早めに休憩に入って欲しい。今日の夜のシフトには休憩を取る隙間がない」

「分かりました。佐々木さん、下に戻ってってさ！」

「あ、はい！ わかりました！」

千穂は呼びかけに、元氣いっぱいに応える。

「そうだ真奥さん、シフト的にそろそろ休憩ですよね？」

「え？ ああ」

「この間私が受けたデリバリーの研修で纏めたノート、スタッフルームに出しておきますから、良かったら後で読んでみてください」

「え？ いいの！」

千穂の申し出に、真奥は目を細かせる。

「はい、もともと真奥さんに読んでもらうために纏めたものですから」

真奥と鈴乃とアシエスが、エンテ・イスラの旅に出た間の一週間。

千穂はマグロナルドデリバリーの研修に二度赴いた。

自分の仕事のためであることは間違いないのだが、それ以上にデリバリーの研修を受けたがっていた真奥のためになると思つてのことで、実際真奥にとっては頼つてもない申し出であつた。

「サンキュー！ ありがたく読ませてもらうよ！」

「はい、それじゃ！」

千穂は満足そうに下階へ向かい、真奥も意気揚々とカフェカウンターに戻る。

「相変わらず、よく分からん関係だ……」

そんな二人の着い背中を見ながら、木崎は一人、眉根を寄せて腕を組み首を傾げた。

十六時と半端な時間ではあるが事実上の夕食を腹に収めると、真奥は千穂の丁寧な字で纏められたノートに向き合った。

「感謝！」

本人はいないが、乾いた音を立てて手を合わせてノートを一度拝むと、もう一度手が汚れていないことを確認してからページをめくる。

「おー」

真奥は「ページ目から、過剰でない程度にカラフルに纏められた誌面に感心してしまう。

千穂の生真面目さが垣間見える文字を追っていくと、要点が蛍光ペンや赤や緑のボールペンで色分けされていて読みやすいノートだった。

ところどころに込み入ったイラストが入っているかと思えば、これは千穂自身をデフォルメしたものなのだろうか、ツインテールの女の子の顔から吹き出しが出て、そこに千穂の所感が添えられていたりする。

バイク免許を持たず、免許取得の補助も下らない千穂が受けた講習は、デリバリーとはいえ主に店内業務に関することが大半だった。

電話対応の基礎から始まり、デリバリー特有のパッケージングや、クレジットカード決済端末の扱い方や管理の方法。デリバリー販売対象商品を出来たてとして扱う時間などが詳細に記載されていた。

特に電話対応の部分はかなりページが割かれている。

お客様の氏名や住所や電話番号を正確に聞き取るのはもちろんのこと、クーポンの有無や店舗が混雑している場合の配達時間の差異などの説明、さらにはフェア商品のセールストークなども、かなり細かく指定されている。

研修の現場では、このマニュアルを実際に声に出して練習しようだ。

「でも、これをただ暗記するだけじゃ、ダメな気がしました」

「お客さんの顔が見えないから、いつも以上に会話に気を遣って棒読みにならないようにしないと、印象悪くなる気がします」

「確かに」

その場には千穂と会話するように、真奥は大きく頷く。

カウンター越しの対面接客と電話対応が大きく異なるのは、やはり相手の顔が見えない、という事態である。

それはとりもなおさず、お客にもこちらの顔が見えないということだ。

なればこそ、ただただマニュアルをするだけでは、極度に事務的な冷たい印象を相手に与えかねない。

「いつも以上に言葉は大切に、だな。電話に出る奴と実際にお客のどこに行く人間は違う奴なわけだし」

電話に出る人間が愛想が良くても、お客の家に行く配達員の声や顔が強張^{きょうちやう}っているのは、やはり店や商品のイメージは良くならないし、その逆もまた然^{しか}り。

全従業員が今まで以上に気を引き締めないと、このデリバリーという業態は思わぬ落とし穴を生み出しかねない。

真奥と千穂はもちろん、木崎の薫陶^{くんとう}を受けた旧来のクルー達は、そんなことは誰に特別言われなくても自ら考えて実践^{じっせん}する者達ばかりだが、かつてないほど急ピッチで人を集めている現状では、果たして新人にどこまでその思いが行きわたるか、未知数である。

「あ、まーくん」

「お、カワつち」

と、そのとき、真奥の同僚クルーがスタッフルームに入ってきた。手に、向かいの書店の紙袋を持っている。

「休憩^{きゆうけい}？」

「うん。外に本買いに出てた」

真奥からも木崎からも「カワつち」と呼ばれる彼の本当の名は川田^{かわた}武文^{ぶぶん}。

大柄な体格で朴訥^{ぼくたく}な人柄。喋り方にやや癖があるが、真奥と同じくキッチンもフロアもこなすオールラウンダーで、どんなに混雑するランチやディナーのピークにあっても「カワつちの作るバーガーはCM用のものかと思うほど綺麗^{きれい}」と評価が高い。

独特の美意識のせいかピーク時であろうと良くも悪くもベースを崩さないため、やや作業が遅いと見られがちだが、それは真奥や木崎に比してのことであり、木崎は川田の作業の正確性と出来上がりが高く評価していた。

大学生だが、高い成績を保持しているのか学校の試験などのスケジュールに左右されずにシフトに入ってくれる上、中型二輪の免許も保持しており、デリバリー業務に於ける主力と目される一人だ。

「何読んでんの？」

「ん、デリバリー研修の……レジュメ? っていうのか、こういうの」

やや煮え切らない真奥の返答に首を傾げる川田だが、ノートの表紙に書かれた字を見て大きく顔を顰める。

「ああ……はいはい。この間の研修でちーちゃんがやたら張り切ってたのはそういうことね」

「な、なんだよ。あ、そういえばカワつちはバイク持ってるからバイク研修受けたんだよね? どんなことやったのか教えてくれよ」

「……」
川田は真奥の申し出にしばらく口を引き結んで黙考していたが、

「ちよつと腹立つから教えない」

「ええ!」

「まーくんは、軽く二、三回くらい爆発すればいい」

「な、なんだよ爆発って!」

かつては魔王として悪美を筆頭とした多くの人間に浴びせられた罵詈雑言をそよ風のように受け流してきた真奥だが、まさか同僚に爆発しろなどと言われるとは思わなかった。

川田の発言の趣旨が全く掴めない真奥は身を乗り出すが、

「あ、まーくん、それより聞いた? コウタのこと」

川田は真面目な顔をして話題を切り替えてきた。

「え? あ、いや、何も。コウタがどうかしたのか?」

コウタとは、真奥や川田の少し後に入ったやはり大学生、中山孝太郎のことだ。

立場的には後輩だが川田とは同じ年。線が細い青年で仕事ぶりは至って普通なのだが、基本的に真面目で物怖じせず、ちよつとしたタレントと言ってもいいくらいに顔立ちが整っていて、彼がいると店の雰囲気は明るいと主に女性客に評判が良いのだ。

「早ければ、今年の十二月一杯で辞めるかもってさ」

「ええ!? マジかよ!? なんで!」

川田のもたらした情報に真奥は驚いて身を乗り出すが、

「今年大学三年生」

その言葉に打ちのめされたようにまた仰け反った。

「うあ……就活かあ……」

真奥は額に手を当てて唖るが、あることに気づいて顔色を青ざめさせる。

「ん? あれ? カワつちは? コウタとカワつちって学年一緒だよな?」

コウタだけでなく川田までいなくなってしまうたら、シフトのパニックは必至である。

「シユウカツ」という響きは、今の真奥にとって勇者エミリアよりもずっと恐ろしく、しかも避けることのできない敵なのだ。

「ああ、僕は就活しないから」

「え、そうなのか?」

「うん、大学卒業したら家業継ぐことになるから実家帰る。実家って言っても関東だけじゃね」

「家業? 実家、何か商売やってるんだ」

「そうだね。小料理屋。一応板前目指すことになるのかな」

「へえ!? じゃ、大学もそういう方面? ん? でも料理なら専門学校だよな?」

同僚の意外な家庭事情に、真奥は自分の家庭事情を差し置いて驚き、興味を持つ。

「まあいづれ調理師の免許は取ることになるけど、大学で勉強してるのは経営。大したことない大学だけど、地域経営なんかを専門に研究してるんだ。将来的には自分の店の力を地元の活性化に役立てられればいいなって。実家、関東だとは言ったけど、都会からの距離が絶妙に半端で、若い人も微妙に減ってきてるから」

「へえ……凄いな」

真奥の頭の中では「地域経営」と「板前」がうまく結びつかないが、川田は適当なことを言つて虚勢を張る性格ではないので、彼の中には確固たる結びつきがあるのだろう。

「コウタには何もしないうちから就職先が決まってること羨ましがられたけどね。でも家業継ぐつてのもそれはそれで一大決心だし、後々の大変さを考えるとバランスは取れてるだろうって言つたら納得はしてたけど」

「そっかあ。じゃ、そうは言つてもカワつちも、長くてあと一年ちょいか」

「そういうことになるねえ。焦るよ」

「ん？ 何が」

今の話を聞くと、川田が焦るようなことは何もないような気がするのだが、真奥が聞き返すと突然また顔を顰めて、真奥の手にあるノートを見る。

「それ」

「ん？ これ？ ノートがどうかしたのか？」

「じゃなくて！ 彼女!!」

「かのじょ……………は？」

真奥はノートの表紙を見ながら、しばし川田の言葉の意味を咀嚼して、それから顔を強張らせて川田に向き直る。

「はあああああああ!! お、おいちよと待てカワつち！ 何誤解してんだ!? 俺とちーちゃんとは別に何も……………」

「知ってるよ。でも、知ってるから腹立たしいつてのもあるの!」

「はあ!」

頓狂な声を上げる真奥を、川田はやや据わった目で軽く睨む。

「まーくんとちーちゃんが付き合っていないとか普通だったら信じないよ。だってちーちゃん、時々まーくんの親戚の赤ん坊世話したりしてるんでしょ？ 付き合ってたってなかなかできることじゃないと思うよ」

「お……………」

川田は、千穂が日本に来たばかりのアラス・ラムスを店に連れてきたときのことを言っているのだろう。

あの後、真奥と千穂とアラス・ラムスが何がしかの繋がりを持っているような場面をマグロナルドのクルーに見せたことはないはずだが、やはりあの事件は幡ヶ谷駅前店のクルーに大き

な衝撃を残していたらしい。

「待て、待てカワつち。その話は置いておいてくれ、今はなんでカワつちが焦ることがあるのかって話じゃなかったか？」

「贅沢な潤い方してるまーくんには分からないかもしれないことだけだね」

「トゲがあるっていうか、トゲしかないような言い方すんなよ」

「でも、僕にとっては結構今後の人生を左右しかねない重要な問題なんだ。未だに、彼女ができないんだよ」

「そ、それがどういう……？」

「まーくん考えてみてよ。一緒に働くのが両親しかいない小料理屋で、出会いってあると思う？ 学生のうちに彼女見つけておかないと、僕結婚できないかもしれないんだよ！」

川田は買ったばかりの本を封も開けずにパンパンとテーブルに叩きつける。

「そ、それは、まあ、確かに。で、でも、今は出会いがあるようなイベントとか、色々あるんじゃないのか？」

「……まーくんだったら分かるだろ。お店の経営って大変なんだ」

「お、おお」

何かを運営することの大変さは、誰よりも分かっているつもりでいる。一応今でも、多民族国家を纏めていた王なのだから。

「嫁探しを公言してる僕が言うのもおかしいかもしれないけど、結婚で、ゴールじゃないじゃん。むしろそこからがスタートじゃない？」

「ああ、うん、まあ、そうだよな。そこから生活していかなくやいけないもんな」

「そう。でもああいうイベントでの出会いって、一緒に時間を積み重ねられる相手かどうかの手応えを測る余裕がない気がしてさ。最初から条件とか色々探り合わないといけないような相手とお店の切り盛りとか、うまく行く気がしないんだよ」

川田のある種冷酷かつ深い分析に、真奥は唖ってしまふ。

「そ、そんなこと考えるほど深刻な問題なんだな。でも俺は店のカワつちしか知らないけど、別に女の子の友達いないわけじゃないんだろ？ クルーの女の子とも仲いいんだろ？」

「不思議なんだけどさー」

川田は少し自虐的に笑ってみせる。

「僕、彼氏のいる女の子から受けがいいんだ」

「おお……」

真奥はもう、かける言葉も見つからなかった。

「授業でもサークルでもどこでも、仲のいい女の子を、そこにいるんだけどねー。よく『この間は彼氏のことで相談に乗ってくれてありがとう！』ってお菓子ももらったりするよ。本気でカウンセラーになろうかと思ってる通信の資格の本読んだこともあるくらい」

「で、でも、つまり女の子からは頼りにされる人柄だってことでもあるだろ？　そういうカワつちのいいとこ見てる女の子、絶対いるって！」

「まーくんの口から聞くに微塵も癒されなけれど、お礼は言っておくよ。あー可愛くて巨乳の女子高生から好かれてる同僚が憎い！」

「おい！　なんつーこと言うんだ！」

クルーが男ばかりのときは女性を評して無責任な雑談をすることもないではないが、基本真面目な川田とそもそも人間ですらない真奥との会話の中で「巨乳」などという単語が飛び出すのは極めて異例のことだった。

「でも嫌味じゃなく興味本位で聞くんだけど」

「どっちにしろタチ悪いよ」

「あれだけハッキリ分り切ってるのに付き合おうとは思わないの？　ちーちゃんいい子じゃん。まーくんだって嫌いなわけじゃないでしょ？」

もちろん川田に言われるまでもなく、真奥だって分り切っているほど分り切っている。

こればかりは現場にいた人間以外誰も知らないことだが、はつきりと、真奥は千穂から想いを告げられているのだ。

真奥自身、千穂のことを心から信頼できる唯一の人間だと思っている。

自分と千穂以外に告白の現場を知っている鈴乃からは、いい加減否か応かでも返事をしてや

ればどうだと促されているし、答えを保留するどころか、そもそも答えを出すかどうかすら不明瞭な今の状態が、千穂に対して不誠実であることも分かっている。

それでも、だとしても、真奥の中で結論が出せないのだ。

千穂からの告白に答えを出すことが、どういうことなのか。

それによって変わる何かが今後の自分と千穂にどう影響するのか考えれば考えるほど、応えることができなくなっていく。

「俺は……」

真奥は、手の中にあるノートを見下ろしながらふと、今の川田との会話を反芻する。

「俺の場合は、カワつちとは逆かな」

「逆？」

「ちーちゃん云々は置いておくとしても、今自分のやろうとしてることに、必要以上に誰かを巻き込むつもりはないんだ」

「巻き込む？　まーくん、クルークラス上げて社員登用制度使うとか言ってた？」

「ああ、まあ、その先の話」

「ふうん、何か考えてるんだ。社員登用の先ってことは、フランチャイズオーナーとか？」

「いや、さすがにそれは自己資金に余裕がないと厳しいだろ？　カワつちと違って経営のけの字も知らないし、それに今の俺は三十五万円にビビってるくらいだから」

「なんなの三十五万円て」

「いや、こつちの話。まあとにかく、俺には俺の野望があつて、それにちーちゃんみたいな普通の生活してる女の子を極力巻き込みたくないんだよ」

「ふうん？ 何かよく分からないけど」

川田は納得はしていないようだが、それ以上は追及してこなかった。

真奥は真奥で、全ての答えではないものの、川田と話をする中でほんの少しだけ自分の中のもやもやを整理できたような気がしていた。

千穂を、自分の生き方に巻き込みたくない。

それはある側面から見た真奥の正直な気持ちであつた。

ただでさえ魔界の魔王である。千穂が真奥達の真実を知った後も、敵である恵美の力すら借りて千穂を極力危険から遠ざけようと努力してきたが、それでも千穂は何度も命の危機に瀕している。

全てを知って尚、自分を好きでいてくれる千穂を、今以上に身近な場所に置いてしまふなど考えられないことだつた。

さらに真奥と千穂の間に厳然と横たわるのは、世界の壁と、種族の壁だ。

世界の壁は理を尽くし、工夫することではどうにかなる可能性もあるが、種族の壁だけは どうにもならない。

真奥は、千穂と共に老いることはできないのだ。

如何ともし難い種族の寿命の差が、いざれ致命的なギャップとなって千穂に襲いかかるだろうことは想像に難くない。

どんなに考えたところで、真奥が千穂の気持ちに応えられる筈もないのだ。

「……ん？」

だがそこまで考えたところで、真奥は自分の思考に妙な違和感を感じる。

どこかに妙な隙間がある気がする。理屈に合わない部分がある。

だがそれがなんなのかを考える前に、

「あ、時間が」

川田と話し込んでいるうちに、いつの間にか休憩時間が終わろうとしていた。

「んじや、俺出るから」

「僕ももうすぐ戻るよ」

真奥は千穂の研修ノートをとりあえずロッカーにしようと、バイザーを被り直し、川田に一声かけてからスタッフルームを飛び出して、

「あ、ちーちゃん、ノートだけど、今俺のロッカーに入れちゃってるんだ。ちーちゃん今日確かもうすぐ上がりだよな」

丁度カウンターにいた千穂に声をかける。

「私は大丈夫なんで、よかったら今日は持ってください。別の日に返してもらえれば」
 「そう？ 悪いな。じゃあそうさせてもらうよ」

真奥は礼を言ってから上の階に戻ると、ちょうど木崎と目が合った。

「遅い。打刻時間ぎりぎりだぞ」

「すいません、カワつちと話し込んでいました」

木崎の言葉に慌てて休憩上がりのタイムカードを端末に打ち込むが、

「……コウタ、辞めるって聞きました」

「ああ、その話か」

真奥の問いかけに、木崎も少し表情を曇らせる。

「仕方のないことだ。アルバイトで彼の人生を縛るわけにはいかなからな。だからこそ」

時間は十七時。レジに表示された時計を睨む木崎は、気合を入れるように腰に手を当てて大きく深呼吸をする。

「コウタに負けないような優秀な新人を探らねばなんのだ。次の面接は十七時半の予定だ。気合を入れねばな」

木崎は短く強く息を吐く。

「これで結構、面接というのはこちら緊張するんだよ」

木崎なりに今の状況に対して張りつめたものがあるのだろう。

今日のこれまでの二人の面接について、木崎は特に何も言わないし、真奥達クルーから何か聞くこともない。

結果は近日中に白ずと分かることだが、良い新人が入ってくることを願うしか、真奥達にできることはない。

「じゃ、行ってくる。このあとまーくんはずっと二階だから、こっちは任せただぞ」

「頑張ります」

真奥はバイザーの鍔に手を当てて、木崎を送り出す。

ディナータイムの時間も迫っているので、改めて夜に向けた食材などの点検をしようとしたそのときだった。

その木崎が入り替わるように、千穂が二階に駆け上がったときではないか。

勤務を上がったのか、店の制服ではなく私服姿だが、妙に慌てた様子でカフェカウンターに突撃してくる。

「ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま!!」

「ど、どうしたちーちゃん!?」

千穂はカウンターに激突した姿勢のまま真奥に向かって身を乗り出し「ま」を連呼しながら階段の方を指差している。

「ま、ま、真奥さん、真奥さんさっき、休憩中に、電話とかしてました!?」

「え? い、いやしてないよ? 飯食ってちーちゃんのノート見て、後半ずっとカワつちとタべって……」

千穂の慌てぶりの理由が分からない真奥は、驚きながら休憩中の自分の行動を思い出すが、千穂は何か納得できないのかしきりに首を捻っている。

「え? でも、じゃあ、さっきの今で……ええ? なんで? 何がなんで?」

千穂らしくもなく、非常に混乱しているようだ。

魔王はもちろん、セフィロトの守護天使やマレブランケの頭領格を向こうに回しても毅然とした態度を崩さない千穂がこゝまで狼狽えるとは、一体何が起きたのだろう。

「まさか、サリエルが遂に何かやらしたか?」

木崎が面接のために下階に下りて数分も経たないのに千穂がこゝまで大慌てで駆け上がったとくるとすれば、向かいの商売敵、センタッキーフライドチキン、幡ヶ谷店の店長として居座っている大使サリエルが木崎に対して狼藉を働いたくらいしか想像できる事件がない。

「ううううううん違います違うんです!」

だが千穂は、真奥の問いに、首がすっ飛んでいつてしまうのではないかと思うほど全力で首を左右に振ると、素早くカウンター内と客席を見回す。

「い、い、い、今、今、やりかけの仕事、あ、あ、あります!? ないですよ! お客さんも、大丈夫ですよ! き、来てください! 下に、下に!!」

下に下にと大名行列でもあるまいに、慌てふためいている千穂はカウンター越しに真奥の腕を掴むと、そのまま引きずっていかうとする。

「痛い痛いちよつとちーちゃん! 分かったから手を離して! 行くから!」

そのままカウンター越しに真奥を引きずり上げたまま下階に叩き落としかねない千穂をなだめて、真奥はもう一度、二階に追加の注文をしそうなお客がいないことを確認してから千穂の後に続いて下階に向かう。

「は、は、早く来てください!」

「ちーちゃん前向けて、階段から落ちるぞ……なんなんだ?」

階下に下りても客席に特に違和感はなく、サリエルが大騒ぎしている様子も、そもそも来店している様子もないし、カウンターやキッチン側にも異常は見られない。

「ま、ま、真奥さん、あれ、あれ!!」

「何? 一体……」

千穂は、真奥が見当違いの方向に気を取られているのに気づき、腕を引っ張って入り口の方を指差す。

真奥は困惑しながら店の入り口に顔を向けると、木崎が誰かと話をしていて、

木崎が社員用のクルーキャップを取って、どこかに案内しようとしている。もしかしたら、今日最後のアルバイト面接の相手なのかもしれない。

時間的にスタッフルームにはまだ川田かわたがいるだろうから、面接は店舗とは別棟にある店長室で行うようだ。

「ん？」

「真奥さん……あの人……」

ふと、真奥はおかしなことに気づいた。

木崎に一札するその背中に見覚えがある。

「真奥さん、そうですよ、あれ、だって、でも、どうして」

見覚えがあるどころの話ではない。

真奥も千穂も、よく知った後ろ姿ではないか。

店にいること自体は、決して不自然ではない。これまで何度か客として来店している。

だが何故、木崎と込み入った会話を、木崎は彼女を店長室へと連れていこうとしている？

彼女は、客ではないのか？ カウンターに案内して注文をもらい、客席に案内しなくて

いいのか？

「……………!!!」

千穂と違い、真奥は言葉を失ってしまった。

何を言うべきか、まるで見当がつかない。ただただ頭が真っ白になったまま、千穂に手をゆ

すられている。

ふと、木崎と一緒に一旦店を出ようとした女性が、こちらを振り向いた。

そして、店の真ん中で立ち尽くしている二人のクルーを見つけて、ほんの少しだけ決まり悪

そうに微笑むと、千穂に向かってだけ軽く手を振って、木崎の後に続いて店から出てゆく。

「え……恵美……」

「ですよ！ 今の！ 遊佐さんでしたよね！」

今日最後のアルバイト面接応募者である遊佐恵美は、真奥と千穂の目の前で、木崎と共に視界から消えたのだった。

※

「えええええ恵美！ お前！」

「何、帰るなり」

仕事を上がってヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室に帰宅した真奥は、当たり前のように部屋の真ん中で菅屋と鈴乃と千穂と共に待っていた恵美に向かって遠慮会釈なく指を差すが、

「お前……っ！」

と言ったまま、二の句が告げられずに玄関で凝固してしまふ。

「魔王様、お帰るなさいませ。お勤め、お疲れ様でした。まずは上がられては」

「や、何よ、じゃねえよ。どういふつもりだよお前」
「だから何がよ」

「だから！」

恵美は、分かってわざと聞き返している。

真奥はバンバンと畳を叩きながらほとんどわめくように言った。

「何お前、うちの店のバイト募集に応募してきてんだよ!!」

「ちよっと、もう遅いのよ。下に響くからさういうことやめてほしいんだけど。アラス・ラムスが起きちゃうでしょ」

「何おう!?」

余裕を崩さない恵美の態度に真奥はバンクしそうなほどに顔を赤くするが、それでもアラス・ラムスの名を出されてしまうと渋々畳から手を離さざるを得ない。

「木崎さんがなあ！」

「店長さんがどうかしたの？」

「今日面接に来た三人全員、採用だつて言つてたんだ!! お前これから……」

「えっ!? 本当ですか!? やつたあ！」

真奥の言葉に、面接を受けた恵美よりも、千穂の方が顔を明るくして喜び立ち上がり、
「遊佐さん! これから一緒に働けるんですね! やつたあ！」

千穂は我慢できずに隣にいる恵美に突進するような勢いで抱きついた。

「私も、千穂ちゃんが先輩なら嬉しいわ。色々ご指導よろしくね」

「すぐに次のアルバイト先が決まって良かったな、エミリア。私も安心した」

「心配かけてごめんね。後で梨香とエメにも話しておかなきゃ」

「お、おい、ちよっと、ちよっとお前らっ!!」

千穂の勢いに押されて真奥までが少し後ろに下がるが、それでも真奥はひるまない。

「ちよっと待て! 先に俺に話をさせろ！」

「何よ。もう諸々話した終つた後なのよ。ベルにもアルシエルにも、もちろん千穂ちゃんにも話したから後で誰かから聞いた。店長さんから本当に採用の電話が来たら、これから私もあのお店で仕事するから邪魔しないでね」

「そりゃこつちのセリフだ！」

真奥は言い募るが、恵美に抱きついていている千穂が物言いたげな視線を送ってくるので声にまいち迫力がない。

「おい、おい恵美、頼むから教えろ。本当お前どういふつもりで応募してきたんだよ。言つとくが、研修時給は八百五十円だぞ? 元のお前の時給の半分だぞ? それでいいのかよ?」

事の運び方がマズかったとはいえ、千穂に言った通りあわよくば恵美にマグロナルドの仕事を紹介しようと考えていたのは本当だ。

だが、何も言わないうちから恵美が自発的に応募してくるという事態は、さすがに想定していなかった。

「はあ……」

恵美はため息と共に抱きつく千穂の手をやんわりほどくと、千穂と鈴乃を見て苦笑する。

真美は視界の端で女性三人のその仕草を見て、なぜか恵美と似たような顔で苺屋が苦笑しているのを捉えていた。

「魔王。改めて言うけど、この間のことは私、本当にあなたに感謝してるの」

「……ああ？」

恵美の、あまりに唐突な言葉に、真美は目が点になる。

「千穂ちゃんや梨香にも、沢山謝ったわ。エメにも、アルにも、はつきり言ったの。私……」

恵美は、ちよつと顔を上げれば部屋全体が見渡せる、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室の魔王城を穏やかな瞳で見回した。

「この部屋で皆で食べるご飯の時間が、好き」

「……」

「あなたにそのつもりがあったかどうかは分からないけど、結果的に私もアラス・ラムスもお父さんも、エンテ・イスラの色々なしがらみから解放されたわ。辛いこともあったけど、人間にも、悪魔にも、絶望しないで済んだ。全部あなたのおかげよ」

「お、おう……ま、まあその……おう」

真美は、正座したままこの上なく決まり悪そうに恵美から少しずつ距離を取る。

かつて恵美が、これはど穏やかな感情を流露させながら、自分に語りかけてきたことがあっただろうか。

真美は思わず玄関の隅を振り向くが、あれを、手渡してくれたときでさえ、ここまで暖かい様子ではなかっただろう。

そう思っていると、

「でもね」

唐突に恵美の声色が硬くなる。

思わず顔を正面に戻すと、真剣な顔でこちらを見る恵美と視線が交わり思わず息を呑んでしまった。

「だからこそ、私はあなたの好意に甘えるようなことはしやいけないの。だって、私とお父さんの人生があなたのせいで大きく狂ったことだけは、やっぱり許すことはできないから。あなたは……やっぱ、私の敵だから」

「あ、ああ。それは、まあそうだ、うん」

真美も、つい神妙な顔で頷くが、恵美の話の行きつく先が分からず、視界の端で鈴乃を見てしまう。

まさかとは思うが、あの時の『告解』を、鈴乃が漏らしたのではあるまいか。だが鈴乃は、真奥の視線に気づいているのか、気づいているが敢えて無視しているのか、ただ静かに恵美の言うことを聞いているだけだ。

「この間、お父さんのいる前で私に借金返して言いに来たときのことだけど……あなた、もともと私からこんなお金、取る気なかったんじゃない?」

「え!? あ、いや、それは……ち、ちーちゃん!?」

「私は何も言ってませんよ」

千穂もまた、鈴乃と同じように穏やかな表情で首を横に振る。

「というか、お前のその子供のような浅はかな思惑など、初めからカモフラージュにもなっていないかっただけのことだ」

鈴乃が千穂を引き離して言った。

「下手なお芝居打って、私が『こんな無茶な要求呑めるわけないでしょ!』って言い出すの、待ってたんでしょ? それで、私がそう言い出したならこれ幸いと、マグロナルドの新人になれって言うつもりだった。違う?」

「い……や、そ、それは、その」

「真奥さん」

この期に及んで逃げ口上を探そうとする真奥を、千穂が少し強い調子でなだめる。

「諦めろ」

鈴乃もそう言って、コタツの陰から汚く折れ曲がった求人雑誌を取り出してみせ、真奥は目を剥いてしまう。

店で千穂に見せたものとはまた別のフリーペーパーだが、恵美からの手ごたえが不発に終わった後はゴミに出したものだと思っていた。

「そ、それ……! あ、芦屋! 俺それ捨てとけって言った、だろ!?」

動揺して芦屋に詰め寄る真奥だが、芦屋は、

「古雑誌の回収日の問題で如何にもし難く……」

と真奥と視線を合わせないように言い訳する。

「燃やせよ! こういうときの魔力だろ! 今こそ暗黒の魔力で全ての証拠隠滅を!!」

真奥は顔を赤くしながら芦屋の肩をがくがくと揺するが、芦屋は取り合わない。

「だから私は最初からエミリアに余計なことを言わない方が良く、そんなことをするくらいなら捨て置いた方がマシだとはっきり反対申し上げたはず。身から出た錆なのですから、ご自分で責任をお取りくださいませ」

「せ、責任って……!」

真奥は芦屋の肩を掴んだまま恐る恐る恵美を振り返ると、

「な、なんだよ!?」

悲鳴に近い声を上げて素早く部屋の隅に退避する。

振り向いた真奥が見たのは、恵美の頭のつむじだった。

恵美が、真奥に向かって頭を下げているのだ。

あの勇者エミリアが、真奥を蛇蝎の如く嫌うことでは人後に落ちないあの逆佐恵美が、真奥に小さく頭を垂れているのである。

「ありがとう。私に気を遣ってくれて」

「やめろやめろなんだ!? お前本当に恵美か!? ガブリエルかなんかの変身じゃねえのか!」

完全に未知の猛獣に睨まれたウサギのように身を震わせる真奥を、頭を上げた恵美は微笑みながら見上げる。

「エフサハーンでの戦いで……あなたのおかげで私もお父さんも故郷の村も、暗い陰謀から抜け出ることができた。だからそのことに、私は心からあなたに感謝する。お金とスクーターはお礼の印だとも思っ受けて取って。あなたがどういふつもりであんなこと言っただけは関係なくね。でもさっきも言っただけ、結局のところ私はあなたを許せない。だからこっちに帰ってきてこれ以上、あなたの気遣いに乗るわけにはいかなかった。そこだけは分かって頂戴」

「……………」

恵美はそう言う、ゆっくりと立ち上がる。

真奥はまるで取って食われるのではないかという有様で恵美の一挙手一投足に激しく反応して身構えるが、恵美は千穂と鈴乃に顔を向けると、

「それじゃ、もう時間も遅いし、私、お父さんの部屋に帰るわね。千穂ちゃん、おやすみなさい。ベル、今日もお父さんのこと色々、手伝ってくれてありがとう」

「はあい、おやすみなさい!」

「大したことではない。ノルド殿が新しい環境に馴染めるよう、これからも力を尽くそう」

「ありがとう。それじゃアルシエル、魔王も、遅くまでお邪魔様でした」

「……………うむ」

「……………」

恵美はそう言って、真奥の返事も聞かずに玄関で靴を履いて、出ていってしまふ。

玄関の扉が閉まる音の残響がほんのわずかに室内に残り、それが合図だったように千穂と鈴乃と芦屋が、一斉に真奥を見る。

真奥はその視線の意味を考えるよりも早く、気がついたら体が動いていた。

恵美を追って、真奥は靴も履かずに部屋を飛び出す。

本人も言っていた通り、今日の恵美は下階に泊まるのだ。だから焦って飛び出さなくても追いつけるのだが、恵美が部屋に入る前に呼び止めないといけない気がした。

果たして真奥は、夜のヴィラ・ローザ笹塚の前庭で恵美の姿を認める。

というより、恵美は真奥が飛び出してくるのを分かっていたのか、共用階段の下で立ち止まり、共用廊下から飛び出してくる真奥を見上げていた。

「っ……!!」

一方の真奥は、まさか恵美が待ち構えているとは思わず、つんのめって階段から足を踏み外しそうになり、慌てて手すりに掴まって態勢を立て直す。

「ちよっと、落っこちないでよ。あなたを受け止めてあげるほど、私は優しくありませんからね」

「え、恵美……」

下からかかる、少し柔しげな声に、真奥は返事にならない返事で返す。

そして、呼びかけたはいいものの、結局何を聞いていいのかわからず黙り込んでしまった。

恵美は、そんな真奥の心中を分かっているのか、ほんの少し口の端を上げ、

「魔王。あなた、どうしてあのお店で仕事しようと思ったの？」

「……あ？」

唐突に、そんなことを聞いてきた。

質問の意図が分からない真奥だったが、今日の恵美の態度や行動に比べれば御しやすい問いではあったので、思わず口をついて素直な答えが出る。

「未経験OKで、アパートからそこそこ近くて、うまく行けば飯だって食えると思ったから……」

あとは前にも言ったかもしれないけれど、社員登用制度……」

「あなたもそうやって、お金以外にも働めたいと思う色んな動機があったんでしょ？ 私だって同じよ」

「え？」

そう言うとき、恵美は真奥から視線を外して、ヴィラ・ローザ笹塚の建物を見上げる。

「今日面接の間、アラス・ラムスをお父さんとベルに見てもらってたの。この距離なら、離れても融合状態に戻らないんじゃないかなって思ってた。ドコデモは時給は良かったけど、アラス・ラムスをずっと外に出してあげられなかったから、可哀想だなんて思ってたのよ。あそこなら、アラス・ラムスに窮屈な思いをさせずに済むわ。ベルから聞いたところによると、お店にアラス・ラムスを連れていくことはできなさそうだけど」

かつて真奥がアラス・ラムスにまつわることで千穂と一緒に店に混乱を起こしたことを聞いているのか、恵美は苦笑しながら続ける。

「お父さんが、三鷹からこのアパートに引っ越すことになったときから、決めてたわ。次のアルバイト先はあそこにしようって。採用される自信もあったしね。人手不足なのはあなたから散々聞かされてたし、デリバリーが始まるなら電話業務で鍛えたスキルも売りになるだろうって思ってたし」

そして恵美は大きく息を吸うと、はつきりと言った。

「だから私はあなたに促されたわけでも、状況に流されたわけでもない。私がマグロナルド・タ谷駅前店のアルバイトに応募したのは、私自身の意志。今の私の勤め先として最適なあの店で働きたいから、今日、面接を受けたの」

真奥はそれでも得心がいかなかったが、さりとて恵美の言葉を否定する材料もない。

「今日は泊まることにして良かったわ。あなたに借りを返して、この間のこと、きちんとお礼を言えたから」

「恵美……お前」

真奥は、見下ろす夜の月に照らされた恵美の顔に、

「明日からまたきつと、先に進める」

なんら邪気も敵意もない、素直な笑顔を見た。

「っ……」

真奥はその笑顔に、見覚えがあった。

一体どこで見たのだろう。

たった一度だけだが、真奥は恵美の純粋な笑顔を見たことがあるはずだ。

だが、それがいつのことなのか、真奥は思い出すことができなかった。

「あ、そういえば」

なぜなら、

「本崎店長なら当然のことなんだろうけど、私のことちゃんと覚えててくれたわ。面接も千穂ちゃんやあなたのことなんかで盛り上がりつつ、半分雑談みたいな感じだったし」

恵美が、

「本当に私が採用されたのなら、本崎店長の前で、今までと整合性の取れないことできないのよね。だから……」

とんでもないことを言い出したからだ。

「以後、よろしくお願いするわよ。貞夫先輩！」

「うおわあああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

その瞬間、真奥は立ち止まっていたにも関わらず、階段から足を踏み外し、近所迷惑な音を立てながら滑落したのだった。

「魔王様!? 何事ですか!」

「真奥さん!」

「なんだ、またエミリアか?」

「なんだ! なんの音だ!」

「……すい……ふひゅ」

その轟音に、二階から芦屋と千穂と鈴乃が。一階から熟睡するアラス・ラムスを抱えたノルドが寝ぼけ眼で飛び出してくる。

それぞれが見たのは、階段の下で砂埃だらけになって転がっている真奥と、その一歩横に飛びのいている恵美の姿だった。

「ちよっと大丈夫？ 助けないとは言ったけど、あんな落ち方されたんじや助けたくたって助けようがないわよ」

「お、あ、お」

真奥は肺から息を絞り出されてうめくが、それ以上に恵美を見上げる目に、正体不明の恐怖が宿っていた。

「お前、お前それ……」

「何？ そんなに嫌？」

恵美は、分かっているが、あつからんと聞いているとしか思えない。

声を上げて笑い出しそうになっている表情が、その証拠だ。

「なら、丁度いいわ。さっきも言ったけど、根本的に私はあなたのことが許してないから、これから当分こう呼んであげるわよ。さだ……」

「やめろお前さん」

真奥は立ち上がると、両手両足を使って階段をもの凄い速さで這い上がると、飛び出してきた千穂と菅屋の間を割って部屋に逃げ帰ってしまう。

「なんだなんだどうした？」

鈴乃が目を見張ってそれを見送るが、扉が閉まってすぐ小さな音が聞こえて、慌ててドアをノックしはじめる。

「おい魔王！ 鍵を閉めるな！ 何をしている！」

「ま、真奥さん!? あ、開けてください！ 私の荷物まだこっこの部屋に……」

「一体何があったというのですか。開けますよ、魔王様」

「やめろ菅屋開けるなあああ！」
魔界の王の恐怖の叫びにも構わず、菅屋はエプロンのポケットから当たり前のように鍵を取り出し、玄関を開けてしまう。

「あはははははは！」

恵美はそんなやり取りに、こらえきれずに声を上げて笑ってしまう。

「う、む？ エミリア、どうしたんだ？」

ノルドが目をごすりながらそう尋ねると、恵美は笑顔のまま首を横に振る。

「うん、なんでもない。ごめんなさい。夜遅くにうるさい音立てて」

そのまま、何があったのか分からず目を白黒させてこちらを見下ろしている千穂と鈴乃に手を振ってから、一〇一号室へと入る恵美。

「でも、おかげで全部終わったわ」

「うん？」

ノルドは意味が分からずに首を傾げるが、恵美はすっきりした笑顔で言った。
「明日から、新しい世界よ」

月光差し込む室内で宣言した恵美は、上の階で未だ続く混乱の喧騒を聞きながら、
「今日は、久しぶりにゆっくり眠れそう」
そう、満足げに言ったのだった。



魔王と勇者、運くなった約束を果たす

明日は槍の雨が降るかもしれない。

芦屋は真奥の様子を見て、心の底から思った。

もう家を出ないと遅刻するかもしれない時間帯なのに、真奥が玄関から動かないのだ。

「魔王様、そろそろ出勤しないと、本当に遅刻してしまいますよ」

「……」

芦屋がそう言っても、真奥は微動だにしない。

「そうしていたところで現実が変わりません。諦めるしかないではありませんか」

「……」

「しっかりとさっさとくたさい魔王様！ 初日からこれでは先が思いやられるというレベルの話ではなくります」

「……芦屋あ」

「はい、なんですか？」

真奥は背中を震わせて言った。

「俺、こんな気持ち初めてだあ」

「はあ」

そして、青白い顔で振り返る。

「仕事行きたくねえー!!」



次の瞬間、真奥は問答無用で部屋から叩き出されていた。

「寄り道せずに真っ直ぐ行くのですよ!」

芦屋は、ふらふらと蛇行しながらデューラハン式号をこぎ真奥の背中に共用階段の上から声をかけるが、真奥は力なく片手を上げるだけ。

寝言でも仕事をしていることがある真奥なのに、昨日から仕事に行きたくない仕事に行きたくない明日休みたいと、まるで漆原が感染したかのような有様だ。

普段の芦屋ならこれほどの主の急変ぶりに何かと気遣いを絶やさないはずだが、今回は原因が原因だけに同情することもできず、こうして心を鬼にして主を送り出すしかないのだ。

「魔王は出かけたのか」

「ああ」

真奥の自転車が見えなくなるまで見送っていた芦屋は、後ろからかかった鈴乃の声に力なく応える。

「大体聞こえていたが、魔王はそんなに今日の仕事が悪影響なのか」

「あのような魔王様の御姿、私は見たくなかった……」

「それはそうだろうな。アルバイトに行きたくないなどと駄々をこねる魔王を見たい者など、

この世にはおるまい。ルシフェルでもあるまいに」

そういう問題でもないのだが、鈴乃は心なし芦屋に同情しているようだ。

「今日がエミリアの初出勤の日なのだったな」

「そういうことだ」

芦屋は深々とため息をつく。

「エミリアは、やはり前職から時給が落ちたせいかな、最初からかなり密にシフトを組んだようだ。魔王様とシフトが重ならない日が無いほどにな。そうすると結果的に……」

「魔王がエミリアの新人研修を受け持つ、と?」

「五分五分とは仰っていた。魔王様は本崎店長以外ではソロで二階のカフェを回せる唯一のクルーだから、通常メニューのカウンターにいる者達が研修に当たる可能性も十分にあると」

最も昨日その予想を立てた真奥の口調は、どこまでも希望的観測に満ちていた。

「千穂殿はどうなのだ。もう千穂殿もあの店ではそれなりに経験を積んでいるのだろうか?」

「佐々木さんは仕事こそできるが、まだ高校生だし、実は入社してまだ半年程度だ。さすがに新人研修を受け持たせてはもらえない。第一その辺りを決めるのは本崎店長たろうしな」

恵美がマグロナルド幡ヶ谷駅前店にアルバイト面接に来た衝撃の日から三日。
今日の夕方から、恵美の初出勤だった。

この三日間、真奥はなんとかこの日に出勤しない方法を模索して、その全てが芦屋の妨害に

より失敗に終わる。

芦屋にしてみれば、恵美相手に真奥がこそ逃げ回る姿など見たくはないし、そんなことをする必要もなく、むしろおおつぱらに勇者を戦場の後輩、或いは部下としてこき使えるのだから願ったりかなったりではないかと焚きつけるのだが、真奥は何に怯えているのか芦屋の言葉にまるで心を動かされないようだった。

芦屋に携帯電話を預けてしまったのも運のつきだった。

結局どこにいてもしれぬ漆原が真奥のクレジットカードを勝手に使っている、という懸念は杞憂だった。しかし真奥が店に電話してシフトから外れたがるので、芦屋としてもそんなみつともないことはさせられず、結果末だに真奥に携帯電話が返却されていない。

最終的に思いつめた真奥が備蓄してある魔力を使ってシフトを変えようか仮病を使おうかなどと言いつ出すものだから、久しぶりに芦屋のお説教が炸裂したのが昨夜のことである。

魔王ともあるう者が、なんという情けないことで魔力を使おうというのか、まったく嘆かわしいものだが、芦屋達が見ていなかったあの数分。

礼を述べて魔王城を辞した恵美を追って階段から転落するまでの数分に、真奥があのようになってしまふ何かが起こったのだ。

それがなんなのか、真奥本人は固く口を閉ざしているし、千穂や鈴乃に尋ねてみても、もちろん二人とも分からない。

いや、正確に言えば鈴乃は薄々理由を察している気配もしたのだが、いずれにしろ断言はしてくれなかった。

「お仕事でミスをされなければ良いのだが」

「そこは、千穂殿のサポートに期待するしかあるまい……そうか……今日がエミリアの初出勤か」

主の仕事の思い暗潮とした気分になっている芦屋に、鈴乃は慰めるように声をかける。

「アルシエル。今日、少し時間はあるか？ 後でノルド殿も交えて、相談したいことがある」

「なんだ突然」

鈴乃から芦屋に相談など珍しいこともあるものだが、鈴乃は少し楽しげな様子で言った。

「大したことではない。ただ、折角今日がエミリアの初出勤日なら、遅れに遅れていたあの予定を遂行するのが良いのではないかと思っただけでな」

「あの予定？」

芦屋は首を傾げるが、鈴乃は携帯電話を取り出すとどこかに電話をかけはじめた。

「少し待て。梨香殿にも声をかけたいし、あとはエメラダ殿もまだこちらにいるはずだ。千穂殿への連絡は学校が終わってからのほうが良からうな」

芦屋は鈴乃が何を言い出すのか分からず、ただ首を傾げているだけだった。

真奥にとつて、マグロナルド・帽ヶ谷駅前店は、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室とは違った意味で心安らぐ場所のはずだった。

気ぜわしく働かねばならぬ環境が、世界征服のために駆け抜けてきた過去の戦場を思い起こさせて、働いているだけで初心に返り勇気を得ることができていた。

それがたつた一人の人間の出現で、こうも変わってしまうものなのだろうか。

常に視線が張りついているようで、全く落ち着かない。

声をかけられるだけで、背筋が凍り身が凍む。

彼女のせいで、気心知れた同僚の川田のみならず、他の男性クルーからの刺すような視線も心の毒だ。

「真奥さん。オレンジジュースの原液の取り換え方って、これで合ってる？」

「あ、ああ……」

「真奥さん、テイクアウトの紙袋が足りなくなってきたけど、補充していい？」

「お、おう……」

「真奥さん、客席用のダスターが二枚、もうかなりくたびれてるんだけど、廃棄して新しいの

出して大丈夫？」

「……………」

真奥の隣に立つ恵美は長い髪を木崎のように後ろで縛って纏め、初日からベテランの風格を漂わせる勢いで仕事をこなしていた。

元から知り合いであることが木崎にバレているのだから、恵美の新人研修を真奥が受け持つことになってしまったのは、もはや逃れられぬ運命だった。

木崎以外にも、恵美のことを覚えているクルーは川田を始めとして何人かいて、なんだかんだと見た目が美しい部類に入る恵美を真奥が担当することについて、熱い抗議とちよつとだけ本気のやつかみによる男性陣からの集中砲火があったことは言うまでもない。

嫁探しをしていることを真奥に公言していた川田からは、スタッフルームで、

「贅沢病で死んでしまえ」

というストレートな言葉を頂戴し、魔界の王、甚だ遺憾である。

恵美以外にも一人若い女性クルーが採用されており、そちらは川田が担当することになっているのだが、例に漏れずというかなんというか既婚者だったそう。

だが恵美の研修など頼まれたってやりたくないかった真奥の目から見ても、恵美は飛び抜けて優秀な新人だと言わざるを得なかった。

なにせ、一度教えたことは完璧に覚えていたのだ。

マニアルトークはもちろん、トレーパーやペーパーナプキンといったカスタマーウェアや、ケチャップやマスタードにシロップやミルクなどのコンディメントの類いの名前、置き場所、補充のタイミングも完璧。

元が顔の見えない電話越しでの接客業を経験しているため、対面接客ではよりイキイキと明るく対応しているのが見て取れて、第一声から木崎が発声（はつせ）を褒めたほどだ。

先ほどから真奥に対して出てくる質問は店の習慣や基準を把握できていないことから来るものばかりで、それらを把握したら、もう恵美が一連の作業で誰かを頼ることはないだろう。

それほどに、恵美の仕事ぶりと記憶力は際立っていた。

「まーくん」

「……はい」

木崎はそんな恵美の様子を見て、研修担当の真奥に耳打ちしたものだ。

「遊佐さんに、出来る限り早く全てのメニューを一通り食べるように伝えておけ」

さすがに初日で木崎から「渾名（みづな）を頂くことではないようだったが、それでも恵美の能力を買っているからこそ、店のメニューの全てを実感として把握してもらいたいという木崎の思惑が手に取るように分かる。

「……早く研修抜けてくんねーかなあ……はあ」

真奥はげんなりしながら、新しいダスターを二枚、ストックルームから持ってくる恵美を見

る。

「何？ 真奥さん。何かおかしいことあった？」

「え？ あ、い、いや、なんでもない」

「そう？」

ふと恵美が、真奥を振り向く。

背中をじろじろ見ていたことに気づいたのだろうか。

気づかれたからといって別にやましいことがあるわけでもなし、狼狽（うろた）えなくてもいいようなものだが、それでも恵美が出勤してからのたった何時間かの間で、真奥の精神は既に限界まで削られたつあった。

何せつい先日まで「ゴキブリ以下の血に飢えた魔物」とまで言われていたのと同じ口から「真奥さん」である。

仕事中に下の名前呼びは気安すぎるし、お客や他のクルーにも示しがつかないと、真奥は本気で頭を下げて説得し、なんとか「貞夫先輩（さだお）」呼びは回避してもらった。

だがそうすると後輩という立場や他のクルーの手前、これまでのように「真奥」と呼び捨てにするのも憚（はば）られるため、落ち着いたのが先ほどの「真奥さん」なのである。

千穂や他の人間からそう呼ばれてもなんとも思わないのに、恵美に限ってそう呼ばれると得も言われぬ悪寒が背筋を走るのは何故だろう。

新しいダスターで、回収したトレーを磨き終えた恵美は、トレーの束をストックに戻すとすつと真奥の傍に寄って小声で話しかけてきた。

「ちょっと魔王」

「な、なんだよ……」

「私と組まされて気が乗らないのは分かるけど、今のあなたもの凄く雰囲気悪いわよ、それってお店のマズいんじゃないの？」

「……………!!」

暗くような言葉に、真奥は目を見開き、そして、

「く、くくく……」

ひきつったような含み笑いを浮かべはじめた。

「入ったばかりの新人のクセして、偉そうなこと言うじゃねえかあ、ああ？ よおし……」

真奥は低い声で唸ると、カッと目を見開いて、途端に営業スマイルを浮かべる。

「遊佐さん」

「は、はい？」

突然真奥が恵美の目から見て張りついたような不気味な笑顔を浮かべるものだから、さすがに恵美も少し身を引く。

そして今日の仕事中、こうしてたまに仕事の用で真奥に呼びかけられる「遊佐さん」の響き

に言い知れぬ違和感を覚えているのは、恵美も同じなのだ。

日頃から乱暴に呼び捨てされているだけに、ポーズであっても先輩クルーとしてさんづけしてくる真奥の声に、得も言われぬ悪寒が背筋を駆け抜けるのである。

「そこまで言うなら……木崎さんからの指示はないけど、時間が許す限り詰め込めるだけ詰め込んでしまおうぜ？ ええ？」

「ど、どうぞ？ ペテランの先輩から色々教えていただけるなら、願ったり叶ったりよ」

「上等だぜ、遊佐さん!!」

「それはどでも、真奥さん!!」

「ククククククククク」

「な、なんなの、あれ……」

丁度その場を通りかかった川田が、真奥と恵美の周囲の空間が妙な迫力で歪んだような気がして、思わず目をこする。

「よおし!! 本当に容赦しねえぞ! まずはソフトクリームマシンを使ったデザートメニューの作り方だ! これができなきゃ、新人扱いじゃ抜けれねえと思え!」

「かかってきなさい! なんだって作ってやるわ!」

「一度しか言わねえからよく聞け! ソフトクリームマシンのバーに触れる前に、必ずそのアルコール除菌スプレーで手を磨け! きちんと手首までだぞ!」

「言われるまでもないわ!!」

「いいかあ! まずは百元メニユーのソフトクリームからだ! マグロナルドのソフトクリームはコーンの中にクリームを落とし、上は二巻半だ! いいか! この先端の「チョロン」を綺麗に作るにはちよつとしたコツがあるんだ! これができないうちは、一人前にはなれねえぞ!」

「ふん! 元〇しをナメないことね! 今じゃドリンクバーなんかで、ソフトクリームマシンを使えるお店は多いのよ! 全くの未経験だと思ったら痛い目見るわよ!」

「はっ! 笑わせる! マググのソフトクリームをそんじょそこのドリンクバーと一緒にしてもらっちゃあ困るぜ! マグロナルドのソフト用ミルクは北海道産百パーセントだ! なめらかな分重くて溶けやすいから、綺麗な二巻半を作るのは簡単じゃあねえぞ!」

「なんだろうね、あれ……」

「喧嘩しているのか、ものを教えているのか分からない真奥と恵美の謎のテンションに、川田は肩を竦めてその場を去った。

そして、理解できずにその場を去った川田と違い、そんな二人の様子を店の外から熱心に眺める視線が一つ。

「……良かった。なんだかんだで、うまくやってるみたい」
言わずもがな、千穂である。



かつては真奥と千穂の様子を恵美が店の外の物陰から観察する、という場面も見られたが、今度は立場が逆転し、学校帰りの千穂が真奥と恵美がいかがみ合っていないかどうか心配になり、シフトに入っていないにも関わらずこっそり寄って草葉の陰から見守ると言う図式だ。

店の外からみても、テンションが少しエキセントリックな方向に飛んでしまっているのが分かるが、それでもこれまでのようにその場で斬り合いに発展しそうな喧嘩にはなっていないさうなので、千穂ははっと胸をなで下ろす。

安心したら、夕食前だと言うのに少しお腹が空いてきてしまい、折角立ち寄ったのだから様子見ついでにお客として寄り道してしまおうかと思つたその瞬間だった。

制服の上着のポケットに入れていた携帯電話が震えるのに気づいて、画面を開くと、

「え？ あれ？ 真奥さん？」

表示されているのは、今店内で恵美に研修を施しているはずの真奥からの電話着信だった。

とりあえず電話を取ると、

「もしもし、佐々木さんですか？ 芦屋ですが」

聞こえてきた声は、芦屋のものだった。

「なんだ芦屋さん！ 真奥さんお店にいるのにどうして電話がかかってくるんだらうって驚いちゃいました」

「事情があつて、魔王様の携帯電話を私が預かっているのです。もう、学校からはお帰りです」

か？」

「あ、はい。今ちよつと真奥さんと遊佐さんが心配になつてお店の前から見てたんですけど、なんだかんだでうまくやつてるみたいです」

「左様ですか。それなら良いのですが。ところで佐々木さん、つかぬことお伺いしますか」

「はい」

「今日、木崎店長がお店にいらつしやるかどうか分かりますか？」

「え？ 木崎さん、ですか？」

質問の内容が意外で、千穂は思わず聞き返す。

「はい、もしお店にいらつしやるようなら、お願いしたいことがあるのですが、いらつしやらないようならまた後日にしようかと……」

「ちよ、ちよつと待つてくださいね、今シフト表見てみますから」

千穂は学校鞆から手帳を取り出し、常に挟んであるシフト表を開く。

「えつと……あ、木崎さん今日ラスト、あ、閉店までいますね。真奥さんも閉店まで。遊佐さんはまだ研修だから午後十時に上がりのはずで……つて、あー、今日、遊佐さん帰つたら、閉店まで真奥さんと木崎さんだけなんだ。じゃあ、カフェカウンターは一旦閉めちゃうのかな。最近夜に人がいないときは、お客さんと一緒に上に上がつて対応してるみたいで」

「なるほど。少々お待ちを。……おいベル、木崎店長がいると佐々木さんが」

「菅屋は、鈴乃と一緒にいるのだろうか。電話の向こうで少しの間菅屋が鈴乃や他の誰かとやり取りするのが聞こえてから、

「失礼しました。それで佐々木さん」

「はい」

「今日の夜十時頃、ベルがお迎えに上がれば、外出することはできますか？」

「はい？」

菅屋の言葉に、千穂は目を瞬かせた。

「く……っそ……」

真奥は、無力感に打ちひしがれ、膝をついていた。

「ふん」

一方の恵美は、勝ち誇ったように胸を逸らし、凛として真奥を見降ろしている。

夜十時の一階カウンター。

初日ということもあって、恵美はもう仕事を上げる時間だが、真奥と共に木崎と呼ばれ、今日の研修の所感を伝えていたところだった。

「それで、どうでしたか、初日」

木崎は真奥の様子を横目で捉えつつ、笑いをこらえながら恵美に尋ねる。

「真奥さんが色々なことを教えてくれて、充実した初日になったと思います」

「くっ」

真奥はその言葉に、一言も言い返さない。

恵美はその後、ソフトクリームマシンの全てを理解してしまったのだ。

ソフトクリームマシンで作れる全てのデザートメニューをたった一日でマスターするだけでも普通ではない。

それどころかおおよそアルバイト初日の人間に教えるべき内容ではないのだが、恵美は必要ないところでは随時メモを取り、真奥の説明をほぼ完璧に把握して、言葉による説明だけで機械の解体洗浄までもやつてのけたのだ。

「でも、まだ初日ですし、メニューについてはまだまだ把握していないことの方が沢山あります。願わずに、明日からも真奥さんの指導を仰ぎたいと思っています」

「だそだが、まーくんはどうだった」

「あー、その」

真奥は力なく顔を上げ、一瞬だけ隣の恵美の顔を見て、そして言った。

「はっつきり言って……完璧でした。物覚えの早さですけど、やっぱり前の仕事で電話応対やつてたおかげか、対面接客でのお客さんの受けが良かったように思います」

「そうだな。それは私も感じたことだ。なんというか、堂に入っているとでもいうかな」

「ありがとうございます。恐れ入ります」

恵美は殊勝な態度で会釈する。

「あれなら早いうちからレジに立たせてもいいんじゃないかと思いました」

真奥は少しでも早く恵美の研修から抜けるために、本気半分お世辞半分でそんなことを追撃してみるが、

「ふむ、まあそれはそれとして、未経験だからこそ油断もないように見えます。是非明日以降も今日のように、また今日以上に頑張ってください……これは本人を前にして言うのもあれだが、まーくんの伝説を越えるかもしれんな」

「ううっ。なんてこった……」

木崎にあつさり流された上に、真奥はまた見えない言葉の矢が心臓に刺さったような気がして頭を抱えた。

まーくんの伝説、とは、研修明け一ヶ月で時給を百円上げた、というエピソードだ。

それをまさか恵美に越えられてしまうと、マグロナルドクルーとしても、魔王としても、遺憾の意では済まされない事態である。

「まあとりあえずは、初日を大過なく過ごせたようので何よりです。お疲れ様でした」

「はい、ありがとうございました」

木崎の言葉に、恵美も小さく微笑んで一礼し、スタッフルームに戻ろうとしたが、

「ああ、ところで」

その背を木崎が呼びとめた。

「遊佐さん、申し訳ないけど、着替えを終えたら少し待っていてもらえるかな」

「はい、なんでしょう？」

「まあまずは着替えてきてくれ。話はその後に。まーくん、私はちよつと電話してくる」

「はい……？」

真奥と恵美は顔を見合わせるが、とにかく恵美は着替えるために、一度スタッフルームに引っ込んだ。

一方の木崎は店の電話の子機を取り上げると、素早く番号をブッシュする。

「……もしもし。ちーちゃんか。木崎だ。今大丈夫か？ うん。なんとかなりそうだよ。十分後か、了解。待ってるよ」

「……電話って、ちーちゃんにですか？ 十分後って？」

「うん、まあ、すぐに分かる。こんなことを私が言うものでもないが、今から少しの間だけ、いきなりお客様が大挙して押し寄せないことを祈っておけ」

「は、はあ……」

木崎らしからぬ発言に、真奥は困惑を隠せない。

やがて私服に着替えた恵美がスタッフルームから戻ってくると、木崎は時計を見て頷いた。

「時間通りだな」

「何がですか？」

恵美の問いに木崎は応えず、目で店の入り口を差す。

木崎の目線の先を追って振り向いた真奥と恵美は、

「え？」

その瞬間、自動ドアを開けて入ってくる集団に目を剝いた。

千穂を先頭に、芦屋、鈴乃、ノルド、アラス・ラムス、アシエス、エメラダ、梨香と一緒に入ってくるではないか。

「こんばんは！ 遊佐さん、真奥さん！」

「お邪魔致します」

「失礼する」

「どうも」

「まぐろばとー！」

「こんにちは」

「お仕事お疲れ様です」

「よ！ 恵美！ お疲れ！」

口々に真奥と恵美に声をかけてくる一同に、二人は思い切り狼狽えるが、なぜか木崎は当たり前のように千穂に歩み寄り、二階を指し示す。

「店にとっては不幸なことだが、君達にとっては幸運なことに、今二階席はノーゲストだ。あまり長居はさせられないが、奥の二階を使うといい」

「はい！ 無理を聞いていただいてありがとうございます！」

「なに、その分君達に仕事で返してもらえばいいさ。さ、早く行つてきなさい。如何にお客が少ない時間帯とはいえ、私一人で支えられる時間はそう長くはないから。まーくん。それに遊佐さん」

木崎はクルーキャップを被り直しながら、真奥と恵美を振り向いた。

「お客様を二階の奥の席にご案内してくれ。それからしばらく、私は下のカウンターにいるかな」

「え？ え？ エメに、お父さん、梨香まで、一体どうして……」

「あ、案内？ 木崎さん一体これは……」

「ほら、真奥さん、他のお客さんが来ちゃいますから」

「恵美もほら行こう！ ぐずぐずしてつと店長さんに迷惑がかつちゃうからさ」

混乱から抜け出せない真奥を千穂が、恵美を梨香がそれぞれ手を取り、二階席へと連行してしまう。

ノーゲスト状態、即ちフロアに一人のお客もいない二階席の一番奥の席に真奥と恵美は連行される。

「さ、恵美、千穂ちゃんの隣に座って」

そして恵美は、一番最初に席についた千穂の隣に座らされる。

二人の前には、包装紙に包まれた、大きな箱。よく見るとその包装紙には、マグロナルドのロゴがプリントされている。

「ま、まさかそれって……!」

そのロゴを見た真奥が、あることに気づいて驚愕の声を上げる。

「お、お前らまさか、木崎さんまで巻き込んで……」

「ちゃんんとマグロナルド仕様だからね。店長さんもそれだから許してくれたんだよ。さ、時間ないからちやつちやとやつちやおう! 芦屋さん、開けちやつて!!」

「かしこまりました」

梨香の指示で、芦屋がマグロナルドの包装紙に包まれたそれを、手早く開封してゆく。

包装紙の内側は、真っ白なボール紙の箱。だが、かすかに甘い香りが漂ってくる。

未だ状況が掴めていない恵美だったが、横から梨香が、その箱に手を添える。

「恵美、千穂ちゃん」

「え? え?」

「はい!」

梨香の呼びかけに、恵美は混乱を深め、千穂は元氣よく返事する。

そして満を辞して、梨香は箱の蓋を取り払った。

「誕生日おめでとう!!!」

「……っ!!!」

恵美はその瞬間、大きく息を呑んで、口を両手で押さえてしまう。

箱の中から現れたのは、一見ごくシンプルなホルのショートケーキだった。

だが普通と違うのは、ケーキの中央に大きく刻印されたマグロナルドのロゴと「Happy Birthday」と書かれたホワイトチョコのプレートだ。

「千穂、ちゃん、こ、これ……」

恵美は、息を呑んだままの姿勢で千穂に尋ねるが、その声は既に、心の揺れと同じように震えていた。

「ちよっと、予定とズレちゃいましたし、正確には誕生日でもないですけど」

千穂は少しはにかみながら、頷く。

「今日は遊佐さんにとっては新しい出発の日ですし、やるなら今日しかないって、皆で」

「み、みんな……」

恵美は、もはや隠しようもないほど潤んだ目で集まった皆を見回す。

「いやー、鈴乃ちゃんから連絡ももらったときにはいいじゃん！ って思ったんだけどさ、何せ今日の今日じゃん？ まずこのケーキを手に入れるのが大変でさ」

「そ、そうだ、そのケーキ、パースデーパーティーをやる店舗でしか買えないはずだぞ!? しかも、かなり前から予約が必要なのはさだ！」

「仰る通りです」

真奥の叫びを受けたのは芦屋だった。

「ですから、実はこのケーキ、マグロナルドの正規品ではありません。街のケーキ屋で細工をしていたいただきました。店舗的には完全にルール違反の、いわゆる持ち込みです」

「な……お、お前……」

「ですが、木崎店長はケーキをマグロナルド仕様にすることと、もう一つの条件を満たすことでここでの会を許可してくださいました」

「な、何？」

「一人につき一つ、六百円以上のセットメニューをオーダーすれば、三十分だけこの場を貸してくれることになったんだって」

芦屋の後を梨香が再び引き継ぎ、真奥は暗然としながらもマグロナルドパースデーパーティーの仕方を思い出す。

「ああそういうえば、パースデーパーティーって参加者全員が一つずつセットオーダーが必要なん

だっけか……」

「それに、エメラダ殿にこちらと向こうの暦の差異を聞いたところ、エンテ・イスラでのエミリアの誕生日に相当する日が一週間後だということが分かったのだ。こちらの暦で言えば、十月の二十五日だ」

「ベル、そう、そうなのね」

「そうだ、エメラダちゃんに聞いたけど……恵美、本当は今度で十八なんだって？」

「梨香は、下階の木崎に聞こえないようにほんの少しだけ声を潜めて言う。」

「私びつくりしちゃったよ。あなたの落ち着き方、とても年下とは思えないもん。あ、だからって今更私に敬語とか使い出したら怒るかんね？」

「梨香……うん、ありがとう。ありがとう……っ！」

「恵美の瞳から、早くも大粒の涙がこぼれはじめる。」

「千穂、ちゃん、私……っ」

「遊佐さん」

恵美は、涙を拭くこともせず、隣に座る千穂を抱きしめた。

千穂も抱擁を返しながら、恵美の耳にささやく。

「お帰るなさい。それと、お誕生日、おめでとーうございます」

「あり……がと……っ、千穂ちゃんも……遅くなって、ごめんね。待っててくれて、ありがと

う……っ！ 千穂ちゃんも、おめでとう！

恵美は静かに涙を流し、千穂もついつい釣られて涙をにじませる。

二人の少女の涙を見て、ノルドは小さく呟いた。

「エミリアは……良い友に恵まれているな」

「本当ですね」

エメラダも、恵美と千穂を慈しむように見ていた。

「よしよしや！ 時間もないからさっさとやるよ！ 下のお客さんたちに勘づかれないうちに、

プレゼントの贈呈だ！」

「え、あ、うん、で、でも私、千穂ちゃんになんにも……」

「恵美が用意できてるわけないでしょサプライズなんだから！ そこは後で個人的に用意すん

のよ！ ほら、まずは鈴乃ちゃん達」

「ああ。これは今日、ノルド殿とエメラダ殿、それとアルシエルと共に選んだものだ」

「え？ 芦屋お前何やってあ痛っ!?」

昼間の芦屋の行動を知らない真奥が、芦屋が恵美の誕生日プレゼントの選定に加わっている

ことに疑問を呈そうとして、

「空気読めない魔王は小さく畳んでホイしやいますよう？」

横からエメラダに腰を蹴られ、よく分からない脅しを受ける。

「ありがとう。なんだろう……あれ？」

そのとき恵美は、初めてあることに気がついて、涙を拭って鈴乃を見上げた。

「ベル……どうしたの、その格好」

「あ、ああ」

「可愛いつしょ？ 私と千穂ちゃんが見立てたんだ」

「お、おかしくはないと思うが、どうだろうか」

プレゼントを差し出す鈴乃は、普段の和服姿ではなかった。

ネイビーブルーのフレイスカートにキャメルブーツ。広い襟のクリーム色の薄手のセーター

の下に、やはりネイビーのストライプのブラウスという、洋服姿だった。

「全然おかしくなんかいいわ！ すごく可愛い！」

「そ、そうか。その、この会をしている間、店で和服を着ては他の客がいた場合に目立つ

と言われて、その、初めてこのような格好を……うん、こう、正直このヒラヒラしたスカート

はまだ落ち着かないのだが、おかしくないのなら、良かった」

鈴乃は顔を赤らめながらもこもこ言い、すぐにはっとして、改めてプレゼントの箱をすずい

と恵美と千穂の前に差し出す。

「わ、私のことはいいい！ それよりも、これを」

「うん、ありがとう。でも、本当に似合ってるわよ」

「い、いいから！」

柄にもなく照れている鈴乃に微笑みかけてから、恵美は丁寧に包みを開く。

「写真立てだ。可愛い細工ね！」

恵美は、包みを開けて出てきた、水鳥をあしらった水色のガラス細工の写真立てを見て快哉を上げる。

「何にするべきか悩んでいたところ、意外にもアルシエルが妙案を出してな」

「アルシエルが？」

「言う必要はないと言っただろう」

突然ふられて仏頂面をする芦屋だが、恵美の目が説明をしないと済みそうになかったため、殊更ぶつさらばうに言う。

「……折角父親と再会したのだ。これから思い出を残すことも増えるだろう。そういうものを飾るものがあればいいのではないか。そう言っただけだ」

「ああ……そうね、そうだね」

恵美は小さく頷いて、写真立てを胸に抱く。

「千穂殿と、色違いの揃いのものになっている。喜んでもらえれば幸いだ」

「わあ！ お揃いですか！」

千穂も、自分に手渡された包みを丁寧にみると、恵美と同じ細工の、ピンクのガラスの写

真立てが箱の中から出てくる。

「本当だ、お揃いね！」

「嬉しいです！ でも……同時に、ちょっと悔しいです」

「え？」

「さすが芦屋さんというか……考えることが、同じだったというか」

そう言うのと、千穂は照れくさそうに、恵美にプレゼントを差し出す。

「実は、私もなんです。写真立て」

そう言って差し出す千穂のプレゼントは、鈴乃が出したもののより一回り大きいものだった。

恵美はそれをやはり丁寧に開くと、千穂の選んだ写真立ては金属のフレームに七宝細工が施されているもので、複数枚の写真を飾れるタイプのものだった。

「遊佐さんに、いい思い出いっぱい残して欲しくて、選びました。芦屋さん達と、重なっちゃいましたけど」

「千穂ちゃん……千穂ちゃんの気持ちは、一つだけの大事なもののよ。本当にありがとう。綺麗に飾らせてもらうわ。本当に、ありがとう」

恵美は千穂の写真立てをテーブルに置くと、改めて千穂を抱き寄せる。

「ふっふっふ！ 危ないところだったぜ。私も実は、写真立てを考えちゃってたんだよねー」

そして真打登場。梨香が、これまでの二つとは違った厚みのある箱を取り出す。

「でも、この場所のことを考えたとき、ビビッとこれがいまい浮かんだのだ！ さあ受け取れい
恵美！ 私の真心を！」

「ありがとう、開けさせてもらうね」

恵美は、少し重みのある箱を受け取って、丁寧に開く。

包みから出てきたのは、木の箱のようなもの。だが、脇に真鍮製のネジ巻のようなものが
出ていて、箱の上蓋には音符のマークが刻印されていた。

「オルゴールね？」

「そ！ 開けてみて開けてみて！」

梨香に促されて蓋を開けると、蓋の裏側に、ガラスの板が嵌め込まれているではないか。

「そこに、写真が入られるようになってるのさ！」

梨香は殊更ふんぞり返ってから、

「結局写真立てかっ！」

という真奥の突っ込みを確認し、一気に力を抜く。

「やーだつてさー！ 今の恵美の状況考えればどうしたってこうならざるを得ないじゃん？」

あ、真奥さん、突っ込みありがとうね

梨香は苦笑しながら、自分の額をびしやりと叩く。

「でもね、メインは一応オルゴールだから、見て見て、曲名のこと」

梨香の指差す先を見た恵美が見たのは、オルゴールに刻まれた「Happy Birthday to You」
の文字。

「梨香、これ……」

「ここで全員で合唱するわけにはいかないからね。でも、そういう思いを込めて、音楽をとっ
ておこうと思つてさ。ま、後で帰ったら聞いてみて」

恵美はその言葉に、今すぐネジを回して梨香の想いがこもった曲を開きたい衝動を、懸命に
こらえなければならなかった。

「そんでね、千穂ちゃんにはこれ。これ私だからこそあげられるものと、自信をもつて言え
る！」

「え？ 私にもあるんですか？」

千穂は、梨香からのプレゼントがあると思つていなかったのか、驚いて目を丸くする。

「鈴乃ちゃんから、合同パーティーだってことちゃんと聞いてたからね！ ほら、開けて開
けて！」

「は、はい、ありがとうございます……あつ！」

梨香から千穂への包みの中から出てきたのは、小さな香水の瓶だった。

有名なメーカーのロゴが刻まれた瓶に記された香りの名前はやはり「Happy Birthday」。

梨香は驚く千穂の傍によると、耳に口を寄せる。

「香りが好みに合うかは分からないけど、私からの応援メッセージだと受け取ってもらえると嬉しいな」

「え、えっと……」

千穂はどきどきしながら梨香の声を聞いていたが、

「君の夢のために大人の化粧品の一つも持って、想い人のためにしっかりと女を磨き給えよ！」

「す、鈴木さん!!」

梨香の目が、少しだけ離れた場所にいる真奥の方を向いているのを見て、千穂は慌てふためいてしまう。

「ね、じいちゃいちゃ！ あれ！ あれ！」

「お、う、うむ。エミリア、実は、アラス・ラムスがな」

今度はノルドとアラス・ラムスだ。

「ま、ま、ちーねーちゃ、おめえと！」

アラス・ラムスの言葉と共にノルドが差し出したのは、少しよれてしまった画用紙だ。だが、そこに描かれたものを見て、恵美も千穂も、一気に明るい笑顔が浮かべる。

クレヨンをふんだんに使った、アラス・ラムス渾身の二人の絵姿。

緑色の地面に、茶色い大きな四角形が載せられ、その前に二人の姿が描かれている。

確認するまでもなく、ヴィラ・ローザ笹塚の前に立つ、千穂と恵美の姿に間違いない。

アラス・ラムスらしい一生懸命な絵には、どんな大人をも虜にする魅力が宿っていた。

「この子は、芸術家気質だな」

ノルドが笑いながら言った。

「何枚も描き直して、ようやく納得した渾身の一枚だ」

「私、それ全部欲しいです」

「私も。このままじゃ、この一枚を千穂ちゃんと奪い合うことになっちゃうわ」

恵美は愛おしそうにアラス・ラムスの絵をもう一度眺めてから、改めて集まった皆を見回す。

「皆……本当にありがとう、私、今日のこと、ずっと忘れない、本当に……」

「やーちよっと待った。恵美、お礼を言うにやまだ早い。まだ、何も言っていない奴がいるぜ？」

「え？」

梨香の制止に驚く恵美。

見ると輪から少し外れたところで、アシエスに脇腹を突かれている真奥が決まり悪そうに立っていた。

「ねーねーマオウ。コナイダ選んでたのツテ、今渡すものなんじゃないノ？」

「……うっせ。どっちにしてもこんなことになるなんて知らなかったから手元に無……」

ぶつくさ言って場から遠ざかろうとする真奥を制したのは、鈴乃の一声だった。

「探しものはこれか？」

そして鈴乃の手には、包装紙で包まれた三つの細長い箱が握られていた。それを見た真奥は、顔を強張らせる。

「お、ま、まさかそれ……」

「アシエスが、魔王も千穂殿とエミリアのために何か買い物をしていて、と言っていたのでな。アルシエルに頼んで、魔王城のカラーボックスの奥にしまい込まれていたものを見つけてもらった」

「うえっ!?」

「私とアルバート殿と別れた後、贖ったそうだな。千穂殿とエミリアへの土産だと言って」

「アシエスお前ええええ!!」

「だってええええエー! あんときマオウそう言ってたじゃんカアアア!」

アシエスの肩を掴んでがっくんとか揺さぶる真奥だが、強い力で首根っこを掴まれ、アシエスから引き離される。

真奥を千穂と恵美の前に引つ立てた鈴乃は、真奥の鼻面（はなめん）の真ん前に三本の包み紙を差し出して、不敵な笑みを浮かべ、すつと真奥の耳に口を寄せ囁く。

「私の路銀を無断で使ったということは、お前の心意気に免じて黙っておいてやる」

「ぐ……」

真奥は鈴乃の脅しに屈し、包みを受け取った。

「でもお前これどうやってプレゼント包装……池ボチャしたせいで、帰ってきたとき剥き出しだったはずなの……」

「アルシエルは器用な男だ。ボール紙と包装紙を渡したら、見事に作ってみせたぞ?」

鈴乃の返事に真奥は戸屋（とや）を睨むが、戸屋は都合良く明後日の方向を向いている。

包みの中身は言わずもがな。皇都蒼天蓋の郊外で鈴乃の金から借金をして購入した、木製の細工師だ。

千穂には花細工の匙を。恵美には、アラス・ラムスと一緒に使うための鳥細工の匙を買ったのだが、この流れで自分が一番最後にこれを渡すことになるのは、もう単純に気まずい。

まさか鈴乃達が、こんな劇的な会を催すなどとは想像だにしていなかったのだ。

それでも今までの流れを見ているとどうにも自分が選んだものが急に心のこもっていない品に思えてならなかった。

「……これ、その」

だが、場の空気が引き下がることを許してはくれそうにない。

真奥は覚悟を決めて、それを千穂と恵美の前に差し出した。

「一応、そのために買ったもんだから、まあ、使ってくれれば。恵美は、アラス・ラムスの分、二つ……何か、縁起がいいって話も聞いたことあったし」

どこまでも縮まらない真奥の言葉。

恵美と千穂は、ぶつきらばうに差し出されたそれをそれぞれ受け取る。

「開けて、いい？」

「……プレセントなんだから、いいに決まってるんだろ」

真奥のぶつきらばうな言葉に従い、恵美も千穂も包みを開けて、

「あっ……」

中身を見て、同時に声を上げた。

「おお？ 何なに？」

「なんだったんですか？」

梨香とエメラダが、興味津々で横から千穂と恵美の手元を覗き込み、

「おお、これはなかなか」

「へえ、かわいいじゃないですか」

本人達より先に歓声を上げる。

一本の木から彫り出した、細工彫。

千穂は大きな五枚の花弁を持つ大輪の花の模様を嬌めつ眇めつして、小さくため息をつく。

「不思議な模様……。凄く、綺麗」

恵美も、同じ鳥をあしらいつながりながら、微妙に形の違う二本を見比べて感心したように言う。

「こんなの初めて見たわ。継ぎ目がない。一本の木から彫られてるのね。エフサハーンで見つ

けたの？」

「ああ、まあ……一応実用品らしいから」

「なんだか、使うのがもったいないくらい綺麗です。ありがとうございます真奥さん。大事にします。使うより、飾っちゃうかも」

「うん、ま、気に入ってくれたなら、良かった」

千穂は満面の笑みを真奥に送り、真奥はバイザーの鏡に手を当て少し目を伏せて頷く。

「本当に、飾っておきたいくらい綺麗ね」

恵美も千穂の感想に、心から同意するように言って、二本の匙を両手で持ち、

「ありがとう。大切にするわ」

そう、真奥に告げる。

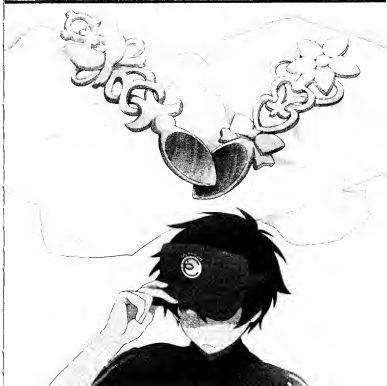
「……ん」

それに対して真奥は、喉の奥で唸るような、小さな返事しか返せなかった。

そんな真奥を、千穂と鈴乃と芦屋は、三者三様の思いで見つめていた。

「……さ、それじゃあ、いい雰囲気のところ申し訳ないけど、そろそろ撤収の時間だね」

と、そのとき梨香が、腕時計を見ながら告げる。
「もう五分ちよつとオーバーしちゃってるから、店長さんにも悪いし急いで片付けて、セット注文しないね。ケーキやローンソクは帰ってからね。今日のご飯は強制的にみんなでマグド！」



あ、真奥さんは頑張って最後まで仕事してねー」

「俺が帰るの待ってる必要ねえからな」

このときばかりは、真奥は梨香のぞつくばんな仕切りに感謝した。

この上恵美から素直な感謝を受けていたら、精神が持たないところだった。

慌ただしくケーキを箱に戻し、恵美と千穂はもらったプレゼントをどうやって鞆にしまえば

よいか四苦八苦し、真奥以外の全員がセットを注文して店を出たのは結局十一時を回った後だった。

一人、シフト通りに残った真奥は、閉店作業を始めている木崎の背に、小さく礼を言う。

「すみません、なんか色々」

「ん」

木崎は振り返りもせずうすうすに頷く。

「こちらとしては、客数が薄い時間に売り上げに貢献してもらったんだ。お互い様だよ。持ち込みと言っても、別に持ち込んだものを飲み食いしていたわけでもないしね」

「それはそうですけど」

「ああそうだ、これだけは言っておかないとな」

「はい？」

終わったことには気のない様子だった木崎が、何かを思い出して真奥を振り向いた。

「バラエティ豊かな異性の友人がいるのは結構だが……」

「はい？」

木崎はなぜか、少し真奥を睨むように目を細めた。

「ちーちゃんや遊佐さんに後ろから刺されるような真似だけはするなよ？ 君はどうも女性の扱いが雑というか、何をしてもいいと思っっているような甘えがあるというか……」

「は!？」

「とにかく以上だ。仕事に戻れ」

「いやいやいやいや木崎さん!? 大分誤解があるみたいですけど、そういうんじゃないんですよ!？」

「黙れ。傍から見ていれば、カワつちの言うことの方が一理ある」

「あいつ何言っただんですか!？」

「本人から聞け。しばらく君は、男性クルーの中で針の筈に座ることになるだろうな」

「勘弁してくださいよ!」

「まさしく身から出た錆だな」

「何も出しちゃいせんって!!」

煌々と照る満月が照らすマグロナルド・ハート谷駅前店から、夜の街に悪魔の王の悲痛な叫びがこだましたのだった。

真奥は夜の笹塚の町を、ぐったりしながらデュラハン式号を押していた。

「今までで……一番疲れた……」

恵美の研修を受け持っただけでも精神的に來るものがあつたのに、まさかのサブライズバー・スデーパーティーである。

いや、千穂と恵美の合同バー・スデーパーティー自体は、ずっと以前から企画もされていて、真奥自身千穂の誕生日を祝い、恵美が嫌がりそうな恩を着せてやろうという気持ちには確かにあつたのだ。

だが、それはあくまで真奥が能動的に動ける場合の話であり、今回のように流されるままに周りに乗せられて、というのはいかにくいことこの上ない。

しかも、

「『ありがとう。大切にするわ』

と来たものだ。

これまでなら、それこそ真奥からの贈り物などその場で分子レベルに粉碎していてもおかしくない恵美である。

「どーいうつもりなんだアイツは!？」

真奥のことを許せない、と言いながら、今までよりも明らかに心が開かれている恵美に対して、真奥は接し方が分からなくなってしまうている。

この前は、恵美に対してはこれまで通り接すればいいと、そう思っていた。だが、ふと思う。

「これまで通りってなんだよ!」

思えばこれまで真奥は恵美に対して、なんら積極的な働きかけをした覚えがないのだ。

恵美の側は敵対監視だなんだと色々言いながら真奥に積極的に絡んできたが、真奥の方から恵美を排除しようとか、恵美の様子を探ってやろうなどと考えたことはついぞなかった。

思えば真奥は、恵美が今住んでいる家の場所すら知らないのだ。

永福町でマンション暮らしなことは知っているが、その正確な住所は知らないし、知ろうと思ったこともない。

せいぜい職場やアパートにやってくる恵美に「邪魔だ帰れ」くらいのことと言ったが、そもそも力で敵う相手ではなかったし、実害も認められなかったので恵美が傍にいた状況に早々に慣れてしまっていたように思う。

そしてアラス・ラムスが現れて真奥達の日常に深く潜り込んで以降、恵美がいる環境こそがより自然な状態になっていった。

つまり真奥と恵美の関係の「これまで通り」とは、恵美のやることを為すこと全て受け入れて

いくということに他ならないのである。

「なんでだ。なんだかすげえ、落ち着かねえ」

「何を夜中に道端で騒いでんのサ」

道端に座り込んでしまった真奥に、遥か上方からかけられた声があった。

「……お前こそそんなとこで何してんだよ。危ないだろ」

真奥は顔を覆いながら、声の主を振り仰ぐ。

色々思い悩みながら歩いているうちに、いつの間にかアパートのすぐ傍まで帰ってきてしまっているらしい。

「別に危なくないシ。私をなんだと思ってンノ。頭から落っこちたって怪我もしないヨ」

ヴィラ・ローザ笹塚の屋根の上。ごくごく明るい星だけがまばらに散る夜空を眺めながら、アシエスが真奥に向かって手を振っていた。

「悪魔だろうが勇者だろうが、そういうとこにいる奴には危ないって声かけとくモンなんだよ。つたく」

真奥は肩を竦めてから、少しアパートの様子をうかがう。

「おい、恵美達は……」

「皆もう帰ったヨ。チホは明日学校でリカも仕事だからって。エミもネーサマ連れて帰っちゃった」

「……そ、そうか」

真奥は思わず安堵して、腕時計に目を落とす。

確かにもう時間は一時近く。さすがの千穂も、連日鈴乃の家に泊まるわけにもいくまい。

「で、一体何唸ってたノ」

「おい、声でけえよ」

アパートの屋根の上からかけられるアシエスの声はそれなりに大きい。時間も時間だし、鈴乃やノルドももう眠っているかもしれないことを考えると声を抑えさせたい真奥だが、

「だって違いんだモン。仕方ないジャン」

アシエスはそんなことなどどこ吹く風で、ふと思いついたように手を打った。

「マオウがこつち来ればいいジャン。ホイ！」

「え？ お、わ!?」

次の瞬間、真奥はデユラハン式号のスタンドを立てる暇もなく、空中高く吊り上げられていた。

「はいこつち、ホイ」

アシエスは真奥を空中で器用に取り回すと、一切の抵抗を許さず自分の隣まで輸送し、こつこつした瓦屋根に腰掛けさせた。

「び、ビビった……」

「魔王のクセにこの程度空飛んだくらいでビビんなヨ」

「いきなり吊り上げられりや誰だってビビるわ!!」

一応の抗議をしておくが、その程度でアシエスが堪えるはずもない。

「で、何を悩みなのサ？ なんでも話してみタマエヨ」

「お前に話さなきゃならねえほど切羽詰まった話じゃねえよ」

「ム、なんかバカにされテル？」

「分かっているんなら余計なこと聞くな。男には一人で思い悩むときもあるんだ」

「そういうノ、ヘタレの考え休むに似たりって言うんでシヨ」

「たった一文字入るだけでより酷い慣用句になったなおい！」

真奥はため息をついて思わず横たわろうとしたが、思いのほか急勾配な屋根と瓦屋根の硬さに、思い直して姿勢を直す。

「……人付き合いの悩みだよ」

「ン？ ナニ？ 遂に決心して千穂と結婚でもするノ？」

その瞬間、真奥は屋根から転げ落ちそうになった。

「お前は誰に何を吹き込まれた!!!」

「いやー、ご飯食べる間にリカが、マオウはツミツクリナオトコだって言うからサ」

「あの野次馬女の話は話半分に聞いとけ！」

「半分？　じゃあ結婚じゃなくてメカケにすぶっ？」

「話半分ってのはそういう意味じゃないし、そもそもそれじゃ半分にはなってるねえし、大体そんな日本語どこで覚えた！　冗談にしても笑えねえぞ！」

「だからって殴ることないじゃんカア！」

後頭部を押さえながら涙目で抗議するアシエスを、真奥は歯を剥き出して威嚇する。

「お前に相談なんかしたら、それこそ明日には太陽が西から昇るレベルで話が入れ替わってあちこちに伝わってそうだからもう話さねえ！」

「そー、悪かったヨー。真面目に聞くからサー」

「その態度がもう信用ならねえ！　大体お前こそどうしたんだよこんな時間に」

「エ？　ああ、ウン、今日は月が明るいから、空見てタ」

「空？」

「ウン。私、夜空眺めるの好きなんだ。でもミキティン家、屋根がちよっと座り心地悪くて、色々探して今日ここに落ち着いた」

「おい、頼むからこと大家さん家以外の家の屋根に上るなよ？」

アシエスが夜な夜な近所の屋根の上を徘徊して通報される未来を見たような気がして、真奥は顔を顰める。

「そんなことしないヨー。私もバカじゃないんだカラ」

初耳の話だったが、それを言うとは本気で怒りそうなので心の中に留めておく。

「今何か凄くシツレーなこと考えてなかッタ？」

「お前の野性的な洞察力には恐れ入るよ。っていうか、お前こそなんだよ」

「何ガ」

「俺をわざわざこんなところに引っ張り上げて。何か話があったんじゃないのか」

「……んー。話というカ、一応報告しといった方がいかなって思っテ」

「報告？」

「ウン」

アシエスは少し眉根を寄せて、天の月を見上げた。

「ガブリエルが目を覚ましたヨ。明日の『話し合い』に一緒に連れていくことはできないみたいだけド」

「……ふーん、生きてやがったカ」

真奥はごくあつさりと言った。

「アレ？　案外普通？」

「普通っていうか、他に感想もねえし」

アラス・ラムスやアシエスの大元であるセフィライエソドの守護天使ガブリエルは、志波の指示で日本に連れてこられていた。

だが、エフサハーンでの戦闘やその他諸々の末、完全に気絶した状態で運ばれてきており、ノルドよりもずっと長い間意識不明のままでいたらしい。

らしい、というのは、ノルドとは違い、ガブリエルは志波の家に収容されたまま真奥達の前に全く姿を現さなかったたので、真奥達はガブリエルの容態を知りようもなかったし、別に知りたいとも思わなかった。

単純に、志波がガブリエルを放置して死なせるようなことがあるとも思えなかったし、真奥にとっても恵美にとっても、圧倒的な力を持っているらしい志波に保護してもらおうのが最適解でもあった。

「私はもう一回くらいメイドに送ってやろうかと思っちゃったヨ」

「いや、まだ一回も冥土には行っていないだろ。念のため言っとくが」

相変わらずアシエスは、天使相手には何かと言動が厳しい。この状態でよくもまあ、志波家で一つ屋根の下にいたものである。

「ウン、ミキティに何度か止められタ」

「止められるようなことしたのかよ」

「だってそれだけのこと、されたんだモン。私達ハ……」

アシエスは苦しそうに眉根を寄せると、膝を抱えてうずくまる。

「私とネーサマだけじゃナイ。イルオーンも、マルクトも、皆、皆……」

「アシエス……？」

「マオウさあ」

「うん？」

「何悩んでんだかしらないケド、会って話ができるうちに話しておきなヨ」

「……」

「そーじゃないと、私とネーサマみたいに、ズーっとズー……っつと離れ離れなんてことになりかねないからネ。話せるうちだよ話せるウチ」

「……ん」

明日は志波が真奥達を集めて、全ての真実を語る約束の日。

その場所が何故漆原の病室なのかは分からないが、理由はすぐに分かるだろう。

そしてそのとき、自分も何か秘めたことを話す必要性に迫られるのではないかという予感が真奥の中に去来した。

「アラス・ラムスとは、話せてるのか？」

「……ウン。タアイのないこと、オトーさんの部屋デ」

「そうか」

真奥は先程アシエスを殴った場所を、今度は優しくなでてやる。

「そんだけ離れ離れだったなら、積もる話も一週間程度じゃ済まねえだろう。ゆっくり色々話

せばいいさ。今度お前らに何か起こりそうなきは、俺や恵美が守ってやつから」

「ン……」

アシエスは、真奥にされるがままに頭をなでられていたが、ふと悲しげな瞳で真奥を見返す。

「昔……」

「ん？」

「昔、マオウと同じこと、言ってくれた人がいた……ような気がスル」

「俺と同じこと？」

「ウン。もう、ずっと昔のことだから、あんまり覚えてないケド」

アシエスは真奥の手をゆつくりどかしてから、さつと立ち上がると屋根の上からアパートの庭にふわりと着地した。

「ちよつと話せて良かったヨ。また明日ネ」

「お、おう……って、おい、ちよつとアシエス!?」

小さく真奥に手を振って志波家へ帰っていきこうとするアシエスの背に、真奥は慌てて声をかけるが、聞こえていないのかアシエスはそのままだってしまつた。

「お、俺、どうやって降りればいいんだよ」

魔力は足元にあるが、うかつに発動させては鈴乃やノルドに悪影響があるかもしれない、くても不穏な気配で叩き起こせば翌朝の苦情に繋がってしまう。

「お、降りられっかな……」

真奥は恐る恐る屋根から身を乗り出し、共用階段の頼りない広さの踊り場の足場を確認して、おっかなびっくり足から降りようとする。

「何をしているのですか、魔王様」

「うおわっ!?」

だが、突如足元からかけられた声に驚いて、足を滑らせて屋根の縁から宙吊りになってしまった。

「な、なんだよ！ 起きてたのかよ！ 驚かせんなよ芦屋！」

ふと脇を見ると、二〇一号室の窓から芦屋が眠そうな顔を出してこちらを見ているではないか。「驚いたのはこちらです。屋根の上でこそこそと音がするから何かと思つたら……魔王様ともあろうお方が屋根根に上がって夜空を見上げるなどというセンチメンタルな行動をなさると思ひもしませんでしたよ」

「何か致命的な誤解があるみてえだが、とりあえず助けろ！」

「手を放してそのまま落ちてください」

「おい!?」

「あと五センチで階段に足がつかます。離しても大丈夫です」

「こ、こ、五センチ？ ほ、本当だな。離すぞ。怪我したらお前のせいだかな！」

「……はあ」

「ふっ……っ！ おお、びっくりした」

真奥は地に足をつけてはっと一息つくが、芦屋にしてみれば主たる魔王がたつた五センチ下の足元に飛び降りるのに緊張していることに、嘆息を禁じ得ない。

「一体どうされてしまったのです。そんなにエミリアとの仕事に憂鬱ですか？」

「憂鬱だよ！ もうこれ以上ないほどにな！」

一方の真奥は、あつさりと言葉を認めた。

「本当、これはどう何をどうすりやいいか分からなくなったことは、今までなかったよ！」

「はあ……」

「もうこの際だからお前もマグロナルド来いよ！ 鈴乃やノルドやアシエスも誘って、もうエンテ・イスラから来た奴ら全員あそこで働けばいい！ 木崎さんが次代のエンテ・イスラの覇者だ！」

「ヤケを起こさないでください。一体何があったのですか」

「なんでもねえよ！ とりあえず疲れた！ 腹減った！ 飯！」

真奥は肩をいからせながら部屋に戻ろうとするが、

「魔王様。自転車をきちんと立ててからお戻りください」

芦屋が指差す先、アシエスのせいで横転してしまっていたデュラハン式号を見て、口を尖ら

せながら階段を下りていく。

「今のうちにテリヤキバーガーとポテトを温めておきます。お話はその後で」

「俺の分まで買ったのかよ！ レタスがへたるからテリヤキは温めなくていいよ！ もうなん

なんだよ！ 俺魔王だぞ！ 魔王のくせになんでこんなワケわかんねえことでグジグジ悩まな

きやいけねえんだクソ！」

真奥はぶつさ言いがたながら、それでも素直に自転車を立ててからまた戻ってくる。

明日は大切な「話し合い」の日だというのに、今夜の真奥のグチは長くなりそうな予感がして、芦屋は小さくため息をつくのだった。

※

太陽の色と気温が秋の訪れを感じさせる乳白色の壁の病室で、漆原半蔵は、決して変わらぬパソコンディスプレイのブルーライトを眺めながら顔を顰めていた。

真奥と鈴乃とアシエスが、国立西洋美術館からエンテ・イスラに旅立った日の晩。

千穂が鈍子の海の家「大黒屋」の店主にしてアパートの大家志波美輝の姪である大黒天祿から、地球やエンテ・イスラの謎を聞き出そうとしていたことには気づいていた。

千穂の言葉の端々から、漆原に二〇一号室から盗み聞きをして欲しい意図が見えたため、た

まには他人の思惑に乗ってやるかと思つた結果がこの有様である。これまで感じたことのないような衝撃が二度も全身を駆け巡り、朦朧とする意識の中、部屋に入ってきた者に対して、パソコンを一緒に運ぶと言つたのはほとんど本能に近いものがあつたと思つてゐる。

「で、何が不満なんだね。ここは漆原君にとって理想の環境じゃないのかい？」

「どこがだよ」

漆原は、ベッド脇の椅子に腰かけて、部屋のテレビを勝手につけて旅番組などを見ている大黒天様に睨みつけた。

「誰にも邪魔されることのない個室。働け働けとうるさい真奥君も吉屋君もいないし、食事は上げ膳据え膳。ニートの君にとって理想の環境だと思ふんだけど」

「ほぼ毎日天称さんに邪魔されてるし、食事は味気なくて美味しくないし、おまけにここ、モバイル回線の電波の入りが極めて悪い!! あとね、天称さんもそうだけど、世の中の人にはニートつてものを誤解してる」

「何が。一流の条件の話かい？」

天称は子供のよう椅子を斜めにしながら顔も向けずに尋ねる。

「違う。ニートとか引きこもりつていうのは、常に外向きへの自由が保障されている中で、敢えて内にいることを選んだだけなんだよ。外に出る選択肢そのものは、常に心のどこかにある

んだ」

「ふむふむ? つまりこういう旅番組を見て、たまには外に出ようとか、遠くに行きたいと思ふこともあるわけ?」

「違う。普段は外に出たくないけど、閉じ込められるのも嫌なんだよ」

「ただでさえアレなのに一周回つて途轍もないワガママだね。いっそ感心するよ」

「そういうものなんだから仕方ないだろ」

「それに、大層人間が嫌いじゃないか、まるで私が君をこの病室に閉じ込めているみたいない風に聞こえるよ?」

「似たようなもんだろ!? 僕は帰りたいって言つてんのに!」

漆原はいつかなネットに接続されないパソコンを苛立たしげにシャットダウンすると、天称の背中に噛みつかんばかりに吼える。

「でももうこの際、僕の意志で帰れないことはいいよ! 頭こんなになつてるし、きつと天称さんと佐々木千穂の話盗み聞きしたことが何か悪かつたんだろ! でももう何度聞いたか分からないけど、あんた達一体なんなんだよ! 一体僕が何を聞いたらマズかつたんだよ!」

「んー、それはもう話したじゃん、私はビナーの娘で、ミキティ伯母さんはアラス・ラムスちやんと同じようなもんだって。それに漆原君が何聞いたかはあんまし関係ないってば」

「天称さんはともかく、アラス・ラムスとあの大家さんじゃ、性別が女つてことと人間の形し

てるってこと以外何もかも違う気がするけどね！」

「あら、どこが違うと仰いますの？」

「出たあああああああああああああああああああああああああああああああ!?」
天祢に食ってかかっている最中唐突に病室のドアが開き、漆原はベッドの上から飛び上がってしまふ。

「ちよ、う、漆原君大丈夫かい？」

ベッドの柵を飛び越えて床に転落した漆原を、天祢は慌てて引き起こすが、漆原は全身を揺るがせながら天祢に縋りつく。

「き、き、今日大家さん来るなんて言ってなかったろ!?」

「あれ? 言ってなかったっけ？」

「聞いてない!!」

「天祢……」

「いや! 私言ったよ!? 言ったような気がするよ!? 三日前くらいに!」

呆れたような声は、もちろん志波美輝であり、その声色の險しさを察して天祢は慌てて漆原をベッドの上に引き上げる。

「どうせ何かのついでに適当な言い方をしたのでしよう。漆原さん、お加減はいかがです？」

「い、今、大家さんが来るまでは……良かったよ」

漆原は息も絶え絶えに答えるが、目は泳いで真つ直ぐ志波を直視できない。

「は、本当、失礼な話だとは思うんだけどさ……真奥や芦屋が大家さんのこと直視できないって言った理由が、ここんとこ、身に染みてよく分かるよ」

「それほど私が魅力的であると解釈させていただきますわ」

「うう……」

どこまでもめげない志波だが、漆原にとっては冗談でもなんでもない。

以前写真を見たときには、本当にただただ身の程を弁えない中年女性が好き放題やっている姿に嫌悪感を抱いただけなのだろうと思っていた。

だが実際に志波を目の前になると、嫌悪感どころの話ではなく、現実と体調に異変が起こるのだ。

動悸膨量ならまだいい方で、こうして相対しているだけで体の奥底から重要なエネルギーが流れ出ていってしまうような感覚すらある。

「もうすぐ皆さんいらっしやいますから、先にお知らせに上がろうかと思ひまして」

「皆さんって……?」

「真奥さん達ですよ?」

「え!? 真奥達もう帰ってるの!?」

漆原は驚き目を丸くするが、すぐに傍らの天祢を睨みつける。

「……えーっと」
天祢は漆原の視線から逃れるように明後日の方向を向いて、そのまま口笛でも吹き出しかねない勢いだ。

「皆さんお揃いになりましたら、お話するつもりです。セフィラや、セフィロト。それに、今の漆原さんの状態のことを」

「僕の……」

漆原は天祢から視線を外し、ベッドから立ち上がる。

病室の隅にある洗面台に設えられた鏡台を見て、漆原は顔を顰めた。

「まあ、これ見たら、皆ビビるだろうなあ……うつぶ」

そしてかすかな吐き気を催して、喉の奥でうめいたのだった。

※

連なった三台のタクシーから、真奥、千穂、恵美、アラス・ラムス、菅屋、鈴乃、エメラダ、アシエス、ノルドがそれぞれ降り立った。

「こっつて……」

「ああ……」

千穂と真奥は、志波の手配したタクシーが到着した場所を見上げて、顔を見合わせる。

「偶然、なの？」

「いや、まさか」

「しかし、偶然以外のなんだと……」

恵美と菅屋と鈴乃も、同じように驚いてその建物を見上げる。

「どうしたんですか？」

「何、皆どしたん？」

「この病院に、何かあるのか？」

エメラダとアシエスとノルドは、様子のおかしい五人に首を傾げるが、恵美が抱き上げているアラス・ラムスだけが、はつきりと言った。

「きたことあるー」

アラス・ラムスの記憶にもあるその建物。

志波と天祢が漆原を入院させていたのは、かつて千穂が魔力中毒に陥って入院した、西海大学医学部付属東京病院だったのだ。

戸惑いながらも、病院の中をよく知っている千穂が先頭に立って歩を進め、やがて一つの病室の部屋番号を見上げて立ち止まる。

「ここですね」

「こ、こんな個室、もし治療費を請求したらどんなことになるか……」

千穂が示す病室の扉と隣の病室の扉はかなり間隔が開いており、それなりに広い個室であることがうかがえ、あれだけ大家に金のことを気にするなと言われているにも関わらず、芦屋の顔色が一秒ごとに悪くなってゆく。

「テレビや携帯やパソコンが使える他に、シャワー付きの部屋があるって聞いたことがあります」

「魔王城よりずっといい環境じゃねえか」

真奥と芦屋は複雑そうに顔を見合わせてから、意を決して病室の扉を叩いた。

「どうぞ」

「う」

中から聞こえたのは志波の声で、真奥と芦屋はそれだけでさらに顔色が悪くなるが、

「早く聞けなさいよ」

後ろから恵美にせつつかれ、改めて大きく息を吸うと扉をゆつくりと開く。

病室の中は外の光がふんだんに入り明るい。奥には千穂が入院したときに使われていたものよりも大きなベッドが設えられ、そしてそこに不機嫌そうに座っている者を見た瞬間、ノルド以外の全員の動きが止まった。

「……なんだよ、その反応」

ベッドの上にいる漆原は、彼にとつては予想通りの真奥達の反応に不機嫌そうに呟く。

「え、あ、いや……」

真奥は狼狽えたように後ろにいる芦屋を見て、芦屋もまた、

「い、一体……」

二の句が継げない様子で漆原を凝視している。

「な、なんだ、何かの冗談か？ またルシフェルが、我々をからかっているのか？」

鈴乃もまた困ったように隣の恵美に同意を求め、

「いえ、でも、あれは冗談にしてはあまりにも……」

求められた恵美は、ふるふると首を横に振る。

「何か、私の知っているルシフェルと違うようなく」

エメラダは顎に手を当てて首を傾げ、

「るしふえる、どしたの？」

アラス・ラムスもまた、怪訝そうに顔を顰め、

「冗談さついで、それハ」

アシエスは心底不快そうに漆原の顔を睨む。

だが、当の漆原はそれぞれの反応こそ不愉快であると言わんばかりにアシエスを睨んだ。

「僕が冗談で自発的にこんなことしたと思うのかよ」

「じゃあなんだって言うのサ。悪趣味ダヨ」

「そっちの大家さんに言えよ。僕だって好きでこんなになっただけじゃない！」

漆原はベッドの傍らに悠然と立つ志波を額で指し示す。

「え、でも、本当に、どうしちゃったんですか、漆原さん」

千穂は、恐る恐る手を上げて指を差す。

「その、髪の毛の色……？」

漆原の髪の色が、誰の記憶にあるものとも違う色に変化していたのだ。

否、正確に言えば、この場の全員がその色自体には見覚えがある。

だが漆原の髪は、そんな色をしていなかったはずだ。

「僕だって落ち着かないんだよ。何もしてないのにこんな色！」

逃き通るような、青みがかった銀色。

それは、進化聖剣・片翼。を全力で振るう勇者エミリアのような。

或いは大天使であるサリエルやガブリエルのような、そんな色をしていたのだ。

「彼が……悪魔大元帥ルシフェル？」

一人、漆原のことを知らないノルドだけが今の漆原の状態を素直に受け入れていたが、芦屋がそれを横から否定する。

「違う。別人だ」

「おい芦屋！ 現実逃避すんなよ！ てかそこのおじさんどこの誰!? エメラダ・エトウツ



アまでいるし、一体何があったんだよ!?」

漆原は漆原で、顔を知らないノルドのことや、エメラダが当たり前のようにいることに抗議の声を上げるが、今はいちいち自己紹介をしていられる空気では全くなかった。

「漆原さんの髪の色の変化は、恐らく私の影響であるかと思っています。彼の人類としての本質に関わる部分が、私の存在に大きく反応したのでしよう。私の影響を離れば、やがて元に戻ると思います」

「失礼だつて分かつて言うけど、その表現すつこく嫌」

それが例え比喩表現であろうとも、志波美輝と自分が何がしか相通ずる反応をしたなどと、漆原は認めたくないし、顔色から察するに真奥と芦屋も同じことを考えているようだ。

「まあとにかく、皆さんお揃いのようですから、それぞれここでお互い腹を割ってお話するのも良いでしょう。その中で、きつと漆原さんの御髪の色のお話できると 생각합니다」

志波が場を鎮めるようにそう言い、その途端、千穂の顔つきが一気に強張る。

「千穂ちゃん?」

その様子に気づいた恵美が千穂に呼びかけるが、千穂は小さく首を横に振る。

「だ、大丈夫です」

「そう? なんだか具合悪そうだけど……」

「いえ、そういうんじゃないよ」

千穂は少し思いつめたように、恵美の瞳を見返した。

「でも、私……逆佐さんと真奥さんのこと、信じてますから」

「え? ええ……」

千穂の言葉の意味が分からない恵美は目を白黒させるが、千穂がそれ以上何も言おうとしないので仕方なく志波に目を戻す。

「さて、ここには大勢の『異世界』からのお客様がいっぱいいますわね」

志波がベッドの傍らを通り抜けながら、ゆつくりと真奥達に近づく。

真奥と芦屋は思わす身を遠ざけようとして道を空けるが、志波は二人には構わずアシエスと、そして恵美に歩み寄る。

「……なあに?」

否、恵美に抱かれたアラス・ラムスに歩み寄ったのだ。

ふくよかな手で髪をなでられくすぐったそうにするアラス・ラムスだが、恵美は、なぜか志波の表情に不安を抱いた。

先ほどの千穂の表情がそれに重なり、思わず隣の千穂をもう一度見てしまう。

すると千穂は、これから志波が言うことを予め知っているかのように息を詰めていた。

「歴史に目を向ければ異なる世界同士の人間が行き来するのは決して珍しいことではありません。土地を越えた異なる国、海を越えた異なる大陸間の人の行き来もまた、異世界の人間同

士の交流と言って良いでしょう。皆さんの場合、それが少しだけスケールアップしただけのことです。真奥さん達がこの日本、地球に滞在したり、佐々木千穂さんが真奥さん達のエンテ・イスラに行くことも、なんの問題もないことだと先に申し上げておきます」

だが、志波の言葉の続きを、誰もが確信した。空気が、瞳が、そう言っている。

「ですが……このお二人だけは、出来るだけ早急にお戻りいただかなければなりません」

「二人……って」

悪い予感を覚えて、声を絞り出す真奥に対して、志波ははっきりと言った。

「アラス・ラムスさん。そしてアシエス・アーラさん。エンテ・イスラのセフィラ・イエソドの化身であるお二人が今この場にすることは、エンテ・イスラの人類にとって、とても危険なことです」

「何故ですか？ 如何なイエソドが世界組成の宝珠と伝えられているとはいえ、彼女達は長い年月を、ずっと欠片のまま過ごしていました。しかしエンテ・イスラには何も異常は起こってはいません」

狼狽した声を上げたのは鈴乃だった。

かつてアラス・ラムスをイエソドの守護天使たるガブリエルに返すか否かで真奥達が論争したとき、真つ先にセフィラの世界組成の宝珠としての伝承を否定したのが鈴乃だった。

たった一つの宝石がどうこうなったからといって、世界の構造に訴えかけられるはずもない。

月を司るセフィラ・イエソドが消滅すれば、月も消滅するのか。司る宝石である銀が、消滅するのか。そんなはずはない。鈴乃はそう言っ、アラス・ラムスを元いた場所に返す意義を否定した。

「鎌月さん。異常はない、と仰いましたか？」

「は……」

鈴乃はさらに言い募ろうとして、志波の視線の迫力に思わず息を呑んだ。

「ならば、あなたのその力は、なんでしょう」

「わ、私の力？」

鈴乃は思わず、己の体を見下ろす。

「天祢や、佐々木千穂さんから伺いましたよ。あなたが異世界の悪魔と戦闘を繰り返した際に負った傷が、わずか三日で完治してしまっただと」

「そ、それは単純に治療の技術を用いたから……」

「ではお聞きします。鎌月さんは、この日本で、地球で、そのような力を目にしたことがありますか？ 全身を横切るほどの刀傷をたった三日で完治させてしまうような、そのような力を。もし同じ傷をこちらの佐々木千穂さんが負えば、普通なら命を取り留めたとしても一月は完全看護が必要になるでしょうね」

「だからそれは」

「まだご理解いただけないのですね」
志波は、鈴乃に向き直り、言った。

「あなたが仰った『治療の法術』、そのものが問題なのですよ」

「……は？」

「私はあなたの方の世界、エンテ・イスラの歴史を存じません。ですが、佐々木千穂さんやノルドさんのお話を伺うに、かなり成熟した文明と多くの人々が満ち溢れた世界のご様子。それなのに、未だそのような力が世界に当たり前に残っている。もしこの子達セフィラがエンテ・イスラで正常に働いていれば、そんなことは決してなかったはず」

「一体どういうことですか？」 志波さんのお話を伺っていると『法術』そのものがあつてはならない力という風に聞こえますが……」

エメラダの不安げな声に、志波はあつさりと言き、そして、

「もつと言えは」

場にいる全員を、視線で輝ぐ。

「聖法気」と『魔力』が未だ世を席巻していること自体が、エンテ・イスラの人々にとって好ましい状態とは言えません」

「どういうことですか？ まさか本当に、世界組成の宝珠が世界のバランスを保っていて、失われると世界が減びるとでも……」

「鎌月さん、人の話はよくお聞きなさい。私は一度も、エンテ・イスラという『世界』が危険だと言った覚えはございません」

「……は？」

志波は悠然と、鈴乃の肩に手を置いた。

「セフィラの喪失と『聖法気』と『魔力』がいつまでも存在することで危険が迫るのは、あなたの方。『人類』に対して」

「人……類？」

鈴乃はまだ、志波の真意がはつきりと把握できていない。

だから恵美や、エメラダや、ノルドや、さらには皆屋や漆原、真奥、そして千穂にも、助けを求めるように視線を送る。

だがその誰もが、戸惑ったように首を振り返すだけ。

「セフィラがどんな状態にあったとしても、エンテ・イスラの海や空や大地、それに生きとし生ける全ての動植物には、なんの影響もございませんわ。セフィラとセフィロトが関わるのは、あくまで人類のみ。もしこのままアラス・ラムスさんとアシエス・アーラさんが然るべき場所に戻らねば、エンテ・イスラの人類はそう遠くない未来に滅びることになるでしょう」

その内容の重さに比して、あまりに淡々と告げられたためか、滅びを予見されたエンテ・イスラの人類達は、いまいピンと来ていない様子だった。

「もちろんそれは明日、明後日のことではありません。きつとあなた方が寿命を終えられる頃になっても、一見エンテ・イスラの人々にはなんの影響も出ていないように見えるでしょう。ですが……百年後。或いは二百年後もそうであるかどうかは、私は保障いたしません」

「ひ、百年後!?」

百年という月日は、人が生き、世界が変遷するにはあまりに長い時間のように思える。

だが、人類の歴史上を俯瞰すると、百年という月日はあまりにも短い。

ましてこの場には、寿命が百年どころか千年を数えようかという悪魔すらいるのである。

「お、大家さん、私には、たった百年でエンテ・イスラの人間が減びるとはとても思えないのですが……」

その芦屋が恐る恐る進言すると、志波は小さく頷いた。

「そうでしょうね。ですが今のままならば五百年……いえ、三百年持つかどうか、怪しいところではないかと私は考えておりますのよ。巨大隕石が落下するようなことにでもなればまた別ですが、もしそのような壊滅的天災が発生しなかったとしても、今のまま聖法気や魔力を使い続けている限り、エンテ・イスラの人類に未来はありません。いずれ人類は緩慢に数を減らし、そしてなんら手を打つこともできずに滅びるでしょう」

「一体どういうことなんでしょうか。セフィラと人類の因果関係が分からなければ、はいそうですか、アラス・ラムスを向こうに返したりはできません」

志波の語る空気に皆が呑まれる中、一人恵美だけが、毅然と志波に問う。

「この子とアシエスは、私の……ここにいる皆の宝です。彼女達が元いた場所、というのは、つまりはエンテ・イスラの世界のことです。エンテ・イスラの人類やこの子達のことなんかはとも思っていない、天使達がいる場所です。そんな所にこの子達を返すことなんて、私には絶対できません」

「その天使ですが……先日、ガブリエルと仰るあの青年が目覚ましして」

「ガブリエルが?」

「彼が、少し困ったことを仰っていたのです」

志波は小さくため息をついて、話題を変える。

「彼、ガブリエルは、目を覚ましてすぐに天界に逃げ帰ろうとなさいましたの。覚醒が唐突でしたので危うく逃げられそうになりましたが、彼にとつて不幸な出来事のせいで、逃亡は成りませんでした」

「不幸なこと?」

志波の家で志波に看病されること以上に不幸なことがあるのかと真奥と芦屋は目だけで会話をしているが、もちろん声には出さない。

「エンテ・イスラの『天界』。すなわちアラス・ラムスさんとアシエスさんの帰らなければならぬ場所が、閉ざされてしまったということです。外部からの干渉を一切受けつけず、ゲート

で戻ることができなくなつたと。もしかしたら『彼ら』はこの子達を諦めて切り捨てるつもりなのかもしれません」

「天界が閉ざされた……そういえば、今まで気にしたこともなかったけど……」

恵美がふと、あることに気づいて、真奥を振り返る。

「ねえ、魔王」

「あ？」

「魔界って、どこにあるの？」

「……あ？」

真奥は、とんでもなく間抜けな質問をされた顔で、恵美に尋ね返す。

「お前、それ本気で聞いてんのか？」

「何よ。当たり前じゃない」

恵美はむっとした顔をする。

「天国と地獄の模式図みたいに、実はエンテ・イスラの地面の下にあつたりするの？ それと地球とエンテ・イスラみたいに、実は異世界同士とか……」

「ンなわけねえだろ。なんだお前、本当に知らなかったのか」

真奥は困惑したように、芦屋と漆原を見る。

「そういえば、別に誰かに場所を宣言したことなどありませんでしたね」

「誰かに聞かれたこともなかったしねー」

芦屋と漆原も、今更のように肩を竦めて頷いた。

「まあ知られたってどうこうなるもんでもないけど……月だよ」

「え？」

「……」

恵美は息を呑み、その隣で千穂が誰にも知られることなく小さく拳を握る。

「え、じゃねえよ。月だよ。エンテ・イスラから見たら赤い方。魔界があるのは、赤い月だ」

「月……月だと!? で、では……」

「うん。天界があるのは、青い方だよ」

驚愕する鈴乃に、漆原はあつさり頷く。

「異世界、というの言い得て妙ですわね」

志波は驚く恵美と鈴乃を尻目に、さっと病室のカーテンを開ける。

窓の外からは明るい陽射しが降り注ぎ、西海大学病院のある代々木の街のビル群が、天をつけとばかりに伸びているのが見えた。

「地球も、エンテ・イスラも、そしてありとあらゆるセフィロトの大地は、決して空間や次元時間を超越した異空間にあるわけでもなんでもありません」

東京の青空を振り仰ぎながら、眩しそうに陽射しに手を伸ばした。

「地球も、エンテ・イスラも、この空の延長上に存在する宇宙に浮かぶ、人類の住む星の一つなのですよ」

「……そうだったの……」

恵美は思わず嘆息する。

日本に来てからずっと、薄々思っていたことではあった。

自分はアシエスのように天文台まで行って夜空や宇宙のことを学んだりはしなかったが、それでも地球が宇宙に浮かぶ惑星であることを知る機会はいくらでもあった。

大地が途方もなく巨大な球体であることや万有引力の理屈も、テレビや映画、ネットを見れば自ずと身につく知識だ。

ならばと自分の故郷を思い出せば、姿形の同じ人類がいて、呼吸に支障のない大気があり、夜空には無数の星が瞬いている。

エンテ・イスラもまた、宇宙に浮かぶ惑星なのではないかという思いに至るのに、長い時間はかからなかった。

だがそれでもそこまで想像が至って尚、月に魔界や天界があるなどということは考えもしなかったし、その事実自体は、恵美自身の周囲を何か大きく変える情報でもなかった。

ただ曖昧模範とした『異世界』という言葉に明確な定義が与えられただけであり、いずれにしろ地球とエンテ・イスラが飛行機や電車や徒歩で行ける場所ではないという事実が変わりは

ないのだ。

翻って、天界にゲートを使っても通り着けない、という情報は、ガブリエルのことはともかく、それだけ聞けば恵美達にとっては朗報のようにも聞こえる。

一貫して恵美やアラス・ラムス達と敵対してきた天界からの接触が、向こうから断たれたのだ。

だが志波の表情は険しい。

「セフィラが正常に機能するためには、全てのセフィラが揃っていなければなりません。アシエスの話を聞くと、もう何百年という年月、イエソドだけが他のセフィラから隔離されていた様子。これでは他のセフィラ達に、どんな悪影響が出ているかも分かりません」

「他の、セフィラ……」
 芦屋の呟きで真奥達の脳裏に去来したのは、セフィラゲブラーの具現である少年、イルオーンだった。

イルオーンは天界に使役されている様子だったが、彼を使役していたはずの守護天使カメルやアシエスの様子を見ると、どうも本来の意味でカメルとイルオーンの間には使役関係が成立していなかったと思われる。

エフサハーンでの戦役で、ただ一人イルオーンと接触した芦屋は、腕を組んで志波に問う。

「大家さん、その、悪影響というのは？」

「さて……イエソドが不在であることの悪影響は、『法術』という形で既に見えています、それ以外のことは実際に見なければつきりとしたことは申し上げられませんが、見たところ私達にできることが何もないので、こればかりは皆さんにお任せするしか……」

「言っただけ言っただけいきなり突き放すようなことを言う志波に真奥は顔を曇らせるが、その真奥を遮ったのは天祢だった。」

「しやーないじゃん、ミキティ伯母さんは、地球のセフィラだもん。本来地球の人達のために使う力しか持っていないんだよ」

「セフィラ……そういえば、本当なんですか。その、大家さんがアラス・ラムスやアシエスと同じだって……」

真奥は半信半疑で聞くと、志波はあっさり頷いた。

「私自身はイエソドではありませんし、役割も他のセフィラ達と微妙に異なりますが」

「伺ってもよろしいか。どの、セフィラなのですか？」

これは鈴乃の問いだ。

十あるセフィラのうち、志波がどの位置にあるセフィラから顕現した存在なのか分かれれば、検証材料としてこれほど価値のある情報はない。

だが、志波の回答は、鈴乃の想像を言葉通り一歩超えたものだった。

「私は、十一番目のセフィラ」

「……じゅう、いち？」

鈴乃は目を瞬かせた。彼女の知識にない数字だったからだ。

聖典の語る世界組成の宝珠セフィラは全部で十のはずだ。

「……十一番をご存知ない。既にエンテ・イスラに悪い影響が出ている中でも、それが一番問題なのでしょうね。アシエスも、十一番を知りませんでしたし」

「そう言われても、いないもんはいないからネ」

アシエスはあつからんとしているが、全く別方向からその数字に対して反応した者がいた。

「十一番目のセフィラ……なんだっけ、僕誰かからその話聞いたことが……」

「漆原？」

「あ、そうだ思い出した。サタンに聞いたんだ」

「え？ 俺？」

昨夜の夕食の献立を思い出すような軽いノリでそんなことを言い出した漆原に、真奥は狼狽

える。

「俺お前にそんな話したことあったか？ カミミオとかじゃなくて？」

真奥自身、セフィラの伝承は思い出せない程昔に悪魔大尚書カミミオに教わり、エンテ・イスラに攻め入った後は大法神教会の聖典を読む機会があり、そこで知識を補完したが、あく

まで自分の知識欲のためであつてそのことを何かに生かしたり、誰かに伝えた覚えはない。だからそう言つと、漆原はぼたぼたと手と首を横に振つた。

「違ふよ、真奥じやなくて」

「『古の大魔王、サタン』」

三人の人物の声が重なつた。

一人はもちろん漆原だ。

もう一人は、なんとアシエスだつた。

そして最後の一人こそ、誰よりも意外な人物だつた。

「千穂ちゃん？」

恵美や他の皆も目を丸くして千穂を見た。

「んえ？」

「チホ？」

声を揃えていた漆原とアシエスも、驚いた様子で千穂を見る。

「え？ 佐々木千穂、なんで？ 真奥、何か話したの？」

「いや……」

全員が驚く中、真奥は漆原の問いかけに首を横に振る。

志波と天祢、そして真奥だけが最初の驚きに吞まれることなく千穂を注意深く観察する。

「じゃあなんで佐々木千穂が『古の大魔王』って呼び方を……」

「私としてはアシエスの方も気になるが……佐々木さん、一体どこでその言葉を？」

芦屋はアシエスと千穂を交互に見ながら問う。

すると千穂は、芦屋をすつと見た。

「さ、佐々木さん？」

だが芦屋は千穂の表情に違和感を覚えた。

エンテ・イスラの者ではない故か話に入ってくるもののなかった千穂は、先ほどまで皆の話

を真剣な顔で聞き入っていただけだつた。

だが今の千穂の表情は、なんというか、場にそぐわないのだ。

真剣な表情ではあるのだが、どこか虚ろで、それでいて不思議な余裕を漂わせていた。

「知っているんです。私、古の大魔王サタンのこと」

「ミキティ伯母さん。これって……」

「ええ、恐らく」

耳に聞こえているのに臆に消えてしまいそうな言葉を発する千穂の様子を見て、天祢が全身に緊張をみなぎらせるが、一方の志波の様子には特に変化はない。

「……何を知ってるんだ!? ちーちゃん!!」

真奥の鋭い声が、室内全員の耳目を集めた。

真奥は千穂の様子に緊張している天祢と志波に向かって右手を出して制止する。

「少し静かにしてしてくれ。前にもこんなことがあったんだ」

そして漆原、エメラダ、ノルド、アシエスに向かってゆっくりそう言い、下手な動きをしないように暗に示唆する。

「今何か、俺達に伝えることがあるんだな?」

「ええ」

そして千穂が、真奥の問いに茫洋と答える中、

「[「……」]」

真奥の最初の鋭い声で違和感から立ち直った恵美と芦屋と鈴乃が真奥の左手がかすかに動いていることに気づく。

「[「……」]」

そして三人は、千穂の視界の外でさっと視線を合わせる。

「[「……う?」]」

「どしたの? オトーさん?」

そのときエメラダの後ろで、ノルドが顔を顰めて喉の奥で唸り、アシエスがその様子に目ざとく気づいて声をかける。

「あ、いや、少しだけ眩暈がな。なんでもない大丈夫だ……」

真奥は一瞬だけ視界の端でノルドのその様子を捉えてから、改めて千穂に問いかけた。

「話してくれ。何を知ってる?」

千穂は恵美と芦屋と鈴乃の様子には気づかず、ゆっくりと口を開き、

「セフィラの十一番目。それは『大魔王』と呼ばれたあるてん……」

話のように語りはじめたその瞬間だった。

「かかれっ!!」

真奥が唐突に号令をかけた。

その瞬間。

恵美と芦屋と鈴乃が、弾かれたように動き出す。

芦屋はすぐ背後にあった観音開きのクローゼットを、鈴乃はユニットバスルームの引き戸を。そして恵美が、病室の入りの引き戸に取りつきそれぞれ一気に引き開けた。

「ひやつ?」

小さな悲鳴が重なる。

恵美が、当たった。

病室の扉を叩き開けた恵美の目の前には、一人のナースが心底驚いた表情で目を見開いて立っていた。

小さな悲鳴は、このナースが上げたものだ。

だが今、ナースと千穂の悲鳴は重なっていた。

「逃がすな恵美!!」

「ひあっつ!!」

「ひ……ふあ?」

真奥に言われるまでもなく、恵美はそのナースの襟を引っ掴むと、むち打ちになるのではなく、いかという勢いで病室の中に引つ張り込む。

何が起こったのか理解が追いついていない様子のアシエスやノルドが驚く後ろで、千穂が夢から醒めたように、間の抜けたため息をついた。

「な、な、な、なんですかあ!」

見舞い客の突然の凶行にパニックを起こしているナース。傍からはそうとしか見えなかった。だが恵美はナースの後襟を掴んだまま離さないし、鈴乃は病室入り口に、昔屋は病室の窓にさっと移動して「逃げ道」を封鎖する。

「何をするんですか! 人を呼びますよ!」

「おお、呼べるもんなら呼んでみろ」

喚くナースを睨みながら、真奥は据わった目でゆっくりと近づいていく。

清潔そうな薄い水色の白衣に身を包んだ、二十代後半と思しきナースは、慌てた風で恵美から逃げようとするが、

「この部屋ん中には、かすかに魔力を煙らせてある」

真奥のその言葉で、動きが止まる。

「聖法気持ちはともかく、そこのおっさんは気分が悪くてくらくらしてるようだぜ? まして普通の地球人じゃ、入ってきた瞬間から動悸息切れ眩暈倦怠感から逃れられねえはずだ。随分、あんた強いみてえだな」

「……………」

「この前の『録音』とは訳が違う。さっきのちーちゃん俺ときちんと『会話』してた。すぐ近くにいるとは思ってたが、いくらなんでも酷いぜ、これは」

「……………」

恵美に掴み上げられたままのナースは、真奥の言葉を聞いて急に大人しくなり、そして目だけで室内に集う人間をゆっくりと見回す。

「……あれ? あれ!? ゆ、遊佐さん!? 何してるんですか!」

一瞬の緊張に割って入った千穂の間の抜けた声。

それが合図だったかのように、ナースの体から力が抜け、がっくりとうなだれる。

「……下手打ったあ……」

そして人が変わったようにそう言った。

その言葉にイラついたように、真奥が拳を握る。

「殴るぞ」

「私はあなたに女を殴るような精神を教えたつもりないんだけど」

「俺が魔王になったことくらいは知ってんだろ。それに男女平等って言葉は、こういうときの
ためにある」

「違うと思うんだけどなあ……」

「魔王様。その女が、佐々木さんを？」

「へ？ 私がなんでですか？」

芦屋の間に千穂が目を瞬かせ、真奥は小さく頷く。

「何者なのこいつは。魔王あなた、千穂ちゃんを遠くから操るようなフザけた奴に心当たりがあるわけ？」

恵美もまた、厳しい声色で自分が捕まえたナースを睨みつけた。

恵美と同じくらいの身長に、病院関係者らしく纏めた黒髪を後ろで沢山のピンで止め、緑色の業務用マスクをかけている。

一見すれば、なんの変哲もない普通の日本人だ。もちろん知っている顔ではない。
だが。

「恵美」

「何」

「確かにフザけた奴かもしれないねえが、お前は『こいつ』とか言ってやんな」

「は？」

訝る恵美を横目に、真奥は語りかける。

「おい、俺が言っているのか？ いいならいいんだが」

「……参ったなあ」

その瞬間、ナースの声がはっきりと変わった。

「!!」

その声を聞いてはっと顔を上げたのは、真奥の魔力に当てられて顔色を悪くしていたノルド
だった。

「まさか……」

ナースは少し悲し気にノルドの方を見てから、

「あっ!?」

唐突に全身から光を放ちはじめた。

「惠美、放すなよ！ 芦屋、鈴乃、逃がすんじゃないぞ！」

「え、ええ!? 何、なんなの!？」

「は、はあ」

「う、うむ」

困惑する三人をよそに、

「逃げたりなんかしないよ」

涼やかな声が、光の中から現れた。

「つつ!?」

惠美が息を呑み、

「な……っ!!」

ノルドが驚愕でうめき、

「ああっ!!」

エメラダが指を差して声を上げ、

「あれ、まま？」

アラス・ラムスがふわりと呟く。

流れる蒼銀の髪と緋色の瞳は、ガブリエルと同じ、天界の天使である証である。

だがそんなことは、この場に於いては些末なことであった。

その面差しに、誰もが釘付けになっていた。

「……こんなみつともない感じで、ごめん」

襟首を掴まれ吊るし上げられたままの美しい天使は、決まり悪そうに微笑んで見せた。

「面倒なときに面倒な奴が出てきやがったな」

真奥は顔を顰めつとも、どこか懐かしそうにその天使を見る。

「覚悟しろよ。全部吐き出すまでは飯も食えないと思え。ここにいる奴ら全員、いい加減お前

に振り回されつばなしなんだからな」

「うん……分かってへぶっ!!」

真奥の忌々しそうな、だがかすかに優しさの混じった気持ちに応えようとしたその言葉を、

乾いた音と、直前までの神々しさが台無しなうめき声が潰した。

その天使の後襟を吊っているのと反対側の平手で、惠美が頬を叩いたのだ。

「……」

「お、おい、惠美？」

「え、エミリア! 待ってくれ! 彼女は……」

真奥とノルドが惠美の唐突な行動を諷めようとして、

「……」

「ひっ!!」

能面のような張りついた表情と、これまで見たことがないほど据わった目に睨み返されて、魔界を統べる悪魔の王と実の父親は悲鳴を上げてしまう。

「え、あ、あ、あの」

一方の叩かれた方は、何が起こったのか分からずキョトンとして恵美を見た。見たのだが、

「あのね、エミぶエツッ」

自分を吊り上げている恵美に何かを話しかけようとして、また平手で遮られる。

「菌あ食いしりなさい」

「あ、あの、その、ちよっと待つべうっ!!」

「待つけないでしょ」

「お、お願い、ちゃんと全部話しかあぶうっ!!」

「何を話されても、私が易々と心を許すと思わないことね」

「あ、あの、お願い、話を聞いてふえぶっ!!」

「聞くわよ。ただ聞いた後は、もっと酷いことになるわよ。それくらいのことを、私はされたと思ってるんだからね」

「あ、あなたには本当に申し訳ないと思ってるわ! 思ってるから、後で何されてもいいから、お願いだから放して! あとピンタはやめひんっ!!」

何か一言言う度に乾いた張り手の音が病室に響き渡り、恵美の絶対零度の視線と完全に泣きが入ってしまった天使の懇願が何往復もしてから、

「恵美! 恵美! やりすぎ! やりすぎだ! 話せなくなる! 顔が子供向けアニメの虫歯の子みたいになってる!!」

「エミリアア! 落ち着いてくださいー!!」

「遊佐さん! ダメです! それ以上はダメです!!」

「ネーサマ、見ちゃだめだからネ?」

「なにー。またちなにしてるのー」

「え、エミリア! エミリア! 今は、今は抑えてくれ! 頼む! 父一生の願いだ!」

無表情に往復ピンタを統べる恵美を真奥とエメラダと千穂が全力で止めに入り、アシエスはアラス・ラムスの視界を遮って恵美の凶行をひた隠しにし、そしてノルドは、恵美が放そうとしない後ろ襟首を掴む腕に縋って仲裁に入った。

「あふうううう……」

ようやく凶行が止まったときには、美しい女天使の顔はナポレオンフィッシュとロウニンアジが混ざったような有様になっていた。

「……………」

慮るな目をしたままた左手のピンタの仕草が止まらない恵美をエメラダと千穂に任せて、真奥

は天使に言った。

「おい、本当お前、悪いこと言わんからきちんと知ってること一から十までこまかさずに全部話せよ？　そうでないと、多分今のあい、つ相手に俺達がお前を守り切れねえ事態が発生し得るからな？　下手したら殺されかねんぞ？」

「はい……」

ノルドにその肩を支えられて、涙交じりの声で小さく頷くその声は、真奥の記憶にあるよりもずっとか細く頼りなく聞こえた。

真奥は嘆息して、がつくりと肩を落とす。

「あんた本当、訳分かんねえとは昔から変わらん」

虚ろな記憶の底から、速い未来に悪魔の王として魔界に君臨することになるなど夢にも思わず朽ち果てようとしていた、幼い悪魔の記憶が蘇る。

「久しぶりだな。ライラ」

赤い月の上で出会った小さな悪魔と美しい天使は今、青い星の上で再会を果たしたのだった。

作者、あとがく — AND YOU —

新しい環境に飛び込むのって、緊張しますよね。

学生時代ならクラス替えや、転校、進学はもちろん、学習塾に行ったりアルバイトを始めることもあるでしょう。

社会に出れば新しい動機先や部署に入ったり、住む場所が変わったりします。

新しい環境に身を置くことになる度に、まだ見ぬ先のことを思い悩んだり、緊張して眠れなかったりといった経験は、誰しもあるのではないのでしょうか。

「はたらく魔王さま！」という作品が世に出る前、電撃小説大賞の最終選考に残ったと電話をもらってから、実際に編集部へ赴くまで少し間があります。和ヶ原はその間、これから一体何が起ころうと毎日意味なく緊張して、仕事で普段絶対しないようなミスをしたり、体調崩したりしていました。

初めて編集部に行った日のことは忘れられません。約束の時間の二十分も前に編集部に入るビルに到着してしまい、時間を潰そうとする間に緊張のあまりたった十五分の間で四回も近くの新宿中央公園の公衆トイレに駆け込んで、フルスロツトルで用を足したものです。

それから「はたらく魔王さま！」の第一巻が世に出るまでまた緊張の日々の再開。続編を書

くことでまた緊張。またそれが世に出るまで緊張、ということを繰り返しながら、気がつけば「はたらく魔王さま！」は本書で十一巻を数えるまでになりました。

新しい物語を書く度に、あの最初の緊張を忘れずに大切に書くことができているかどうか不安になることもあります。今回もこうして皆さんにお会いできたということは、まだ初心を忘れてはいなかった、ということなのでしょう。

本書が皆様のお手元に届くのは二〇一四年の五月。春は出会いの季節とも申しますし、五月病などという言葉もありますから、新しい環境に慣れられるか慣れられないかの一つの分水嶺かと思っています。

今回のお話は、これまでとは全く違ってしまった新しい環境に戸惑い、どう適応するべきなのか悩みながら、結局適応するしないで悩むことよりも今日と明日の飯を食うことを優先して動き回る奴らのお話です。

これまで「はたらく魔王さま！」の作品に施されていたいくつかの封印が、本書を境に解放されます。

新たなステージに突入した「はたらく魔王さま！ 11」をお楽しみいただき、また次巻でお会いできれば幸いです。

それではっ！